

お寺の社会性



－ 生臭坊主のつぶやき －

竹中尚文

はじめに

最近、大手スーパーが葬儀業に参入するに際して、お葬式のお布施の額を明示しようと言う話があった。お葬式のお布施は、何故あんなに高いのだという声を受けてのものだと思う。お葬式についての時給換算をすればお布施はべらぼうな値段だという声があつてのことだと思う。この動きにお寺は、戦々恐々とするばかりであった。

そもそも、お布施が坊さんの収入という考えに対して何も反論できない坊さんというのはどうだろう。坊さん自身がお布施を自分の個人的収入と考えているのだろう。たとえば、病院の手術費を時給換算して不満を述べる人はいないだろう。それは、手術費が執刀医の収入とは誰も考えないからだだろう。ところが坊さんはお葬式のお布施をそのままポケットに入れて、坊さんの個人的収入とすることが多いようだ。こうした状況でお葬式のお布施は高いと言う声となっていると思われる。

一方で、お布施に基準額を求めるのは払う側の都合でもある。時々、いったいどれだけの額のお布施を払えばよいのか尋ねる人がいる。そんな時、私は尋ねる人が経

済的に余裕のある人だろうと思う。経済的な余裕のない人は、いくらだと言われても払えないものは払えないのである。

今、お葬式の坊さんは必要ないという動きもある。お葬式に坊さんを頼みたくない気持ちも分からなくはない。それは坊さんが、お葬式の中で本当に必要な存在になり得ているかを問われているのである。さらに言えば、お寺や坊さんは社会的に必要な存在であるのかと言うことが問われている。私たち僧侶は、現代社会に於いてその存在意義が問われているように思う。一方で、何百年も続けてきた坊さんやお寺が、無くなるはずがないと言う人たちもいる。

私は社会の中で存在意義を無くした坊さんやお寺は消えゆく存在であると思っている。今、坊さんが自分たちの暮らす社会の中で、自分の存在意義を語れずにお布施のみを求めれば、社会的には消えてゆく存在であろう。

1. ある尼僧

今回、私は社会的存在としての僧侶やお寺というようなテーマを語るのにアメリカ人の僧侶の話をしたい。

私が、ジェニファー・リー(仮名)に出会

ったのは、アメリカ合衆国のバークレーにある仏教大学院の寮であった。北米大陸での仏教伝道に興味を持っていた私が暫く滞在させてもらった寮で、彼女は修士論文を書いていた。修士課程を修了すれば、日本に留学して得度をして僧侶になるという。

浄土真宗本願寺派がアメリカ開教を始めてから 100 年を超える。現代は、開教と言っても日本から開教使が渡ると言うのは少数派になっていて、アメリカ生まれの人が僧侶となっていくのが主流になっている。教団が北米に仏教大学院の修士課程を設立していて、そこで仏教や真宗についての教育を行う。加えて、日本語教育もする。修士課程修了後は日本に留学して、さらに僧侶としての仏教知識を学び、經典の読誦やいろいろな仏事作法を習うのである。そうして、得度式を経て僧侶になっていくのである。

少し余談になるが、このシステムで僧侶を養成することに、教団の経済的負担は小さくない。また本人としても個人的に時間と費用のコストは小さくない。アメリカで浄土真宗の僧侶になるには、修士のキャリアと二カ国語の習得は不可欠なのである。この状況で、僧職という人生の選択をする人は少ない。人生の投資とそのリターンを考えると、もう少し実利的な人生の選択をする人が多い。ここでも人材難である。

2. 高校を卒業して

話を戻そう。それから程なくして、彼女は日本に留学してきた。受け入れは、宗門系の龍大であった。半年か一年と言う比較的短い留学であった。それは、彼女の経

済状況が奨学金頼みのゆとりのない状態であったこともあるし、日本で仏教の研究を深めることより、早く得度をして僧侶になりたいということもあった。

短い留学の間に、彼女を私たちの寺に招待した。普通の田舎寺で僧侶として現場を体験してもらいたいと言う目的であった。田舎の空気を吸いながら、ジェニファーがオクラホマ出身であること初めて言った。田舎の景色に懐かしさを感じたらしい。

彼女は、オクラホマ州の田舎で高校を卒業した。自分の家庭には、彼女が大学進学をするような経済的余裕なんてなかったし、かといって田舎町で就職先もなかった。だから高校を卒業すると直ぐに、彼女は海兵隊に入隊した。

海兵隊では沖縄を中心に 6 年を過ごした。この 6 年は相当にきつかったらしく、「これを越したのだから」と言う彼女の生きる自信になった。この期間に貯めたお金で彼女は大学に入学した。卒業後、仏教大学院の修士課程に入った。その頃、例の 9.11 テロがあって、アフガン戦争とイラク戦争と続いた。報道に登場するアメリカの兵士は、ほとんどがジェニファーのようにアメリカの聞いたことの無いような田舎町の出身者であった。彼女もこの時に海兵隊に在籍していれば、イラクで戦っていたかもしれないし、アブグレイブに居たかもしれない。そうならば、彼女は除隊して大学進学という人生の選択をできただろうか。どんな時に何処にいたと言うちょっとしたタイミングの違いで、人生は大きく異なることがある。

3. なぜ従軍僧なの

彼女は僧侶となって、再びアメリカ軍に戻るのが希望だという。いわゆる従軍僧になりたいと言う。ここで、私は Chaplain という言葉を従軍僧とした。このチャプレンという言葉は、従軍僧の他に教誡師、あるいは病院とかで心のケアに携わる宗教者をさす言葉でもある。キリスト教文化を背景に持つ言葉である。キリスト教の現世に対しての関わり方を反映する言葉である。日本では教誡師は仏教僧が多かったので、それは仏教的背景を持つ仕事である。私は、学生時代に仏教を学んだ。その時に教誡師になるための講座が開かれていたが、私は教誡師という言葉すら知らず、その講義を受けることはなかったことを悔やんでいる。

従軍僧については、日本の自衛隊にはこのような職種はない。だから、ジェニファーが従軍僧になりたいと言った時、私は従軍僧というものを理解していなかった。第二次世界大戦以前の日本軍には従軍僧は存在した。私が聞いた当時の様子では、兵士が死亡すると戦場でお葬式をする。その主な役割が従軍僧であったようだ。

ジェニファーはアメリカ軍史上初めての、仏教従軍僧である。彼女は、アジア系アメリカ人として仏教の話ができる従軍僧になりたいのだそうだ。彼女の話によれば、今のアメリカ軍はアジア系の人たちが増えているという。そんな人の助けになる仕事がしたいのだそうだ。

彼女は得度を済ませて僧侶となってアメリカに帰った。浄土真宗の北米教団とアメリカ軍は彼女の従軍僧になりたいと言う希望を聞き入れた。北米教団の上部組織である本願寺の議会でそのことが取り上

げられた。ある議員が、戦前の教団が戦争協力をしてきた歴史を振り返って、今また教団が従軍僧を養成し軍に送り込むことに、過去の反省が見られないと言う指摘があった。大切な意見である。平和を説く仏教の教団がかつての大戦で戦争遂行に協力したのだから、しっかりと反省をしなくてはならない。

今、彼女は従軍僧として海軍にいるそうだ。航海の中で、自らの命を絶つ兵士もいる。戦場に赴くのため、他者の命を奪うのである。人間の命を絶つことは、簡単に整理のつく話ではない。命を感じることの重み。彼女はその場に身を置いている。

戦争協力だと受け取る人もいるだろうが、そこに身を置いて僧侶の仕事をするのは、大切な事だと思う。仏教用語で人間世界を娑婆と言う。迷いの世界である。善悪の判断も出来ないところである。私も善悪、是非のはっきりしないところに身を置く僧侶でありたい。

時として、世界大戦中の日本のように戦争反対を唱えることも困難な状況がある。その中で、戦争反対を唱えることは尊いことである。山に籠もったり、寺の中で厳しい修行をする僧侶もいる。立派だと思う。私が得度をして僧侶になったとき、坊さんになるのに厳しい修行をしたいへんですねえ、と声を掛けられたものだ。頭をかきながら私は生臭坊主ですから、と答えたものだった。閉ざされた清浄な環境の中で僧侶としているより、娑婆世界と言う人間の世界に生きる僧侶でいたいと思った。

私は生臭坊主なのである。

お寺の社会性

式

— 生臭坊生のつばやき —

竹中尚文

はじめに

年が明けて、1月15日に藤原さんが亡くなった。第二回用に別の原稿を書いていたのだけれど、今回は藤原さんとの話を書きたいと思ったので差し替えることにした。

1. 藤原敏弘さん

藤原敏弘さんは満53歳であった。肺癌だった。職業は葬祭業だった。数年前に私の父親の葬儀を藤原さんをお願いした。30数年前に亡くなった祖母の葬儀を引き受けてくれたのは藤原敏弘さんのお母さんだった。藤原さんはお母さんから葬儀屋さんを引き継いだのだった。

もう14年も前だろうか、藤原さんは家族経営の葬儀屋さんを元に同業者と共に会社としての葬儀会館を興した。それまでは、一般の葬儀が自宅からセレモニーホールへ移り変わる頃であった。この変化は葬儀の場所が変わったということだけでなく、葬儀の社会的変化の時代でもあった。自宅でする葬儀は近隣の人たちの協

力が不可欠であった。そこでは葬儀屋さんが必要なところだけプロの技で手を貸してくれるのであった。

この時代の変化の中、あちこちで家族経営の葬儀屋さんが消えて、会社経営の葬祭業者が登場してきた。この中で、藤原さんの仕事は生き残った。そこには、藤原さんのお母さんが「お金がない」と言った人にも、「まかしとき！ちゃんとしてあげるで！」という葬儀屋スタイルも生き残った。

藤原敏弘さんのお母さんは肝っ玉かあさんの葬儀屋さんであった。一方、敏弘さんは研究熱心で、葬儀での所作の意味をよく知っていた。その上で、依頼者の希望を具現化することに工夫する人であった。それは、多くの葬儀会社がどうすれば依頼者が少しでも多く支払ってくれるかを目的として「葬儀を作り出す」とは一線を画すものであった。根拠もなく、遺族感情におもねるような儀式を作り出すのは、一時的な儀式である。それは遺族が葬儀会社に

支払いの機会を増やすことを意味する。

藤原さんはよく「葬儀屋は人ですよ」と言った。よく、どこの葬儀社がいいとかと耳にするが、そんなものでもないとも思う。葬儀はサービス業である。葬儀社で提供される物品にそれほど大差はない。お棺や生花や霊柩車などに違いを見いだす人がいるが、わずかな違いである。それより、どんな人が担当してくれるかである。同じ葬儀社でも、同じ料金でもどのような担当者がやって来るか解らない。私が傍目から見ていても、この人に担当してもらいたくないとか、この人に担当してもらいたいとかはある。担当者名を前面に出さない葬儀社もあるが、それはハンバーガーショップの店員さんがいつも名乗るわけではないのと近い理由があるのかもしれない。

藤原さんが「葬儀屋は人ですよ」と言うのは、「坊主も人ですよ」に通ずる。

2. Gさんのお葬式

12月、藤原さんを病院に訪ねた。冬の夕暮れは太陽に力がない。二人で話し込むのに人の少ない場所を探した。私たちが話し始めると、いつしかお葬式の話になる。それも熱を帯びて話し込むようになる。病院でお葬式の話は他の患者に遠慮である。

冬の弱い日差しが消えていく中で、

私たちの話はやはりお葬式だった。

「Gさんのお葬式の時はどうしようかと思った」と藤原さんが言った。

数年前のある日、お昼前にGさんがお寺を訪ねてきた。その朝、お父さんが亡くなったと言う。お父さんは、日頃から「ウチにはお金もないのだから、自分が死んだら火葬場まで運んで焼いてくれ」と言っていたそうだ。けれども、お父さんの顔を見ていたら、そんなことは出来ないと思った。今の自分がいるのはお父さんのおかげだと思うので、ただ焼いてしまうなんてしたくないと言う。一方、両親にお金もないし、自分はシングルマザーでようやく一人息子が高校を卒業したところで、貯金もないけれどお葬式は出来るかという相談に来た。

お金はないけれど送る気持ちがあるお葬式、お金はあるが送る気持ちのないお葬式、お葬式は前者である。

まず、お葬式は場所と時間を決めるところから始まる。場所については、Gさんの自宅にそのスペースはない。お棺を置くと他に一人も入れない。また、Gさんの玄関は生きている人間は出入り出来るが、お棺の出入りはできない。今の日本の家屋でお棺の出入り以前に、ストレッチャーの出入りも出来ない住居がかなりある。

次にウチの寺の本堂を式場として使うことを提案した。自宅から遠すぎるということで、Gさんは乗り気

ではない。近所の人達にも来てもらいたいのだろう。私たちが住んでいる市には、市立の火葬場の建物の中に、小さな式場が一つある。火葬場に電話で問い合わせた。2日先なら空いているということなので、直ぐに予約をするのでと言って電話を切った。この式場は使用料3万円である。市に登録をしている葬儀業者を通じて予約をすることになっているので、藤原さんに電話をして予約を入れてもらった。葬儀も併せて頼んだ。

この式場は市立なので安価である。安価であるが、私はあまりこのことを言わない。私たちが住んでいる市では、公立の葬儀の式場は一カ所である。比較的経済的ゆとりのない人にこの場所をとっておきたいので、言わないのである。

葬儀の場所と時間は決まった。後は詳細を決めるのである。Gさんと一緒に藤原さんの葬儀会社に行った。藤原さんは、お棺とドライアイスだけは必要であると言った。葬儀場までの寝台車も必要であるはずだが、藤原さんは言わない。きっと自分の会社の車を自分で運転してくれるつもりだろう。でも、翌日に葬儀会社の寝台車が空いている保証はないが、予約をしてキープすると料金がかかってしまうので、言わないのだろう。他と重なって困ったら、手はある。プロはいろんな手を知っている。藤原さんはプロである。

葬儀の概要は決まったが、現実にはまだ何も手が着いていない。夕方に、藤原さんとGさん宅で会うことになった。藤原さんはGさんに、帰り道にホームセンターで安い浴衣を購入するように言った。会社の白の帷子(かたびら)を準備するよりずっと安価なのだろう。

日の暮れに、Gさんのお宅に行った。人手が少しでも必要だろうから家内も一緒に行った。藤原さんは先に到着していて、熱っぽい顔だった。風邪をひいているのにこの時に気がついた。二階建ての市営団地で、一棟に一、二戸しか住んでいない。他は空室である。市は取り壊すつもりだろうか、新たな入居者も入れていないようだし、十分な管理修繕ができていたとは言い難い。その二階の部屋でGさんのお父さんは首を吊った。朝に検視があつて、そのままだった。私は藤原さんに手伝ってもらって、その部屋で湯灌をするつもりだった。藤原さんは会社からドライアイスが届けるだけの仕事で、湯灌は料金に入っていない。

余談になるが江戸時代、湯灌は坊さんの仕事であつたようだ。湯灌については研究も少なく、私の見解で述べる。亡くなると「おかみ剃り」あるいは「おこ剃り」と言って、仏門に入ると言う意味で剃髪式をするのである。現代はカミソリを額にそっと触れるだけの剃髪のまねごとをする。私の使っているカミソリには

刃がない。江戸時代は実際に剃髪をすることもあったかもしれない。頭髪を幾分かでも剃ると、頭を洗ったりぬぐったりしたのだらう。それが、湯灌に発展したのではないかと思われる。また、江戸時代には僧侶が湯灌に立ち会わねばならなかった。それは死亡を確認して宗門人別改帖に記載しなければならないからである。宗門人別改帖は現在の戸籍である。だから、戸籍制度というのは世界共通の制度ではなく、日本の制度なのである。

話を戻そう。藤原さんがGさん宅から出てきて、「無理、無理」と言った。Gさんのお父さんの部屋は一人が横になるスペースしかない。この部屋では湯灌どころか何もできない。とにかくお父さんの遺体をどこかに移さないと何もできない。Gさん宅にはそのスペースはない。団地の隅に集会場のような部屋があったように思ったので、Gさんにこの団地の地区長さんにこの集会室の使用を頼みに行ってくれように頼んだ。地区長さんはGさんのお父さんだった。Gさんは直ぐに集会室の鍵を持ってきてくれた。

お父さんの遺体を毛布でくるめて、二階の窓から運び出すことにした。二階の部屋には一人分のスペースしかないので、藤原さんが入ると言った。私と家内が窓の外で受け取ることにしたが、誰が見ても私たち二人では力不足である。いつの間にか、

近所の人たちが集まっていた。30代の男性が外から二階の窓によじ登って、半身を部屋に入れるようにした。ちょうど窓の下辺部に馬乗りになるようになった。2、3人の二十歳まへの男性が塀の上に立ったり木に登ったりして窓の外の手伝いの位置についた。

毛布に包まれたお父さんの遺体は、藤原さんに抱きかかえられてゆっくりと窓から出てきた。かなり死後硬直がでていようでまっすぐで、しなることがない。30代の男性の手助けもあって、お父さんの遺体は水平に窓から出て、少しずつ下向きに角度を変えた。誰かが「あかん！」と声をあげた。お父さんの遺体が毛布から滑り落ちそうになった。30代の男性がロープを持ってきて、毛布の端を縛った。ちょうど飴玉の包装のように端を絞って、中央部を緩く締めた。そうすることで、周りの人たちが手で握り易くなった。そうして、お父さんの遺体は下にいる私たちの所についた。毛布にくるんだまま、集会室までお父さんを運んだ。

集会室でお父さんを包んでいた毛布をといて、そこに先に敷かれてあった布団に遺体を移した。いつの間にか、手伝ってくれた人たちはいなくなった。藤原さんと私だけになった。私はGさんのお父さんの額に剃刀をあてて「おかみそり」の儀式をした。二人で湯灌をして、浴衣に着替えさせようとした。お父さんの身

体は死後硬直のために動かない。い
つもなら、藤原さんはいとも簡単に
関節を動かして思いの姿勢を作って
しまう。死後硬直が弛む時があるら
しい。このときは、その弛む時を待
ってられない。藤原さんは風邪で
熱っぽい身体で、額に汗をながらし
ながら、関節を動かそうとしていた。

藤原さんが「よく昔、骨をボキボ
キ折って納棺をしたという話を聞き
ますが、あれは嘘だと思いますよ」
と言っていたことがある。人間の力
で、人の骨をボキボキ折るなんて、
かなり難しい作業になる。

このときは藤原さんと私の二人で、
渾身の力でもってお父さんが胸で手
を組んで、静かに横たわっている姿
を作った。やはり骨は折れなかった。
お父さんは布団の中で横たわってい
た。枕元に、坊守（住職の妻のこと）
がろうそくを灯して香を焚いた。そ
うしてGさんたちを集会室に招き入
れた。いわゆる枕経、『仏説阿弥陀経』
の読経がようやく始まった。結局、
ドライアイスを届けに来た藤原さん
は料金に入っていない仕事を汗だく
になってやり終えた。

翌日、市営の式場に遺体を運んで
通夜をして、葬儀に事が運んだ。

3. あとがき

話は、再び12月の病院での藤原さ
んに戻る。藤原さんは「あの時は、
やっぱり近所の人たちやGさんの息
子の友達が助けてくれたからできた

お葬式だ」と言った。人のつながり
によってお葬式をしてきた人の言葉
である。お葬式は人のつながりによ
って成り立っていた。仏教的には、
死を超越したつながりがそこにある。

この文章を書いている数日前のこ
とである。ある人が亡くなった。遺
族はお金がないと言うので、市役所
に相談に行った。役所は15万円です
てくれる葬儀社を紹介するという返
事だった。結局、藤原さんの興した
会社をお願いして78,000円程を分
割払いでしてくれることになった。
藤原さんの仕事はこの会社で受け継
がれている。

アメリカの番組で訃報を伝えると
きに、「stay with us」と言うことが
多い。これを「ご冥福をお祈りしま
す」と訳されることも多い。「冥福を
祈る」という言葉に無責任さを感じる。
それは、自分は冥土に往く気も
ないのに他人は冥土に往くのか、と
思ってしまう。

藤原さんの葬儀に駆けつけた沢山
の人が「お世話になりました。あり
がとう」という気持ちであったら
う。その中にはGさんもいた。感謝
の気持ちに「藤原さん、また会いま
しょう。それまでは頑張るからね」
という言葉添えたい。

最後に、藤原さんがよく言ってい
た言葉を記しておく。「ぼくらは、人
のお世話をさせてもらってるんや」

お寺の社会性

— 生奥坊主のつぶやき —



竹中尚文

はじめに

前回は葬儀屋さんの藤原さんの話を書いた。今回は葬式坊主の思いを書きたい。

1. 先日のお葬式

坊さん仲間から、ゴールデンウィーク明けに震災ボランティアに行かないか？と誘われた。私は寺を空ける時間がなかった。家内に3日程、寺を空けることは出来ないかと尋ねたら、無理だと言う返事だった。自分でも無理だろうと思って尋ねたのだが。東北の方の困難を垣間見て、何かをしたいと思っていた。日頃、社会の中に生きる坊さんを標榜しておきながら、何もしていないのは忸怩たる思いである。ボランティアに行った坊さん達から報告メールが入るのに動けない自分がもどかしい。

ウチの寺には坊さんが、私一人しかいない。代役がない。年に一日か二日は、風邪の発熱で動けない日が出来

たりする。そんな日は、電話口で坊守(ぼうもり)が謝りの言葉を重ねて、一方で近隣の寺に電話をかけて手の空いている坊さんを捜している。坊守というのは、たいていが住職の女房で、寺のマネージャーである。坊守が住職は、寺に居なければならぬと言うと、言いつけは守らねばならない。

このゴールデンウィークも終わろうかと言う頃に電話が鳴った。Fさんのおばあちゃんが亡くなったと言う。Fさんのお宅は90歳に手が届こうかというおばあちゃんと60歳を越えた息子さんと二人暮らしである。おばあちゃんには娘がいるが、嫁いでいる。電話をくれたのはその娘である。電話口で、セレモニーホールで家族葬をしようかと思う、と言った。お金はあるのかと尋ねた。無いから、家族葬と思ったそう。家族葬だと、会葬者が来ないから香典は無い。葬儀費用を家族で負担しなければならない。いくら安くても

葬儀費用が無いのだから家族葬はむづかしい。

私は、寺の本堂で普通の葬式をしないかと、持ちかけた。本堂ですと葬儀費用が安くつくから、香典で葬儀の費用は払えるだろう、と言った。おばあちゃんには、わずかでも蓄えはあったかもしれない。でも、この10日ほどのおばあちゃんの入院費を考えればその蓄えも心もとない。私は、前号で書いた葬儀屋さんに電話をした。本堂で葬式をするので、15万円程で引き受けてもらいたいと頼んだ。病院から寺までの寝台車の料金、ドライアイス、お棺、火葬料、霊柩車の料金をざっと見積もった額である。実際には、本堂の前に張った受付用のテントをレンタルして、手伝いに出てくれた隣保の人たちに弁当を用意したりして、総額20万円程になった。

隣保長に、何人くらいの方が会葬に来てくれるだろうかと尋ねた。100人程は来るだろうと言う返事だった。香典は20万円を超えるだろうと皮算用をした。このおばあちゃんはこれまでから、近所のお葬式には付き合いをしてきたのだから、そのくらいの香典は集まるだろうと思った。

また、今まで息子さんは隣保のお葬式の時には手伝いに出ていた。だから、隣保の人たちも当然のように手伝いに

出てきてくれた。嫁いでいる娘さんには、親戚の方で生花を出してくれるようお願いしたので、お棺の周りにはお花が飾られた。お葬式の体裁はりっぱに整った。

このお葬式を提案した理由は経済的ばかりではない。Fさんのお宅はおばあちゃんと息子さんが力を合わせて暮らしてきた。息子さんは新聞配達で収入を得て、読み書きやお金の計算はおばあちゃんの役割であった。近所の人たちも私も、この高齢のおばあちゃんが亡くなると息子さんがどうやって暮らしていくのか心配していた。このおばあちゃんが体調を崩したのは10日程前であった。近所の人たちが救急車を呼んでくれた。

このおばあちゃんが亡くなって家族葬をするならば、近所の人たちは手伝いに来なくてもいいし、会葬にも来なくてもいいということになる。近所の人たちは、このおばあちゃんが亡くなったことも知らないことにしておかねばならない。それが家族葬と言うものだ。

おばあちゃんが亡くなって病院から寺の本堂に運ばれて来たときも、隣保の代表者が駆けつけて来た。隣保長にお葬式の手伝いをしてほしいと頼むと安堵の表情を浮かべた。葬儀の受付や案内係を隣保の人で分担をした。葬儀

の司会の料金をカットしたので、隣保長に司会を頼んだ。原稿は私が書くからと言って。

お葬式が済んでお骨を拾って帰ってきたら、近所のおばあちゃん二人が家に上がり込んで、早速Fさんの息子さんにあれこれと指図をしていた。ひまをもてあましていた年寄りにも仕事ができる。これからも近所の人たちがいろんなお節介を焼いていこう。たまには、的外れなお節介もあるかもしれない。息子さんもこれまで通り新聞配達をして暮らして行けそうだ。

2. お葬式の積立金

先日、Gさんのお宅に百ヶ日法要でお参りをした。百ヶ日というのは、お葬式が済むと、初七日、二七日、三七日と続いて七七日(四十九日)まで七日参りが続き、百ヶ日があつて、一周忌法要と続く一連の法要の一つである。百ヶ日の読経の後、Gさんの奥さんが「私は、今もずっと罪の意識でイッパイなのです」と言った。

そのお宅では、おばあちゃんが亡くなった。そのおばあちゃんは死後、一週間程して発見された。奥さんは、そのことを言っているのだ。おばあちゃんは一人暮らしで、隣接して息子さんのお宅がある。90歳に近いこのおばあちゃんはこれまで元気で、息子さんが

毎週日曜日に買い物に乗せて行くのが恒例だった。いつものように日曜日、おばあちゃんを訪ねたら台所で倒れたまま亡くなっていた。警察が来て状況を調べて、おばあちゃんを連れて帰って検視をして、事件性がないのでお葬式をした。

一週間も気が付かないなんて、と言う人もあるかもしれない。このおばあちゃんは、私がお参りをしたときに隣の息子家族のことをよく言っていた。「息子夫婦は私のお金ばかりをあてにしている。孫は小遣いをせびるばかりだ」と言っていた。こんな言葉ばかり発していると、訪問者の足は遠のく。このおばあちゃんは、人が尋ねて来ないことを気にするようでもなかった。

最近のお葬式は高額のコストがかかるというので、葬祭会社によっては積立金の勧誘に回ったりしている。マッチ・ポンプのような話である。私はお参り先で老人と話す機会が多い。そんな時、葬祭会社の積立金をしているという話をよく聞く。

「積み立てなんか止めておいて、息子さんに葬式代だと言ってお金をあげればどうですか？」

「そんなことをしたら、息子は私の葬式代を自分のことに遣ってしまうじゃないの」

たとえ息子が親の葬式代を使い込んでも

いいではないか。葬儀会社は契約通り葬式をしてくれるだろうが、葬儀の翌日に精算を済ませると亡くなった人のことを覚えているだろうか。そんなことが葬儀だろうか。

息子よりよく知らない会社を信用する。人のつながりよりも、契約に守られた孤独を選ぶのだ。これは、老人だけの生き方ではない。無縁社会や孤独死を作っているのは現代の我々である。人の繋がりはずらわしいものである。人の繋がりの上に葬儀は成り立っている。わずらわしくない葬儀を求めている姿はさびしい。

ところで、私はその奥さんが言う罪悪感を否定するつもりはない。奥さんの罪悪感はあるのである。

数年前のことであるが、家族で夕食に出かけて、帰ってからお風呂につかりながら亡くなったおばあちゃんがいた。近所の老人が「いい亡くなり方だ」とうらやむように言った。息子さんが「あれが最後やったら、もっと美味しいものを食べに行けばよかった」と言っていた。ユーモラスな話だけれど、息子さんは大まじめにそう思っていた。

家族にとって、これでよかったと言う死はない。強い繋がりのある人が亡くなると、言いしれぬ罪悪感があったりする。世間の相対的な善悪による罪悪感ではなく、絶対的な罪悪感である。私が出会ったお葬式で、多くの人がそんな罪悪感を

もっていたように思う。

3. とぶらう

先月、14歳になる我が家の犬が死んだ。ペットとはいえ家族の一員のような存在であり、その死は悲しい。とは言え、私はペットの葬儀をしない。先日、仲のいい住職が「俺は、御布施が貰えるならペット葬だってするぞ」と冗談で言った。葬祭業者によれば、人間の葬儀よりお金をかけたペット葬もたくさんあるそうだ。現代はそんなものかもしれない。人間の生活より費用のかかった生活をしているペットがずいぶんという。「生きる重み」、「死ぬ重み」を考えてしまう。

斎藤茂吉は『赤光』の中で、老母の死に対する悲しみ、畏れ、慚愧、自分の生に対する自問を歌っている。大正時代の文学者が、その時代の生死観を表現したのかもしれない。今、東北地方での膨大な死を「悲しみ」だけで表現しているテレビには、違和感を覚える。人間の死に際して悲しみだけであれば、ペットの死と差異がない。

もちろん大切な人の死に際して、計り知れぬ深い悲しみがある。嗚咽の中で「なぜ死んだのか」という問いが発せられる。それは死因を究明する言葉ではない。死とは何であるかを問いかけているのだと思う。その問いかけは、私の生に対する自問でもある。亡くなった方と私の繋が

りから私の人生への問いかけがある。

今、家族葬と言う言葉が横行している。葬儀が人の繋がりの上に成り立っているのだから、家族葬と言う言葉に違和感を覚える。

最近、そんなに珍しくない話がある。田舎で老婆が一人暮らしをしている。子供達は都会でそれぞれ暮らしている。その老婆が体調を崩して、近所の人たちの世話になって入院をした。しばらくの入院で老婆は亡くなった。子供達が帰ってきて、子供達だけで家族葬をした。近所の人たちには知らせなかった。どれだけの人に声をかけていいのか分からないし、今後も付き合いいけないので、家族葬にした。坊さんに関しても今後の仏事の付き合いが出来そうにないので、セレモニーホールに頼んでもらった坊さんにその場限りの読経をしてもらった。

「とぶらう」という言葉が、「葬儀をする」という意味と「尋ねる」という意味

であると私は聞いている。私たちは、葬儀という儀式だけを「とむらい」だと思いがちである。しかし、人の死に際して生死の意味を尋ねていくのがとぶらいである。だから、私は葬儀を告別式とは呼ばない。

私は葬式坊主の仕事は、人間の死に寄り添う中で新たな人生観に出会っていくことだと思っている。数ヶ月前の話である。七日参りに行ったら、近所のおばあちゃんがお参りに来ていた。初対面のおばあちゃんだった。お経の後、こんな話になった。

「わたい、百まで生きられるやろか？」

「坊さんに聞かれても解らん。人の寿命は解らへん。」

「わたい、百まで生きたいねん。息子が四十で死んでな。かわいそうやし、悔しいし。だから息子の分も生きたいねん」

不意打ちを食らった。返事の言葉が出なかった。涙がこぼれた。

お寺の社会性

— 生臭坊主のつぶやき —

四

竹中尚文

1. ラスト・リゾート

今年の3月の初めに大阪でイーグルスのコンサートに行った。お気に入りの“ラスト・リゾート”の演奏がなかったのが残念だった。この曲についての思い出は、1980年代の頃だった。当時、院生を対象に研究費支給の募集があった。パキスタンの仏教遺跡を調査したいと希望を出したら採用になった。そんなわけで、パキスタン領のアフガニスタン国境沿いをウロウロした。そこは当時も政情・治安不安定な地域であった。毎日、銃声を耳にしていた。ある日、自分の身体の近くを弾丸が通過する音を初めて聞いた。死ぬかもしれない、と思った。パキスタンのペシャワールの街角でカセットテープを一本買った。アラビア文字で

書かれたイーグルスのヒットアルバム“ホテルカリフォルニア”だった。どのような機械でダビングすれば、こんなに悪い音質になるのだ、と思いながらも持参のウォークマンで聞き入った。このアルバムの中で、特に気に入ったのが“ラスト・リゾート”だった。

曲はロック・バラードである。歌詞はおよそこのような内容である。

彼女は夢を持って旧世界から出てきた。山の中で素朴な人々が微笑んで暮らしている。彼らはそこをパラダイスと呼んで愛した。ある時、金持ちがやってきてその土地を買い占めた。そして繁栄した。カワイイ人たちが戯れ、権力を貪り、金持

ちが土地を買い占め、醜悪な箱を作った。神の子はそれを買ってパラダイスと呼んだ。彼らは主が来ると言い、日曜の朝には、神の名の下にそれをたたえ、パラダイスと呼んだ。どうしてそうなるのか解らない。そんなものには、もう別れを告げよう。

英語の歌詞に対する私の誤解もあるかもしないが、このような歌詞である。当時、私は打ちのめされたような思いで聴いた。私は何処に行けばいいのか、私は何処に帰ればいいのか分からないと感じていた。一緒に大学を卒業した友人達が結婚をし始めた頃だった。そんな年頃の私は荒涼たる土地に一人で「自分には帰る家がない」と言うようなことを思っていた。「還るところ」と言うのは、多くの宗教が人々に提示しているものである。また、その概念が多くの人々の琴線に触れるのだろう、いくつかの歌詞で **promised land** という語を耳にする。

一方、この“ラスト・リゾート”はキリスト教、と言うより仏教も含めた既存宗教への痛烈な批判であると私は思った。純朴な人々の心を利用する宗教という構図が示されたように思えた。このアルバムのヒットは 1980 年前後だったように思う。これは社会

が宗教や教団を信用しなくなった時代を映しているのかのようである。

この頃から、ある人は無宗教を標榜し、ある人はカルトに入ってしまった。1990 年代に「オウム真理教」が問題となった。その原因の一つに既成宗教のあり方を指摘された。その批判は当然のものであった。一方でカルト宗教と無宗教も表裏一体の関係ではないかと想像する。その原因としてはやはり既成宗教の態度であろうし、私たちの暮らす社会の変質でもあろう。

2. 個人的な宗教

社会の流れを俯瞰的に見ていく中で、宗教の存在価値を見いだせず無宗教を標榜する人たちが増えた。人生に於いて、宗教の必要性を感じることなく生涯を終える人もある。

大きな災害があったときに、人知を越えた力が愛する人の命を奪っていく、と言う表現を耳にした。愛する人の命が失われるのはいかなる時にも、私の力を越えている。自分の力で抗することが叶うなら誰しもがそうする。死は私にも、愛する人にも訪れる。妻の死、それだけは勘弁してくれと言いたい。ありがたいことに妻は健在であるし、妻の

死などと言うものは想像もしたくない、と言うのが本音である。

そんな私が、いろんなお葬式に呼ばれる。子供のお葬式にも呼ばれる。親は20代であったり、80代であったりする。親にかける言葉をさがすが、いつもこれと言った言葉が見つからない。計り知れない悲しみの中にある人に、どんな言葉を語りかけようとも通じないような気がする。

数年前、20代の男性のお葬式に呼ばれた。まず遺体が家に帰ってきて、私は枕経に参った。三人兄弟の兄二人は泣いていた。母親は茫然自失であった。父親は涙をぬぐいながら母親の状態を気遣っていた。私は、言葉をかけるどころかこの家族の誰一人に対しても正視すらできなかった。翌日の通夜、翌々日の葬儀、私はお経をあげる外に何も出来なかった。

話しはそれるが、私は「お経をあげる」と書いた。お葬式で私はお経を読まない。この場合 read ではない、sing でもない。chant なのである。別の説明をすれば、「如是我聞」を「われかくのごとく聞きたまいき」と言えば、経を読んでいるのである。「によぜがもん」と言えば、お経をあげているのである。

話しを戻そう。お葬式が済んで、七日参りが始まった。七日参りと言うのは、お経をあげて「法話」をする。法話というのは仏様について、仏法について話すのである。私は自分が何を話しているのかではなく、聞き手の心持ちを想像するようにしている。この時、改めてこの家族の悲しみにたじろぐのだった。

三七日(みなぬか)か四七日(よなぬか)のことだった。母親に、時間の経過が慰めになると言うこともあるが、息子さんが亡くなった悲しみはずっと続きますよ、というようなことを言った。私は50年も60年もの間、子供のことを思って手を合わせている親の所にお参りしていることを話した。

息子が「ただいま！」と言って元気で帰ってくれば、この母親の悲しみは消えるだろう。『阿弥陀経』に西方十万億仏土という距離の所に極楽浄土があると説かれる。それは、私という人間が会いに行くことが出来ない距離である。また、人間として帰ってくることも出来ない距離を意味するのである。死を取り消すことは出来ない。

また、この経典は極楽浄土の様子を語る中で、「赤い色は赤い光をは

なつ」と説く。あたりまえのことを、あたりまえに受け入れる、というのである。私たち人生の中で“あるがまま”を受け入れることのすばらしさを学ぶ。しかし、愛する人の死を受け入れることはたやすいことではない。

仏教というのは、「仏になる教え」である。あたりまえと言えはあたりまえなのだから、仏教の特性を表す言葉である。キリスト教は「キリストは我々がいかに生きるかを教えた」のである。いかに生きるかと言うのだから、生き方に是非がある。仏教は「仏に成る」と言うのが究極の目的であるから、それに至る方法はいくつかある。それぞれ頂上を目指す道は自分の歩む道が最も優れていると思っているが、他に道はないとは誰も思わない。とにかく、仏教の目的は成仏なのである。

「あなたは仏に成りたいか？」と尋ねると、「分からない」と答えが返ってきそう。あなたに死が訪れる時、あなたは仏に成りたいか？」と尋ねても、「分からない」という答えかもしれない。「仏と成ったら、人間を救ったり、見守ったりすることができるよ」というと、答えは変わるかもしれない。愛する

人間をのこしてきたら、私は仏に成りたい。私が妻を遺して死んだなら、必ず仏に成って見守ってほしいと思っている。

あなたの愛する息子だからこそ、仏と成ってあなたを見守るのである。

3. ティアーズ・イン・ヘヴン

エリック・クラプトンのファンは多いし、この“ティアーズ・イン・ヘヴン”をお気に入りにあげる人も多いだろう。事故でなくなった4歳の息子に語りかける曲である。

天国で会ったなら、僕のこと分かるだろうか？天国で会ったなら前と同じだろうか？そのためにもそこにふさわしくない僕は強くなれないといけないし、頑張らないといけない。

と言うような歌詞である。天国で再会するのである。仏教でも再会を説く。『阿弥陀経』で「供会一処（一つ処に会うことともなりき）と言って極楽浄土での再会を説く。再会というのは、遺族への慰めではない。愛する人の死に際して、「なんで死んだの？」「何処に行ったの？」

の問いをよく耳にする。一方は死の意味を問うのであり、仏教的には生死の意味を問うのである。また、本当に愛する人が何処に行ったのかを問う時、私も同じ処に行きたいと思う。それは、死に対する私の意志である。時々、「天国に行ったお父さん」と言っておいて「ご冥福をお祈りします」と言う人に出くわすことがある。不覚悟である。

エリック・クラブトンは息子が天国に行ったと思っているのだろう。“ティアーズ・イン・ヘヴン”で私が好きなのはこの視線である。天国の息子が自分を見ているのである。多くの場合、私が死んでしまったかわいそうな息子を見ている。

我田引水。仏教の場合で話しを進める。「私が死んでしまったかわいそうな息子を思う」と言うのは、思いが私から息子への一方通行である。死んでしまった息子をどうとらえるか。息子は仏と成った。私が息子を思う時、私から仏への矢印が出来る。同時に仏から私を見るまなざしを、仏から私への矢印と考える。つまり私と仏の間に相互方向の矢印ができています。これが大切なのである。私は“ティアーズ・イン・ヘ

ヴン”にこれを感じた。仏の眼差しの中で生きる私がいる。

仏の眼差しの中で生きるとは、「お念仏に生きる」と言える。私には耳にタコができるような言葉である。それは、老人が風呂に入りながら「あ～、ナンマンダブ、ナンマンダブ。極楽やな～」と言って、放屁してまた「ナンマンダブ、ナンマンダブ」と言う光景を思い浮かべてきた。生活の中の念仏である。念仏というと、口称念仏を思う。口に出して称える念仏である。

文字通りだと、念仏とは念ずる仏と書く。仏を思うことである。だから「お念仏に生きる」とは仏を思いながら生きることである。すなわち、仏の眼差しを感じながら生きるのである。そこには、仏と私の相互方向の思いがある。絶望して泣いた人が消えることのない悲しみを持ちながら、新たな世界を生きる姿を目にする。それは死の意味に出会い、生死の道を歩んでいるのである。

私はそこに居合わせたありがたさを感じる。

お寺の社会性

生臭坊主のつぶやき

五

竹中尚文

はじめに

三回続けてお葬式の話を書いた。「弔」は葬儀屋さんの立場から、「参」は人のつながりにのながにある葬儀を、前回の「四」は僧侶の立場から書いた。ここは私が一番書き込みたいところであるが、宗派色が色濃く出るころなので別の機会にしたい。

このまま葬儀の話しばかり書き続けば「葬式坊主のつぶやき」になってしまう。今回でお葬式の話を終えよう。併せて、初回に御布施の定額化という話題について私の思いを申し上げたい。

1. 葬式坊主

日本の中世仏教史の専門家である松尾剛次氏によると、中世日本では、僧侶を分類すると「官僧」と「遁世僧」に分かれる。官僧とは、国家に仕える官僚としての僧である。鎌倉時代にこの官僚の身分を離脱する僧が出てきた。この僧たちを「遁世僧」と呼んだ。鎌倉新仏教を興し担い手になっていったのも「遁世僧」である。また、葬儀を始めるようになったのも「遁世僧」である。それまで以前は、死んだ人や死にそうになった人は、道や溝に捨てられた。これは死を忌む(斎む)べき事だと考えた日本人の宗教観によるものである。

官僧は葬儀に関わらない。例えば、現代も法隆寺の僧は葬儀を執り行わない。彼らは、官僧の流れをくむ僧である。また、官僧でなくても祈祷を主な仏事とする僧も葬儀に関わらない。「遁世僧」の中でも「葬式坊主」と「祈祷坊主」に分かれた。

鎌倉時代以降、葬儀に関わるようになった僧は黒衣や墨袈裟を使うようになった。タイやスリランカの坊さんがオレンジ、台湾や韓国の坊さんがグレーの僧衣を身にまとう。日本の坊さんの僧衣が黒であるのは、その意味と歴史がある。最近、黒の僧衣が暗いイメージだから、他の色にしようと言う動きがある。愚かな考えである。

2. 同じ葬式はない

これまで書いたお葬式の話について、これらは特殊なケースだと言う印象を持たれた方もいるかもしれない。特殊なお葬式と思う人は、普通のお葬式というものが頭にあるに違いない。ところ

が、普通のお葬式というようなものはない。同時に間違ったお葬式もない。間違った人生がないように。

前に登場した葬儀屋さんの藤原さんと「普通の葬式ってないよなあ。みんな違うよなあ」とよく話したものである。亡くなる人はみんな様々だ。また、人は同じ条件で亡くなるのではない。同じ葬式なんてあるはずがない。ところが、よく親戚とかで、「葬式というのは、こんなふうにしなくてはならない」と指南を始める人に出くわすことがある。たいていは迷惑な人である。最近の葬祭業者は、以前と比べてずっとシステム化されていて、何をどうするかを教えてくれる。但し、そこで喪主がどうしたいのかを言わないとすべてが業者のペースになってしまう。画一化した儀式になってしまう。

ここで、坊さんの御布施は画一化したものではないのか問いがある。この御布施の問題は、「生臭坊主のつぶやき」の第一回目に

ふれた話しである。御布施の金額を明示すべきか否かという話しである。私は明示して欲しくはないし、問われても答えないし、御布施の金額は定額ではないと思っている。その結果、私が葬儀でいただく御布施の金額は一定ではない。お互いによく知っている人だから、これだけの金額を渡せば充分だろうという表情で渡されることのないのありがたい。

3.葬儀の依頼

私は初対面の方のお葬式を、皆無とは言わないがほとんどしない。亡くなった方も遺族も、初対面のケースばかりであったなら、私は御布施の金額も明示すべきだと言うかもしれないが、今はその状況はない。

お葬式の依頼はいろいろである。もちろん誰かが亡くなって依頼の電話がかかってくるのだが、それがすべてではない。

夏の昼下がりに電話が鳴った。おばあちゃんが亡くなったと言う知らせだった。お孫さんからだ

った。私は、少したじろいだ。

なぜなら、かつてこんな話しがあったからだ。そのお宅の祥月命日にお参りをした。たまたま、その日はおばあちゃんが一人で居た。仏壇に向かってお経をあげて、少し世間話をして帰ろうと思っていた。少しの話が、おばあちゃんが淡々と語り出した。

新婚で旧満州に渡った。子供が生まれてすぐに終戦を迎えた。ご主人は彼女が子供を連れて先に帰国するようにと、ご主人の実家の住所を渡してくれた。朝鮮半島を貨物列車で南下する間に、赤ちゃんが自分の腕の中で息絶えた。息絶えた赤ちゃんを数日間抱き続けた。帰国して自分の実家は空襲で焼けていた。渡された住所を頼りにご主人の実家に行くことにした。ローカル線の駅で降りて、人に道を尋ねながら数キロ先の村にたどり着いた。村の小さなお堂の縁に腰をかけて迷った。主人の消息どころか生死も不明である。赤ちゃんも死んでしまった。息子の安否すら分からないのに、

両親は自分を迎えてくれるだろうかと。通りかかった村人が声をかけてくれて、その家に連れて行ってくれた。両親は喜んで、よく帰ったと迎えてくれた。抑留されたご主人が帰国するまで、自分を大切にしてくれた。ご主人が帰国した時、自分は朝鮮半島で赤ちゃんを亡くしてからずっと生理が止まったままだった。子供ができないから同じ村から養子夫婦を迎えた。人のいい夫婦だった。暫くして、自分に生理が始まって、娘が生まれた。娘も嫁いで幸せに暮らしているようだ。連れ添ったご主人は少し前に亡くなった。

話を聞いていて、おばあちゃんは自分の葬式を私に頼んでいるのだと思った。人生は絶望の淵を歩むこともある。たまたま行き交う人の善意に救われることもある。そんな人生を終えるときに、

いろいろあったね、ごくろうさま言ってあげたい。私もそんな言葉を掛けてもらえる人生を送りたい。

私の髪を切ってくれる美容院の店主は息子さんに「私が死んだら、このお寺に電話して」と言っているそうだ。彼女は私より若い。でも、このような頼まれ方は嬉しい。坊さんとは死んでからの付き合いではなく、生きている内から仲良く付き合ってもらいたい。

訂正

前号が発行されて直ぐに真宗学の先生からメールをもらった。(『対人援助学マガジン』Vol.2 No.2)の P.139 右段の下から 6 行目に「供会一処」と書いた。正しくは「俱会一処」である。

お寺の社会性

— 生奥坊主のつぶやき —



竹中尚文

1. 親の死に目

先日、週刊誌で「親の死に目に会いたい」と言う特集を読んだ。仕事を投げ出して、親の死に目に会えるかと言うことであつた。たとえ仕事をしていなくても親の死に目に会える保証はない。「死に目」だけが大切なら、医者になればいい。医者はたくさんの死に目に会っている。

この雑誌の特集の制作者は、昨年3月11日に突然に亡くなった人や、その遺された人のことは意識になかったようだ。あの日、愛する人を失った人に「死に目」を問えるだろうか。「死に目」を問うことに意味があるのだろうか。その週刊誌には「死に目」ではなく、「死」を語って欲しかった。今こそ、「死」を語るべきである。

「死」を語ることは「生」を語ることでもある。誰もがいつかは死んでゆく。死ぬべき人生を生きるのであるが、死が人生の目的ではない。死をプランニングすることもできない。死については時も状況も予定することはできない。自死について問われることがあるが、私は「死にたい人生」を送った人に出会ったことがない。

死を語ることは生を語ることである。「死を迎えるまでの生」と「死を迎えてからの生」である。

2. 葬式坊主とニセ坊主

前号まで、私は葬式の話ばかり書いた。葬儀で終始するのであれば「死に目」を語る週刊誌と大差はない。

私にとって葬儀と七日参りは

一連のことである。葬儀と七日参りは「まんじゅう」の「かわ」と「あんこ」のようなものだと思っている。葬儀が「かわ」で、七日参りが「あんこ」のようなものである。

最近、お葬式だけに来る坊さんがいるそうだ。時には葬儀料金に坊さんの御布施も含まれて、セット料金として提示されている話も聞く。葬儀屋さんに組み込まれた坊さんである。「かわ」だけの「まんじゅう」を食わされているような話だ。葬儀屋さんに「これが普通ですよ」と言われて納得してしまう消費者意識も愚かしい。

ニセ坊主に金を払うようなものだと思って、ふと考えた。ニセ坊主が葬式をして御布施を受け取ったら、詐欺になるのだろうか。法律家である友人に尋ねた。御布施というものが、本物の僧侶に支払われるものであれば、詐欺になる可能性があるそうだ。ニセ坊主では期待されたものを提供できないということである。そうすると、本物の僧侶とは何であるのか。

その宗派の教義も知らないし、気にもならない人にとって、宗派の正式な僧侶であるかないかが詐欺罪の正否を分けるとは思えないと言う。

最近のマスメディアで宗教的知識や意識の裏付けのない表現が気になる。冒頭の雑誌特集にもそれを感じた。ところが、友人の言葉で気付いた。教義も知らないのは坊さんにもいるではないか。先日も知人が「母の七日参りに、仏壇の中の道具やお供えの位置が違っているだの、これを用意しなさいだの、いい加減にして欲しい。それより仏さんの話をして欲しい。七日参りでそれを聞きたいのに」と云っていた。

3. 死ぬまでの生

七日参りは「死ぬまでの生」と「死んでからの生」を問う時だと私は思っている。

かつて遠方に住む友人のお父さんが亡くなったとき、「自分は無宗教だから、お葬式をしないつもりだ」と私に電話をしてきた。

わざわざ坊主の私にこのような電話をくれるのは、そのことに多少のためらいがあったのかもしれない。私はそのためらいが、お父さんへの愛情によるものだと思った。お父さんのことを大切に思う人たちが週に一度集まってみてはどうかと提案した。いろいろな思い出話などが出て、とってもいい集まりになったそうだ。最後には坊さんと呼んだそうだ。七日参りである。

そんなに簡単に、途中から七日参りを引き受けてくれる坊さんはいるのか、と思われるかもしれない。私なら喜んで行くし、身の回りを見渡してみても、引き受けそうな坊さんは多いと思う。

数年前のことである。あるお宅の七日参りにお参りをしていた。そのお宅の隣のおじさんが、ほとんど毎回にお参りしてくれた。そのおじさんは、「私はここのお父さんにはずいぶんと世話になりました。私が高校生の頃、反抗期だったのか、よく親子げんかをしました。家を飛び出したら、ここ

のお父さんがこっそりと朝まで家に居るように言ってくれました。私が非行に走らなかったのはここのお父さんのおかげです」と言って手を合わせた。

また、ある娘さんは「私が、今あるのは、このオヤジのおかげです」と言って涙を流した。その一連の七日参りで、私は父娘のこれまでの話しを聞いた。

死ぬまでの人生を聞くこと、語ることはとても大切な事である。私は、そこに七日参りがあるのだと思っている。

4. 死んでからの生

「ごめんね」という言葉を聞くことがある。亡くなった人に向けられての言葉である。声にならず「ごめんね」と言っている人も多い。

本当に愛している人が亡くなったのだ。「ごめんね。(あなたが死んでしまったのに私が生きていて)」と言っているように思う。謝罪の言葉ではないが、愛する人の死も自分の生も肯定したくな

い。

愛する人の死を表現すること
ばを紹介する。

我が子亡くした親なれば
死んでも死なせはしないと
ただ一人嗚咽す ※

(川添泰信師)

「死んでも死なせはしない」と言
う表現である。現実には死んでいる
のであるが、死んだから「はい、
そうですか」とはいかない。だから
「死んでも生きている」のである。

仏として生きているのである。
こんな表現をすると、また坊主は
煙に巻くと言われる。こんな表現
が必要のない人には言わせてお
けばいい。

先日、41歳で亡くなった方の

七日参りをした。その前の週と同
じように、お経をあげてから振り
返って法話を始めた。小学校5年
生の娘さんが、右手にお経の本を
持って左手に念珠を握りしめて、
食い入るような眼差しで正面を
見つめていた。その目からは涙が
流れていた。彼女は話しを聞き終
わるまで視線を伏せることはな
かった。

どうして仏さまはいるのか？
あなたのためにいるのだ。

「ごめんね」が「ありがとう」
になる。

※『宗教部報 りゅうこく』第82号
(2008年龍谷大学)

お寺の社会性

生臭坊主のつぶやき

七

竹中尚文

1. 仏に会う

時々、「霊を見たことがあるか？」と尋ねられる。私は霊を見たこともないし、見たくもない。尋ねた人は、霊を見たことがあるのかもしれない。また、霊を見たとか、金縛りに遭ったという人にも出くわすこともある。私にはどうでもいい話しである。

仏に会うための修行をしているお坊さんの事を見聞きしたのかもしれない。その修行は大変に厳しいもので、生臭坊主の私には及びもつかない。だからと言って霊はないだろう。

仏を見る、仏に会うと言うのは、どういうことだろうか。「仏に会う」という表現は、おそらくキリスト教文化を背景に生きてきた人には奇妙な表現に思えるだろう。彼らの多くは、仏とは歴史上のブッダと理解するだろう。2400、500年も前の人物

には会えない。また、会うと言う発想そのものがない。キリスト教における神と仏教における仏はずいぶん異なる。

2. 三種類の仏

仏をどのように理解するのか、三つに分けて説明したい。

まず、第一は歴史的存在としての仏である。ブッダである。2400、500年前にインドで実在した一般に言うところの「おシャカさま」である。

『ブッタとシッタカブッタ』(小泉吉宏著)で描かれるのは、それはそうだろうと思わせるものがある。それが真理と言え、真理が仏なのである。仏とは真理そのものなのである。仏とは色も形もない真理なのである。これが二つめの仏である。

色も形もないと言っても、奈良の

大仏があるじゃないかと言われるだろう。奈良の大仏は「毘盧遮那仏(るしゃなぶつ)」と言う名前がついている。名前のある仏は他に、阿弥陀仏や薬師如来や大日如来などある。仏に名前があるのはキャラクターがある。

「誰が私を救ってくれるのか？」
「この仏様である」つまり救いの主体をはっきりさせるのである。誰が、なぜ、どのようにして、私を救うのかというストーリーが必要である。それは教理教学をともなった仏である。明確に信仰の対象となる仏である。

まとめると、一番目に歴史上に存在した仏。二番目に絶対的真理としての仏。三番目にキャラクターのある仏である。

この三つの仏の概念を我々は意識もせず区別もせずに使ってきた。私たちの暮らす社会は、仏教文化を背景としてきた。私はお寺で手を合わせる。この場合、はっきりとした信仰対象としての仏様に手を合わせている。また、実態の無いものに手を合わせていることもある。「いただきます」の合掌は食べ物を拝んでいるのではなく、「ごちそうさま」も食器

に手を合わせているわけではない。時には、人の真心に手を合わせていることもあれば、人の寛容さに手をあわせることもある。

3. 真理としての仏

色もなく形もない絶対的真理とは、法である。法とは仏法である。仏法であると言われてもよく解らない。

お参りで聞いた話しをしたい。そこに私がお参りに行くときの気分は、旅行気分である。きれいな景色のところである。急峻な山があって、その谷あいには村がある。山の緑から湧き出すかのようなきれいな空気を吸い込み、きれいな水が流れの音が快い。時間はゆったりと流れる。時間がゆったりと流れるのはお年寄りが多いからでもある。

そのうちの一軒で、おばあちゃんから聞いた話しである。そのおばあちゃんが嫁ぐ前に、お父さんがこう言ったそうだ。

「おまえ、つらかったらいつでも帰ってきてもいいぞ」

半世紀程も前の話だ。そのお父さんはきっと明治生まれの方だろう。立て前の台詞を言う世代だ。「一步、家の敷居を出たら、帰ってくるよう

なことは思うな」と言うだろう。ところが、お父さんの言葉は本音だった。

おばあちゃんが結婚した相手は長男である。舅も姑もいて、弟や妹が六人もいた。大家族の家に嫁いだのである。弟や妹が結婚をして独立する時にはできるだけことはしただろう。長男の家に嫁いだのだった。そんな中で自分たちの子供を育てた。

このおばあちゃんは、逃げ出したくなったこともあったかもしれない。もうこれ以上、頑張れないと思ったこともあったかもしれない。そんな時、おばあちゃんを支えたのは、お父さんの言葉だろう。だから、おばあちゃんは昨日のこのように父親の言葉を語った。「つらかったら帰ってきてもいいぞ」の言葉に込められた父親の思いをずっと大切にしてきたのだ。おばあちゃんの人生を支えた気持ちだったのだろう。

私は、この父親の生死を知らない。父親の娘を思う気持ちは、この半世紀間ずっと生き続けた。父親の命があろうとなかろうと、おばあちゃんを支えた真理である。生死を越えた真理である。色も形もない真理である。このおばあちゃんだけでなく、

私たちも仏に出会っている。

今、「絆」という言葉が語られる。絆は人と人の間だけではなく、死を越えた繋がりでもある。私のことを大切に思っている気持ちに気付いてもらいたい。私はあなたのことを大切に思っている、たとえ私が死んでも、いつまでも。どうかこの繋がりを一方的に切らないでほしい。

このおばあちゃんの子と娘は都会で働いて家庭を築いている。自分がそうであったように、おばあちゃんは子供たちとつながっている。

4. もう一つの仏

仏の話にもう少し付き合っていたきたい。

ほんの数日前の話した。70代半ばのおじいさんが亡くなった。会社を定年後、夫婦でよく寺参りをしてくれた。「手を合わせて願い事ばかりする自分が恥ずかしくて」と言ってウチの寺に参ってくれるようになった。お参りをして「私たち、ニコイチです。でも、最近は二人で力を合わせても一人前にとどきません」と笑いながら言っていた。あんなふうになりたいと思わせる生き方だった。

枕経をあげるのにこのお宅を訪れ

た。おばあちゃんが泣きながら言った。

「私は何処に帰ればいいのか？」

「ここに家があるじゃない」

と息子さんが答えた。

「お父さんのいない家は、私の帰る家じゃない」と言って泣いた。

この家は3、40年前のニュータウンとして開発された場所の一角に建つ。ふたりで力を合わせて手に入れたマイホームである。月給袋とローンをにらみながら、一生懸命に働いたに違いない。このご夫婦にとって本当に大切なマイホームだったと思う。

それが「私の帰る家ではない」と言っておばあさんは泣いた。一般的なお悔やみの言葉に、「二人で建てたこの家を守って行ってね」という言葉を聞いたことがある。私も慰めに同じようなことを言ったことがある。このおばあちゃんの言葉は私の欺瞞をついた。自分の送ってきた人生で本当に大切なものは何かを言っている。

私の帰る家。私たちの帰っていくところ。それは私たちが再び出会っていくところである。私にはそれが

阿弥陀仏の世界である。人によって思うところは異なるかもしれない。この阿弥陀仏が、もう一つの仏である。

私の大切な人はどうなったのか。私はどうなっていくのか。私はいかに救われるのか。その救いはいかなるものであるか。宗教の教理の世界である。宗教の教理を体現した仏が、第三の仏である。

さらに、この教義を表す仏の話は別の機会にしようと思う。しかし、宗教の教理や信仰の世界に足を踏み入れたことのないと思っている人に、少し申し上げたい。恐れることなく、自分自身をよりどころにして、仏法をよりどころにしてのぞいていただきたい。

5. まとめ

仏に出会うことは、自分の人生と見つめることになればと思う。私は霊を見ると言う話しに、何かしら自分自身から目をそらせているように感ずる。人生に於いて涙することは望むものではないが、その時には必ず自分の人生と向き合うことが大切である。

お寺の社会性

生臭坊主のつづやき



竹中尚文

1. お盆明け

近年、お盆のお参りは宗派を問わず盛んになってきたらしい。坊主友達がラジオでそんな話しをしていた。今年のお盆も忙しい思いをしたのは、そんな事もあるのかもしれない。お盆が終わって、思考が半ば停止した中で友人にメールをした。彼は高校時代からの付き合いなのでもう40年になる。お互いの住まいが千キロほども離れているので、顔を合わせることはめったにない。いつもメールのやりとりである。

私は、彼の奥さんがどれだけすばらしい人であるかを書いた。彼からの返信は、「どうしたんだ？」と云うげげんな感じであった。彼

は私に言われるまでもなく、自分の奥さんのすばらしさを知っているだろう。また、私がいくら生臭坊主と言っても友人の奥さんに横恋慕をするわけがない。彼の奥さんは本当にチャーミングな女性でいい人である。女性に不器用な友人がどうやって彼女と結婚できたのか不思議である。

友人にとっては迷惑で不思議なメールであっただろう。私は、友人の夫婦関係にお説教をしてしまったようだ。私はお盆参りでいろんな家族を見て、ハイになっていたのかもしれない。それで、友人に余計なことを言ってしまった。

2. 家族の季節

最近のお盆は家族の季節である、と私は思う。亡くなった家族も含めての家族の季節である。

もともと、私たちの浄土真宗は盆行事に重きを置いてこなかった。だから、お盆の特別のお供え物と言ったきまりはない。お参り先でお盆に何をお供えすべきかと尋ねられることがよくある。そんな時、「家族の気持ちをお供えして下さい」と答える。苦し紛れの答えだと言えればそれまでである。

今年のお盆に私がお参りしたいくつかの家族を紹介したい。

【青原さん】早口のお経を上げて向き直ったら、青原さんが一人で座っている。昨年に99歳のお母さんが亡くなった。結婚をする機会がなかった彼が母親の介護をした。父親は30年ほど前に亡くなっている。75歳になる青原さんが一人になった。これからどうしようという感じが伝わる。先は決まっているのだと言う。今の住まいを売って老人介護施設に

入所するつもりらしい。それはいつのことになるのかは、分からない。では、それまでをどうするか。75歳からの人生設計である。人間は、生きている限り生きる状況は変わる。死ぬまで、人生設計の立て直しである。いろいろな要素を含んでこれからがある。次に会うときに、青原さんはどんな話しをしてくれるのだろう。

【井上さん】かなり前に井上さんから、娘たちが帰ってくることを聞いていた。井上さんは半年ほど前にご主人を亡くした。娘が二人いるが、遠くに嫁いでいる。父親の初盆だからと言って帰ってきた。いつもは奥さんと犬一匹の静かな家が大騒ぎである。それぞれのパートナーと幼児から小学生までの子供たちが5人である。台所と仏間の二間続きの空間は、泣いている子供、犬を追い回す子供、テレビを見始める子供たちでごった返している。私は仏壇の前で縮こまって座っている。井上さんは、私に接待ができないことを詫げる。詫げながらその顔は嬉し

そうである。悲しいはずの初盆に参ってきたのだが、なんか楽しいお盆だ。

【海野さん】私がお参りに行くと、五人で待っていてくれた。いつもは海野さんと 80 代後半のお母さんの二人の家族である。海野さんは昨年に 60 代半ばのご主人を亡くした。長男は半年ほど前に、遠くに転勤になって一人住まいである。次男は先月に結婚をした。今日はその奥さんと並んで座っている。私は若い奥さんに初対面の挨拶をした。ニコニコしている若い奥さんに「笑顔をお父さんにお供えしてくれるのは、ありがたいね」と言った。そうしたら、長男も「僕も結婚が決まりました」と笑っている。

そんな挨拶の後、私は仏壇に向かってお経をあげ始めた。背後で男性の鼻水をすする音がする。デュエットのようだ。この一年は、彼らにとっても辛い一年だった。かつて、海野さんが「主人が亡くなった後、息子があんなにしっかりしているなんて、思ってもみま

せんでした」と言っていた。かつては賑やかな海野家だったが、今はおばあちゃんと海野さんの二人暮らしである。家族のそれぞれが人生の新たなステージを歩み始めたようだ。今年のお盆はそんな報告会のようだ。

【江藤さん】江藤さんのお宅に約束の時間にお参りに行くと、奥さんが一人で座っていた。昨秋にご主人が亡くなって奥さんは一人暮らしなのだから、奥さん一人というのも不思議ではない。朝、長男から新幹線が集中豪雨で動かないと電話があったそうだ。母は無理せずに自宅に帰るように言った。江藤さんは長男夫婦もいれば長女夫婦も次女夫婦もいる。どんな事情があるのかは知らないが、子供たちの存在感が薄い。それは、江藤さんのご主人の闘病中も、奥さんだけが介護をしていた印象がある。

子供たちは独立した。江藤さんは息子や娘の配偶者に頼み事をしないようだ。独立した人間の関係において、必ずしも頼み事をし

ないというものではない。江藤さんは息子や娘やその連れ合いに「いいお母さん」なのだろう。面倒な事を言わない「いいお母さん」は、「どうでもいいお母さん」になりはしないか。杞憂であってほしい。

江藤さんは来年のお盆には、私に参ることを頼んでくれるだろうか。家族に「坊さんが参ってくるから、帰ってきて」と言ってくれれば嬉しい。

【小原さん】10年ほど前のお盆にお参りをしたときにおじいちゃんが高校生の孫を紹介してくれた。夏休みにおじいちゃんのところ遊びに来ているのかと思ったら、数メートル先に自分たちの家があるという。その翌年におじいちゃんは亡くなった。お葬式があって家族構成を知った。小原さんは、数メートル先に自宅が会って、夫婦と子供は姉と弟の四人家族である。お葬式の後はお参りの回数が多くなるので少しずつ様子も伺い知れる。父親の居心地が悪そうだ。娘が父親に対して

否定的な視線であった。母親も父親に距離をとっているように感じた。それから、父親は転勤が決まった。単身赴任である。父親は、帰れるときは一生懸命に帰ってくる。同僚の車に同乗させてもらったり、バスに揺られて帰ったりしていた。昨年のお盆は、私がお参りした日に父親が帰省する日だった。数キロ先の高速バスのバス停に息子が自家用車で迎えに行った。入れ違いに、父親が歩いて帰ってきた。程なくして、帰ってきた息子に、父親は礼を言った。感謝の気持ちを込めての言葉だった。

昨年、誰かにうわさ話として聞いた。小原家の息子が高校生の時に、何かで不登校になったらしい。その時に父親の発した言葉で、あの家族は上手くいかなかったと。爾来、彼はほとんど家に居る。しかし、昨年のお盆の日に息子は父親をバス停に迎えに行った。

昨年のお盆に、私は息子に短期の海外留学にでも行かないかと言った。ほとんど家に居る息子に

出かけてほしかった。今年のお盆にお参りをしたら、姉が仕事を辞めてワーキングホリデーで、カナダに行ったと言う。そんな家族の様子を聞いているとき、息子が僕もカナダに行ってみようかなと言った。両親は、ぱっと嬉しそうな顔になった。

この家族にはいろんな試練があったのだろう。家族はお互いの手を離すまいとしてきたのだろう。私は父親の行動にその意志を感じた。だからと言って、この家族の問題が一気に解決するのではないが。おじいちゃんが亡くなってからお参りの時にはできる限り家族がそろってお参りをする。父親は今も単身赴任先から一生懸命に帰ってくる。そして、家族は仏壇の前でそれぞれが、何かを語る。私は一度もこの家族から相談をされたことはない。いつも家族ドラマの観客をさせてもらっている。

3. 坊さんの立場

私は、お盆のお参りでは法話

をしない。法話とは、仏の教えを話すことである。浄土真宗ではお経と法話はセットになっているのだが、祥月命日やお盆のお参りでは私は法話をしない。私は聞き役になる。私は市井の生臭坊主であるのだから、どんな話しにも乗るようにしている。私は住職になってから、他者の話を聞く勉強をしておけばよかったと思う。これから坊さんに成る人には、他者の話を聞く勉強をしておくことを勧めたい。

坊さんの中には人に悩みを語られることで、自分が偉くなったような勘違いをする人もいる。だから自分がすべてを掌握しないと納得しなかつたり、自分の力で解決できると勘違いをしたりする。私たち坊さんは、仏を背に座ることが多い。人は私の背後にいる仏に向かって話しているのかもしれない。

蛇足ではあるが、仏は就職や縁談の世話もしないし、病気を治したりもしない。歳をとるのを止めたりもしないし、死を止

めたりもしない。宝くじも当ててくれたりもしない。でも、仏に向かって語ることに意味があると思う。

4. まとめ

今年、あるお家で私がお盆のお参りを済ませたら、これからみんなまでバーベキューをしよう。おじいちゃんが亡くなっておばあちゃん一人暮らしになった家に、みんなが集まって、バーベキューだそう。一昔前なら考えられない初盆だが、私はいいお盆だなあと思う。お盆は変わってきた

なあと思う。

はじめにも書いたように、お盆は盛んになってきている。それは、家族の行事となっているからだと思う。家族が、亡くなった家族に語りかけ、お互いの繋がりを確認している季節なのかもしれない。仏に家族の問題を語ったところで、その解法を教えてくれるわけではないが、その意味はあると思っている。

来年のお盆は、もっと忙しいお盆になるかもしれない。来年も暑いだらうなあ。

お寺の社会性

生臭坊主のつぶやき

九

竹中尚文

1. さようなら

また、お葬式の話である。またかと思いながらも、坊さんの話にお付き合い願いたい。

お葬式の弔辞に「さようなら」という言葉が気になる。先日のお葬式でも耳にして気になった。ホントに「さよなら」って言っているの？ また、会ったらどう言うのだろうか。

かつてのお葬式での弔辞は、吹き出しそうな文章もあった。本人は言葉に酔うような感じで読み上げているが、どこかで聞いたようなフレーズだと思えば、演歌の歌詞だったりした。また、ある時は「暑い夏の日、あなたは私に冷えたビールを飲ませてくれた。あの時のやさしさに、私は今も感謝している」と読み上げたその人

は、アルコール依存症であった。

張り詰めた悲しさの中で、そうした弔辞は緊迫感を和らげる働きもあったかもしれない。今はそんな弔辞もすっかり耳にすることがなくなった。決まり切った定型文を読み上げるような、味気ない弔辞が幅をきかせるようになった。その中で、何か自分の言葉で語りかけようとして、「さようなら」という言葉が飛び出してくる。

告別式と言うのは別れを告げる式ではないかと、おっしゃる方もおいでだろう。だが、私は告別式とは云わない。お葬式と言う。お葬式と言うのは「とぶらふ」のである。「とぶらふ」とは、「とむらう」ことであり「たずねる」ことでもある。すなわち、お葬式は、

生と死について尋ねることである。私の知る坊さんは誰も告別式とは云わない。

一方、最近は「お別れの会」というのが流行っている。先日、友人が電話をくれた。恩師が亡くなったので、お葬式に行った。そうしたら「お別れの会」だったそうで、彼はずいぶんと違和感を覚えたと言う。まず、手を合わせたいのだが、そんな雰囲気ではない。長男が付けた戒名もどきが掲げてあったそうだ。火葬の後、お骨を拾ったのかと尋ねると、拾ったそうだ。私の友人は、あんなことでいいのだろうか、少し憤っていた。

お骨を拾って帰ったら、そのお骨をどうするのだろう。たとえ散骨をするにしても、それはある種の宗教行為であろう。どうせ宗教行為を始めるのなら、それなりの教理や思想を伴った宗教がよかろう。新たな人生観に出会うチャンスかもしれないのに。

私は、友人の憤りに共感を覚える。それは、「お別れの会」って

亡くなった方がかわいそうだなあと思う。自分が死んでいくなかに、みんなから一斉に「バイバイ！」って言われたら、さみしいだろうなあと思う。一人、舟でこぎ出したら、岸边からみんなで一斉に石を投げつけられるようなものだ。「お別れの会」というのは、生きている人たちのことしか考えていない儀式であるように思う。

そうすると、お葬式をすれば亡くなった方のことを考えているのかと言われると、必ずしもそうではなからう。「とむらい」の中に、人間の死とその人生をどれ程に考えているのだろうと、疑問に思うこともある。それは形ばかりの儀式に過ぎないと思うこともある。多く人はそうしたお葬式が大半だろうと思われるかもしれない。ところが、そんなものではない。私が出会ったお葬式の大半の場合は、大切な方が亡くなった悲しみとその人の死と生についてのこされた人々は思いをめぐらせている。

儀式の様式にかかわらず、大切な方の死という時に会って、その時だからこそ人間の生と死について考えてみて欲しい。

2. 人間関係

「さよなら」という言葉を少し考えてみたい。日常生活の中で、「さようなら」という言葉はよく使う。学校から帰る時、先生に「さようなら」と言っても違和感はないだろう。恋人とデートの後、「さようなら」と言うのかな。学校に行くのに家を出るとき、「さようなら」と言うことは少なそうだ。

「さよなら」という言葉が使われるのは、その状況と人間関係がかなり反映されているように思う。お葬式においてもそうだろうと思う。

私の人生でたいへんにお世話になった方は多いが、亡くなった方は少ない。その少ない中の長尾雅人先生の人生は今も私を導いてくれる師である。辻岡昭臣師の言葉は今も私の指針とな

ることが多い。共に今を生きる私の大切な存在である。

”tuesdays with Morrie”
(Mitch Albom /published by Doubleday) 『モリー先生との火曜日』(別宮貞徳訳/NHK 出版)はとってもいい本である。その中でモリー先生は死を前にしてかつての学生ミッチ・アルボムに人生とは、死とはという特別講義を火曜日ごとにする。その特別講義の記録のような本である。映画化もされジャック・レモンの遺作になった。いい映画だった。まだ見ていない人には、DVDにもなっているので、お勧めだ。原作の本は全米のベストセラーであった。死を受け入れる人生を描いた。死を伴わない生はない。死が人生に意味を与える。単に亡くなった人の思い出を大切にするという話ではない。亡くなって往かれた方の生と死が、今の私の人生に寄与してくれているというのである。

そんな関係においては、亡くなったからと言って「さような

ら」とは言わない。

とは言いながらも、本当に大切にしている人が亡くなったので、自分がしっかり生きていくために別れの言葉を告げる人に出会うこともある。ずいぶんとタフな方だなあと試してみている。

3. 悲しい話し

先日、妻が友達と出かけた。帰ってきて「今日はとても悲しい話し」を聞いたと言う。

妻の友人で嘉田さんと言う人がいる。嘉田さんの友人に木田さんがいる。木田さんご夫婦には、一人息子があつた。勉強がよくできて首都にある大学に進学して、卒業後は公職に就いたそうだ。ご夫婦にとっては科挙に通つた自慢の息子と言うところだつた。その息子さんが交通事故で亡くなつたそうだ。

木田さん夫婦は、「神も仏もない」と嘆いたそうで、悲しいお別れの会を開いたそうだ。悲しみの中で暮らす内に、木田さんの奥様

は癌で亡くなつたそうだ。夫は、妻のお骨を息子と同じ沖繩の海に散骨したという。

この話の悲しさは子供を亡くす辛さである。さらに悲しいことに息子さんの死が生かされなかつたことである。木田さんご夫婦は仏と成つた息子さんに会えなかつた。息子さんがご夫妻の人生を導くことなく、奥様は亡くなられたのである。

息子さんが仏と成つたと言うことなど、分からないではないかとおっしゃる方もおいでだろう。見えないことは存在しないと言うことだろうか。肉眼で見えないものは、他にもある。心が見えるだろうか？命が見えるだろうか？思いやりが見えるだろうか？人生が見えるだろうか？

大切な方が亡くなって、失望感にさいなまれ、悲しみの底によんでしまう。大切な方が亡くなつたからといって、別れではない。仏となつたその方との出会いによって、その命を私が受け継いでいくのである。

「神も仏もない」と嘆いた木田さんはどのような宗教観をお持ちだったのだろう。

よく「家内安全」と言うお札らしきものを見かけることがある。私の願いや要求を聞き入れてくれるのが、神や仏なのだろうか。初詣にたくさんの人々がお参りをするのは、そのような宗教観かもしれない。たしかに人々の願いや要求を受け付けてくれる宗教施設は多く存在する。

一方で、加持祈祷はしないが人の悲しみに寄り添い、その出来事に共に向き合う宗教もある。そこに新たな人生観に出会うこともある。そうした宗教も私たちの社会で、決して少数派ではない。しかし、教会のドアを押したり、お寺の門をくぐる人は多くない。

数年前に、スマートフォンが売り出された。新たに携帯電話を購

入しようかと思う人は、携帯電話かスマートフォンかの選択をした。そしてスマートフォンが売れている。通信機器の進む方向を決めたのは消費者の選択だった。

同じようにこれから社会が宗教に対していかなる選択をするのだろうか。次世代にどんな宗教を残していくかを決めるのは、社会の一人ひとりの選択である。私はカリスマのある宗教者がリードしていく社会であって欲しくないし、何の思想思索も伴わない幼稚な宗教儀式のみが残るようにもなって欲しくない。

お寺の社会性

— 生奥坊主のつごやき —

巻拾

竹中尚文

1. 日本でイスラム教

神戸の北野界隈を歩いていると、神戸ムスリムモスクがある。ドーム建築で四隅にミナレットという塔がある。海外で見るような壮大なモスクではないが、立派なモスクとしての建物である。お祈りの時間が来るとアザーンが聞こえる。私は、かつて乾燥地帯の街で夕方時間に町中に響くアザーンを聞いていた。どこか哀愁を帯びたような声調で、とてもいいものだった。

旅行記などで、アザーンを「コーランが聞こえる」と誤解している人もあるが、コーラン（クルアーン）ではない。アザーンとはイスラム教

の定めるお祈りの時間になると、それを知らせるために独特の声調で神を讃える詩を朗誦するものである。

神戸モスクに話を戻そう。ここからは、パキスタン出身の新井アハサン氏に伺った話を掲載したい。

竹中(以下T)：まず、門柱に「神戸ムスリムモスク」と書いてありますが、ムスリムとは何ですか？

新井アハサン(以下A)：ムスリムとはイスラム教を信じている人、即ちイスラム教徒と言う意味です。

T：この神戸モスク以外に日本にはどのようなモスクがどのくらいあ

るのですか？

A：今、日本には 100 近いモスクがあります。このようなドームやミナレットがあるモスクは神戸と東京だけですが、最近ビルの中を改装したり、一般の家を買ったり借りたりして改装しています。また、この神戸モスクが日本では最も古く昭和 10 年(1935)からあります。

T：日本にあるモスクは全部同じ派なのですか？

A：イスラム教に於いて派はそんなに大きな問題ではないのです。聖典(クルアーン)は一つしかないのですから。確かにスンニ派とシーア派がありますし、また国や地域によってイスラム学者の解釈の違いで全く同じとは言えないけれど、大きな違いはありません。日本でどのモスクも特定の派はなく、みんなの一つのイスラム教としてお祈りをしています。

T：イスラム教に教団の代表者はいるのですか？

A：キリスト教のローマ法王のような人はいません。イスラム教では、私はこの法学者の解釈が好きだと

かということはありませんが、それぞれで教団を作るようなことはありません。だから、イスラム教には教団という概念そのものはありません。

T：イスラム教にプロの宗教家と言うか、他に仕事を持たない宗教家はいますか？

A：はい、います。その人はイマームといいます。しかし、キリスト教の牧師や仏教の僧侶のように特別の資格が必要なわけではありません。誰でもイマームになれます。しかし、イマームは説教をしなければならないので、実際に勉強をしている人でないとダメです。

T：ムスリムにはハジと称される人がいますが、その人達は一般の人から尊敬されるのですか？

A：ハジはメッカに行った人のことです。メッカに行くのはムスリムの義務です。経済力がある人はメッカにお参りをするのは当然です。だから当然の義務を果たしただけだから、そのことで特に偉くなったわけではありません。

T：神戸モスクに於いてのアハサン

氏の地位と言うのか役割は？

A：私は日本の法律に定める「宗教法人神戸モスク」の理事の一人です。ここは私のような何人かの理事で運営しています。そして時には、イマームの役割をすることもあります。

T：話しは変わりますが、イスラム教に生死観と言うのはどのようなものでしょうか？

A：生まれることは肉体に魂が入ることなのです。そして、死ぬことは肉体から魂が離れることなのです。そして、その魂と言うのは神の命令なのです。「魂」と「神の命令」とイコールなのです。

T：ムスリムがよく口にする「インシャアッラー」と言うのは、そういう意味で「神の思し召すまま」ということなのです。

A：そう、そういう意味では私たちの人生は神の命令によるものなのです。そして、死ぬと魂は天国に行くのです。もちろん天国に行くにはそれにふさわしい人生を送らなければなりません。魂の無い人生を送ったならば、天国以外の所に行く

のです。

T：魂の出た後の身体はどうなるのですか？

A：死んだ後の身体は、魂がそこにあったものであるのだから、それなりの敬意を払わねばなりません。だからムスリムにとってお墓はその人の人生への敬意を表すものです。尊い人生を送った人ならばそれにふさわしい死体があるはず。だから、お墓を大切なのです。

T：ムスリムは火葬にしませんよね？

A：絶対にしませんし、してはならないことなのです。火葬にするとその人の人生の意味が無くなってしまいます。

今、私たちは墓地が足りなくて困っています。私たちは埋葬をしますが、日本のほとんどの所では火葬のみです。法律では埋葬を禁じていないのですが、ほとんどの所が条例で埋葬を禁じています。だから、私たちは本当に困っています。

T：そうですね、日本は仏教文化を背景とする社会ですから、火葬で問題ないのです。しかし、ムスリムは

そうはいかないのですね。

T : 今日はどうもありがとうございました。

A : こちらこそ。

イスラム教の国を訪れた方はご存じだろうが、カレンダーが私たちとは異なる。イスラム教の国では金曜日が端にあって、赤い文字である。仕事は金曜日が休みであって、この日にモスクに行って礼拝をする。

このことは日本で仕事をして生活をするムスリムには不自由だろうと思うが、それは問題ではないという。困っているのは、埋葬ができないことだと言う。火葬というのは彼らが宗教的に受け入れることができない。同時にこの埋葬のことは我々の思いもしなかったところであった。

この問題は、日本の社会がホストソサエティーとしての準備が出来ていないうちに、日本でその生涯を終えようとしているムスリムが多くなっているのである。

2. 日系米人

2001年の「9.11同時多発テロ」の後、ムスリムへの嫌がらせや中傷がかなりあった。いわゆる「ヘイトクライム」である。あのテロ事件の後、アメリカではムスリムだけに対してはいつでも身元照会ができるようにしておくべきだとか、彼らの預金口座を凍結すべきだという声も上がった。

このような公的な次元でのムスリムへの締め付けは実行されなかったが、街角での罵声やネット上の中傷やムスリム経営の商店への不買やムスリムが理由の突然解雇などはあったようだ。

テロの犠牲者やその遺族の悲しみや痛みに対する共感をもっともなことである。しかし、その共感とムスリムへの敵対心と同一線上に置くのは、全く正当性がない。

このようなアメリカ社会の行為に、多くの日系米人は第二次世界大戦の時代とアメリカは変わっていないと言って、抗議の声を上げた。かつて自分たちが受けた扱いと、今ムスリムの人々が受けている扱い

は重なるものがあるからだ。

真珠湾攻撃を受けたアメリカは日本人及び日系人を捕らえて、キャンプと称する収容所に送った。収容所に送られる前から、アメリカ政府は日系人に対してのみ、正当な手続きを踏まずに逮捕することを許した。日本文化を広めようとする者はFBIに逮捕されていった。

当時の様子をかかなり正確に描いた映画『愛と哀しみの旅路』（監督：アラン・パーカー、主演：デニス・クエイド、タムリン・トミタ）の中で、映画館を営んでいた父親が逮捕されるシーンがあった。容疑は、日系人に日本映画を見せて日本的価値観を広めたというのであった。笑い話ではなく、当時の状況を描く現実味のある話である。

日本の宗教を広めたと言うことで、全米のすべての寺院がFBIによって家宅捜索をされた。仏教僧侶は全員が逮捕された。当時の仏教開教使の多くは、日本から渡った人たちである。私なら、開戦の前に帰国したろうにと思った。

当時のアメリカ合衆国には、約

11万人の日本人及び日系米人が住んでいた。ちなみに、日本人が最も多く移民をした国はアメリカ合衆国である。その11万人は、一世と二世である。一世というのは明治後半期及び大正初期に渡米した人たちで、アメリカでの帰化も土地所有権も認められず、市民としての権利を持てなかった人たちである。そして、二世と呼ばれる人たちはアメリカで生まれたのだから、アメリカ国籍の人たちのことである。

この日本人及び日系米人の内、半数が仏教徒であったと言われる。残りの半数はキリスト教徒であった。これは、アメリカに向けて移民するときに、日本政府からキリスト教に改宗するように勧められたと言われている。それを記録した文書はなく、伝聞である。このような指導があったか無かったかは別にして、「郷に入っては郷に従え」という考え方が働いたことは想像に難くない。そこであえて、5万人余りの人が仏教を選んだのである。

5万人余りの人たちが仏教徒であることを選択したことに、僧侶達

は自分だけ日本に帰れなかったような気がする。しかし、実際にはアメリカで逮捕されていた僧侶達は大変であった。

彼らは一般の人たちと同じ所には送られなかった。ほとんどの日本人及び日系人が送られたのは転住センターと称する収容所であった。いわゆるキャンプである。これとは全く別に、ニューメキシコとテキサスとノースダコタの3カ所に軍と司法省が管轄する捕虜収容所があった。僧侶達が送られたのはそこである。

現在も昔もアメリカは移民の国である。移民というマイノリティーに対して、それを受け入れる社会、ホストソサエティーがある。ホストソサエティーには寛容の力というようなものが必要である。その意味では、アメリカ社会は第二次世界大戦の時に日系人キャンプを作るような失敗もした。そして、「同時多発テロ」の後、非寛容的姿勢を示した。その間、アメリカ社会は全く変わらなかったかという、そうではない。その間、アメリカの社会はホ

ストソサエティーとしての自覚をもって社会形成を計ってきた。それは恒常的な進捗ではなく、進んだり戻ったりの社会形成である。

3. 日本の仏教の姿勢

日本では、いつの間にかずいぶんと外国の人が増えた。それは、一時的滞在かと思っていたら、この国で生涯を終えようとしている人たちも増えていた。

日本社会は、その覚悟もないままホストソサエティーになっている。ホストソサエティーの側に回った仏教は果たして寛容性を示せるであろうか。

多くの日本人は「イスラム教徒」に対して攻撃的である印象を持つようだ。テレビで報道される「イスラム教徒」はそのようなイメージが作られているのではないか。私の知るムスリムは穏やかな人たちだ。

かつて私は、パキスタンのスワート渓谷に一ヶ月程滞在した。そこで穏やかに暮らす人たちに出会った。昨年、そのスワート渓谷でタリバー

ンが少女の頭を撃ったことが報道された。あの平和な所にまでタリバーンが入り込んだことが残念であった。報道というものはそこにある平和な日常を伝えるのではなく、そこで起きた異常な出来事を伝えるのである。

だから、テレビ報道からだけでムスリムが攻撃的であるなどと決めつけないで欲しい。確かにタリバーンのような人たちもいる。アメリカの牧師で「コーランを燃やす運動」を呼びかけた人もいる。彼の存在でキリスト教の性格を語ることはできない。日本のテレビで特定の仏教宗派がわかるように放映されると、“中立であるべきテレビ”が特定の宗派に肩入れをしたと抗議の声を上げる仏教徒もいる。彼らの偏狭性

をもって、仏教の性格を語るべきではない。

仏教は宗教戦争もしたことがなく、仏教は平和主義であると多くの日本人は思っている。仏教の特性として平和主義だといえるだろう。しかし、江戸時代の島原の乱とその一連の出来事に対して、仏教は少数派のキリスト教徒を見殺しにしたことを忘れてはならない。私たちは決して平和主義であると大きな顔をしていられない。

これからの私たち仏教徒が示す寛容性によって、平和主義であるといえるのではなかろうか。

お寺の社会性

— 生奥坊主のつごやき —

十一

竹中尚文

1. 供養から生死の考察へ

日本の仏教は明治以降、ずいぶんと変化をしたという。実際には、明治時代からゆっくりとした変化をしてきたと思う。私は、僧侶になって約 35 年、住職になって約 10 年になるが、その変化を感じることもある。例えば、先々代の住職がやっていた仏事の中で、私はしないことがある。

ウチの寺では 50 年ほど前には仏事の中で供養という言葉を使っていたが、私は使わない。このことは私だけに限ったことではなく、私たちの宗派に共通することだろう。供養という言葉は、本来は仏様にお供えをするという意味

であるのだが、一般的には追善供養をさす言葉となっている。追善供養というのは、死者に対して四十九日間、あるいは百日間、金品や食べ物のお供えをする。それは死者が成仏できるように死者に代わって善行を積むのである。坊さんはそのお供えのおこぼれを貰って帰るのだった。私の先々代もそうであった。

ところが私たち浄土真宗は、阿弥陀仏の力によって即得成仏すると説く。従って追善供養の必要性はない。今は、追善供養の必要性がないことを強調するから、あえて供養という言葉を使用しない。

追善供養を不必要とする浄土真宗は、

仏事を「お聴聞(ちょうもん)のご縁」と言う。仏法を聴く機会なのである。仏法を聴くことで自分の人生を考え、自分の死を考える機会なのである。こんな事を言うと、「私のお葬式は…」などと言い出す人がいる。お葬式の話と死を語ることは、全く違う話しである。

私の寺では、この 50 年から 100 年の間に、仏事において「供養」から「生死の考察」に変わった。他の言い方をすれば、仏事の中心が「お経をあげる事」から「法話を聞く事」に変わった。

このような変化は、浄土真宗で顕著であるが、仏教全体に同じ方向性の変化があるようだ。この変化は、明治時代に日本にキリスト教が入ったからだと言われている。教会での儀式では説教が中心であることに仏教は変化の必要性を感じたと言えよう。

他にも明治時代以後の変化がある。ほとんどの宗派の坊さんが正式な結婚をするようになった。但し、浄土真宗は開祖の鎌倉時代から結婚をしていた。とにかく、お寺で家庭生活を営むようになって、地域社会との結びつきが強

くなってきた。また、ここ何十年かの間に仏事でのお経の時間が短くなってきている。そして法話の比重が重くなった。

仏教のこうした変化は、明治時代にキリスト教が日本に入ったことに端を発するかもしれないが、仏教の変化は社会変化に伴ったものである。また、この変化がゆっくりとしたものであるがためか、社会全体の中では仏教の変化は見落とされがちである。

2. 坊主めぐり

お寺の変化に社会が気付きにくい理由として、普通の人々が仏事に会う機会が少なくなっているからだろう。従って法話を聞く機会も少ない。仏教文化講演を聴く機会があっても、法話を聞くことは少ない。仏教を語る文化人の講演は思いのほか頻繁におこなわれている。法話を聞くとするのは、それぞれの人達の念頭に仏がなければならぬ。仏に対する意識がなければ、法話を聞くことではない。もちろん話し手もその意識は不可欠であるが、私は法話の話し手と聞き手の区別があるの

ではなく、共に聞き手であると思っている。

普通の生活をしていて、仏に対する意識を持つというのは少ない。そんな意識を持つのは大切な人が亡くなった時であろう。私は、日本の社会がまだ仏教を宗教的背景としている社会だと思う。普通の人大切な人を亡くした時には仏に対する意識を持っているように思う。

大切な方が亡くなった時は法話を聞く機会である。もちろんその時には、本気で法話をしてくれる坊さんが必要である。仏事というのはそれなりによくできている。お経をあげている間に心が静になってくる。だから、私はお経を聞いているのではなくて、できるだけ一緒にあげて欲しいとお願いをする。その流れの中で法話を聞く準備をする。お経を声にすることで、意識はお経に集中して静かになる。聞く耳が作られているのである。講演と違って法話は感動させる話しや教養を深める話しではなく、話しを聞いた人が仏について何か語りたと思うようになる話しだ。

話を戻そう。法話を聞く機会が少な

い。大変に乱暴な数字であるが、今のお寺で門徒や檀家の 5%の数字が年間の葬儀数だと言う。何もしっかりした統計で言っているのではなく、住職たちの実感で言っている。つまり 100 軒の家庭に対して 1 年間で 5 件のお葬式があると言うのである。観点を変えれば、ひとつの家庭において 20 年に 1 回のお葬式があることになる。いやいや、昔はお葬式が 20 年に 1 回よりも多かったと感ずる人もあるだろう。昔はもっと家族数が多かったので、お葬式の頻度は 20 年に 1 回より多かったはずだ。

仏を思って法話を聞く機会は 20 年ぶりの七日参りだ。四十九日の間は法話を聞く機会なのだが、その機会を逃すことも多い。坊さんがずぼらでお経だけをあげて帰ってしまう。七日参りの時間がとれない。法話に出会う機会はますます遠のく。

七日参りで法話を聞く機会に恵まれないければ、一周忌でも三回忌でも法話を聴く機会はなさそうだ。それでは単なる儀式になってしまう。坊さんが法事という儀式をただけになってしまう。さみしいなあと思う。そんな坊さ

んばかりだという声も聞こえるが、私の知る限りではそんな坊さんはばかりではない。

普通の人が坊さんとの関わりをどのように持っているのだろうか。まず、ずっと昔からこのお寺と関わってきたからと言うのが多数派だろう。その宗派の教えに不満もなく、そのお寺の坊さんにも不満もなければ現状維持と言うことになる。

次に、葬儀屋さんに紹介されたりとか、墓石業者に紹介されたりしてお寺との付き合いが始まった人も少なくない。新たなお寺との付き合いの始まりである。

この場合、葬祭業者や墓石業者が坊さんの法話を聞いたりはしない。お寺が墓地を持っているとかの理由があるようだ。なかには美坊主ということもあるらしい。『美坊主図鑑』という本が売れているらしい。私も狸に似ている。図鑑に載せてくれんかなあ。

坊さんを選ぶ時に、選ぶ要素に「法話」と言うのがあってもいいだろう。いいかげんな坊さんばかりだと言われるが、いいかげんな出会い方ばかりしては、それはそうだろうと思う。

たとえば自動車を買う時、エンジンは付いていないが、ボディの色や形を気に入って買ったようなものだ。自動車じゃないと言っても、そもそも自動車を買っていない。

3. 坊さんとお寺

いい法話を聞けると言うのは、繰り返しになるが話術の巧みな坊さんというわけではない。その話をきっかけとして、それぞれの人が仏様のことを思ったり、話したくなったりする話である。

しかし、いい法話を聞ける坊さんに会おうと、そのお寺でもいい法話が聞けることが多い。お寺ではいろんな法要をしている。その時には法話のために講師が呼ばれて法話が聞ける。お参りに来る坊さんがいいかげんであれば、そのお寺での法要も形だけであることが多い。形ばかりのお寺と言うことになる。形ばかりのお寺だから、お寺は不要であるという坊さんもいる。派遣の坊さんで、お葬式や法事に出掛けていってお経をあげるだけという坊さんもいる。法話も何もない、お経を読む

こともないから、お経の内容も気にならない。ただお経をあげるだけという坊さんもいる。

お寺って、なんだろう。

盆や正月の風物詩としてテレビで報道される人出の多いお寺もある。ヘンな言葉だけれど、「観光寺院」というのもある。カリスマ住職というのか、人を引きつける住職のいるお寺もある。

私が住職になった時に、カリスマ住職を目指さないことにした。私がカリスマ住職になれる資質を持ち合わせていないことも確かである。普通の人達の生活のなかにあるお寺を目指したいと思っている。その必須要素は、そのお寺でいいお話が聞けると言うことである。そんなお寺には足を運ぶ意義がある。それぞれの人生に何かしらの意

味を付与するお寺であってほしい。

大切な方が亡くなるという悲しい出来事があって、それが始まりで生死の意味を考える。人生の意味を考えるようになることがある。そんな時こそ、法話に出会って欲しい。たくさんのお話を聞いて欲しい。たくさんのお話を聞くためにお寺の法要に足を運んでもらいたい。さらに法話に出会える。仏に出会うことで人生の味付けが変われば、悲しいだけの死ではなくなる。

私は、それがお寺に対する社会の要請だと思う。自分の暮らす社会が私に何を要求しているのか明確に理解することは難しい。しかし、望ましい自分と望ましい社会をイメージしながら、私は生きていきたい。

お寺の社会性

— 生奥坊主のつごやき —

十二

竹中尚文

1. 病院長の怒り

先日、知り合いの病院長が怒っていた。患者さんが亡くなった。身寄りもなく、生活保護を受給していた。市の委託を受けた業者が遺体を引き取りに来た。誰も送る人がいないので、手の空いている病院スタッフがお別れをしようと言う話になった。その旨を市に問い合わせたら、お骨になったら連絡するので引き取りに来てほしいと言われたそうである。

私も同じような怒りを感じたことがある。今年の冬、門徒の方が亡くなった。その門徒の方も生活保護

受給者であった。私は生活保護受給者の方からは御布施をいただかない。公金による御布施はいただけない。だから、ボランティアでお経をあげるつもりでお葬式に出掛けた。しかし、それも認められなくなった。市に委託された業者が遺体を引き取りに来る。それには誰も付き添えない。そして、お骨になったら連絡をするので受け取りに来ていというのである。近所のおばさんが、「私らは、ゴミか？これって、ゴミと同じ扱いじゃない！」と言って泣いた。病院長の怒りもこの点にある。

2. 死んだら終わり

ここ近年、生活保護受給者への風当たりは厳しい。また、貧困についても、何も知ろうともしないで自己責任で片付けてしまう。

仏の目から見れば、人間の歩みは氷の上を歩くようなものじゃないかと思う。たまたま厚い氷の上を歩いているが、知らずに薄氷を歩くこともある。また、踏み抜いて冷水に溺れることもある。だから、私は貧困を自己責任という言葉でくくることに与しない

生活保護受給者は死んでからもペナルティーを受けなければならないのか。生活保護受給者は人として送られてはならないのか。葬儀は贅沢なのだろうか。どうしてこんなことになったのか。

「私らは、ゴミか？」という発言があった。人間は死んだら、ゴミだと考える人もいるらしい。人間の死に、意味を考えない人がいる。他の言い方をしてみると、「人間、死んだらおわり」ということでもある。

今、無宗教という言葉と共にこのような考えは広まっている。

無宗教を標榜する人は、お骨を拾わない。お骨を拾うと宗教行為が始まるのだから。無宗教という言葉は、死者と生きる者の断絶を意味している。

生活保護受給者の葬儀を認めないのは、私たちの社会の意識の変化によるものである。

3. 仏と私はつながっている

人間の考えや感じ方は、状況によって変わることがある。仏は私と一緒にいると言っても、見えるのか？触れられるのか？と言われそうだ。仏の存在についての水掛け論をするつもりはない。

私は、人の臨終に呼ばれる。そこで、いわゆる枕経を上げるのである。その時、「人間は死んだら終わり」とは誰もが思っていない。誰もとは言い過ぎかもしれないが、ほとんどの人はそんな風に思っていない。この時、人は亡くなった方と縁が切れ

たとは思わない。死んでも繋がっているのである。

4. 念仏の力

長野さん夫婦は駆け落ちをしてきた。今では駆け落ちなんていう結婚形態を聞くことは少ない。ちょっと昔のことである。長野さんは、私たちの寺の門徒になった。夫婦で一生懸命に働いて家も建てた。夫、次いで妻と相次いで亡くなった。若くして亡くなったとは言え、息子は成人していた。一度は会社勤めをしていたが、母親の亡くなった時には会社を辞めて家に居たようだった。その後、彼はアルバイトなどで生活をしている様子だった。祥月命日のお参りだといっても、仕事で不在だからと断られることが多かった。その内、だんだん自宅にすることが多くなった。身体の調子が悪いので、あまり仕事に行けないと言う。それと共に、経済状態が悪化しているように伺えた。時々、食べ物を届けるようになった。

久しぶりに彼の近所を通りかかったので、訪ねてみた。げっそり痩せた彼がふらふらと出てきた。「どうした？どこが悪いのか？」と尋ねた。食べ物がないと答えた。食べていないだけではなさそうだった。彼の言動が少し、気になった。ツテを頼って彼を精神科の病院に連れて行った。食事をしていない彼の健康状態を併せて診てほしかった。診断の結果、彼を入院させた方がいいと言われた。

私は、入院をすれば食事もちょうんととれるし栄養状態も改善すると思った。彼は入院をしたくないと答えた。彼の病気が予想外に進んでいることに気が付いた。それから「入院しろよ！」「いやだ！」というやり取りがあった。その間も彼の病状は目に見えて悪化した。彼が「いやだ！いやだ！」と叫ぶように言っているときに、私は「誰があんたの親を送ったのだ。親の言っていることだと思って聞け！」と叫んだ。彼は急におとなしくなった。翌日、彼は

入院した。一ヶ月後には、彼は血色もよくなって退院した。

こう言うと、彼が入院をしたのは私の言葉によるように聞こえるが、そうではない。私の言葉で、彼は母親の思いを思い出したのだろう。入院してから分かったのだが、彼の母親は亡くなる前に彼を病院に連れて行き治療を受けさせていたのだ。母親は、彼の病気のことやその先のことを心配しながら亡くなっていった。その思いを彼は知っていたのだ。だから、「親の言っていることだと思って聞け！」という言葉に反応したのだと思う。彼は、病気の中でも亡くなった母親の思いとつながっていたのだと思う。

私は彼との出逢いの中で、いろいろな事を学んだ。病気になることの辛さ。病気は人間の誰もがなる可能性がある。また、その中で彼の人間性を保とうとする力、それは十分に尊敬に値する彼の力である。それは仏とつながっていることに支えられている力であるかもしれない。

坊主の言い方ではあるが、仏と人間はつながっている。仏を思う、すなわち念仏である、その念仏には力がある。

5. 仏によって

この夏に富山さんが亡くなった。数年前に富山さんのお兄さんが亡くなった。その七日参りで聞いた話しである。彼はお経と法話の後、お茶を飲みながら、唐突に語り出した。

富山さんは40年ほど前にお嬢さんを交通事故で亡くしている。そして20年ほど前に経営していた会社が倒産した。その時の話しである。

あの日、富山さんは金策に走り回ったそうである。どうしてもお金が作れなかった。どうしようもないと思った。このまま命を絶つしかないと思ったそうである。最後にお嬢さんの亡くなった場所に行こうと思ったそうだ。できれば、そこで死にたいと思ったそうだ。

その場所に自動車を停めて、時間が止まったような時間が流れた。こ

のままここで死んだら、娘に会わず
顔がないと思ったそう。それから、
彼は山あり谷あり谷ありの人生を
送って、この夏に亡くなった。決して
楽な人生ではなかったが、いい人
生を送った。一生懸命に生きた。

あの時、お嬢さんのことを思わな
ければ、富山さんのこの人生はなか
ったかもしれない。あの時だけでは
ない、富山さんは、ずっとお嬢さん
のことを思いながら人生を送った
ような気がする。

そして、今年の暑い夏、富山さん
はやっとお嬢さんと出会った。

人の死に出会うことによって、私
の人生に意味を持つのである。



お寺の社会性

— 生奥坊主のつづやき —

拾参

竹中尚文

1. 研修会

先月、研修会で長島に行った。私たちがいろんな研修会がある。坊さんたちの研修会、一般の人達と坊さんと合同でする研修会や、坊さんとその家族の研修会などがある。形式はパネルディスカッションか講演会のどちらかが殆どだ。そのテーマもさまざまだ。去年は野中広務氏の講演があった。私は『差別と日本人』（野中広務、辛淑玉共著）をととても気に入っていたので、楽しみに出掛けた。野中氏の政治放談になってしまったのが残念だった。

今回の現地研修は、私たちの企画であった。私は、現地研修を気に入っている。だから、近隣の寺の住職やその家族対象の研修会に、長島に行こうと言った。

現地研修というのは、宗教的には巡礼とも言える。多くの宗教で巡礼と言うのは巧い手だと思っている。キリスト教の聖地巡礼、イスラム教のメッカ巡礼もあるが、仏教でも巡礼は盛んにおこなわれてきた。インドでもあったし、日本でも西国三十三所や四国八十八所にお参りをすることが古来より盛んにおこなわれてきた。「お遍路さん」という言葉でその姿がイメージできるのは、今も変わらない。このことで真言宗は信徒を多く獲得してきた。これによって多くの人々が真言の教えの入り口に立ったのである。巡礼という行為は入門者や初心者には有効な手立てである。

2. 長島愛生園

瀬戸内海は穏やかな海である。兵庫県を西に過ぎるあたりから、島々が多くなる。その多くは、名前を聞いても覚えきれないような島の数と平凡な姿である。そうした島々が穏やかな海にのんびりと浮かぶ。じつに平和な光景である。

長島はそれらの島の一つである。岡山県瀬戸内市にあって、現在は本土と短い橋でつながっているが、島である。この島には二つの国立ハンセン病療養所がある。長島愛生園(ながしまあいせいえん)と邑久光明園(おくこうみょうえん)である。ハンセン病療養所は全国に15ヶ所(国立13, 私立2)あるという。

私はこれまでハンセン病についてほとんど知らなかった。だから、現地研修をしようと言ったのである。近所の僧侶の一人が長島に何度も足を運んで知識を持ち合わせていたので、彼を講師にしてこの研修会をした。こんな企画を立てたら、他にも何人かの僧侶がここに関わり続けていた。

ハンセン病は「らい菌」によって発症する。らい菌は結核菌とよく似

た菌で、感染力も弱い。だから、これまでこの療養所で患者からスタッフへの感染は一度もなかったと言う。ハンセン病はこの菌の発見者の名前をとった。この病気は末梢神経がおかされ知覚麻痺がおこる。この知覚麻痺は身体の端っこの方からおこるので、手、足、鼻、耳などから感覚がなくなるそうだ。そうすると、怪我や火傷をしても感じないので気付かないままになって、感染症を起こすことが多い。そうして壊疽をおこして、手足等の変形や欠損がおこることも多い。ハンセン病は1940年代半ばに治療薬が発見されて、治療が容易な病気になった。従って、現在の日本には、ハンセン病患者は一人もいない。

ハンセン病患者の収容は、明治末期から始まったそうだ。1931年に「癩予防法」が制定されて、強制収容が始まった。これ以降、一般社会から急速にハンセン病患者が消えていく。また、これ以前、大正時代に断種も始まった。この話を聞いた時、統合失調症のことを思いだした。統合失調症も1930年代よりナチス

ドイツで施設に患者を押し込めて、民族浄化を進めた。多様性を認めず寛容性を持たない人々の作る社会が人々をはじき出してきた。私たちはその潮流から決別できたのだろうか。

第二次大戦後も、「らい予防法」が作られ、「優生保護法」の対象にハンセン病が入れられ、合法的に強制手術がおこなわれてきた。2001年の「らい予防法違憲訴訟」勝訴で流れが変わり、2008年に「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」が制定されて現在に至っているそうだ。

私たちは小型バスで長島愛生園を訪れた。バスが園内に入ると、震災の仮設住宅のような住居の中を抜ける。住居区域と非住居施設区域がある。その中で、私たちは「お寺」と呼ぶ施設に入った。この園内にはいくつかの宗教施設があって、彼らの信仰が保証されている。長島愛生園の場合、約40%の真宗信徒、約20%のキリスト教徒、40%程が真言宗や禅宗や日蓮宗やその他いろんな宗教の人達である。

お寺に集まってきてくれた人々はいずれもお年寄りである。現在の長島愛生園の入所者の平均年齢が83歳程である。ハンセン病の治療薬の発見が1940年代半ばであるから、戦後はハンセン病になってもすぐに治るので、療養所に入れられる人は激減した。また、断種によって園内で新しい世代の誕生はなかった。だからこの入所者は高齢者ばかりになった。

お寺に集まってくれた人々のうちで福島さんが、本名は福岡さんだと言う。本名を明かしたのは数年前だそうだ。もう60年ほど福島と名乗ってきたのだから、福岡さんと呼ばれてもピンとこないそうだ。名前を変えた人は多い。それは、入所が同時に故郷や家族との決別であった。ハンセン病に対する差別が家族に及ぶことを恐れてのことだ。今、本名を名乗ってもだいじょうぶだ、故郷に帰ってもいいと言われても、自分を知る人は故郷にいなくなってしまっている。何より、本当に差別は無くなったのだろうか。

次に訪れたのは、歴史館という歴

史資料を展示している建物である。元々は事務管理棟として建てられたものである。展示物の中に、二重構造になった湯飲みがあった。ステンレス製などの保温カップと同じ様の構造の商品があるが、ここで焼かれた陶器で現在も使われている。ハンセン病は抹消神経が侵されていって、熱さや痛みを感じるができなくなる。この湯飲みは、手の火傷を防ぐための湯飲みである。彼らは火傷や怪我が多かった。国家は彼らの強制収容を決めたが、長島の開発は彼らに課せられた。道を切り開き、建物を建てた。重機の無い時代のことである。彼らの手足は瞬間に、傷を負った。それに気付かないまま感染症になり、手足を切断した人や変形や癒着をしてしまった人も多い。

次に訪れたのは、納骨堂である。いろんな人々や団体の寄付もあって、この地で亡くなった方の納骨堂ができた。特に一定の宗教を表現しない納骨堂である。入所者や職員もここに納骨されている。国有地に立つ共同の納骨堂である。ここには靖

国神社のような問題はない。とってもシンプルで、私は好きだ、こんな納骨堂。

最後に案内されたのは、収容棧橋とそれに続く収容所である。収容棧橋というのは、この長島に上陸したならもう出ていくことのないことを意味した。私は、この棧橋と収容所をみて、規模は違うがニューヨークのエリス島を思い出した。ヨーロッパからアメリカに渡った移民が始めて上陸するのがエリス島である。太平洋を渡った移民はサンフランシスコ湾のエンジェル島に上陸した。検疫等のためにエリス島でしばらくの間、留め置かれるのである。エリス島の資料館には、当時の人々の不安に満ちた眼差しの写真があった。しかし、アメリカに渡った移民には明日があったし、アメリカンドリームを持てた。長島に上陸した彼らにはそれすらなかった。どんな眼差しで上陸したのだろう。

収容所は当時のまま残っている。外観はモルタル洋館風で、内部は木造であった。戦前の学校を思わせる建物である。中に入ると、すぐに消

毒剤の風呂に入れられて、現金などは取り上げられて持ち込み品の消毒があった。縦10メートル程で横が20メートル程の部屋があって、そこに数日間留め置かれて、どこの寮に入るかが決められたそうである。私たちを案内してくれた岡山さんがそう言って説明してくれた。彼が少年の頃にこの島に連れてこられた。「私の寝台は、ちょうどこのあたりだった」と部屋の中で手を広げて示してくれた。そして「右側の人は、入所してすぐに亡くなった」と言った。岡山少年の目には、この天井がどんな風に見えたのだろうか。窓の外をどんな思いで見っていたのだろうか。彼の眼差しには何が浮かんでいたのだろうか。

3. つながりの向こうに

岡山さんの気持ちを想像して頂けたらどうか。私の拙い文章でも、少しでも岡山さんのことを思ってもらえたらありがたい。私は、岡山さんにも福島さんにも会った。これからも会い続けたい。その思いを先の項に書いたつもりである。

出逢い、ふれ合い、つながる。この文章を読んでくださった人達が、岡山さんの事を思ってくだされれば嬉しい。そこに少しでもつながりができる。何年か先には、彼らの多くは亡くなっていくだろう。彼らとつながる人々がいなければ、死んだ後に誰の記憶にも残らない。それは彼らの存在そのものが何もなかったかのように消えていく。

確かにハンセン病にかかった人の思いは、私の計り知れないものだろう。僅かでもその気持ちをくもうとする。その悲しさを想像する。人の痛みや苦しみを想像するところに共感がある。人の苦しみや悲しみに寄り添うところに共感がある。

この共感こそが、人と人のつながりである。人生において、「体験して始めて分かる」ということがある。体験しなければ分からないのであれば、人生は全くつまらないものだ。自分の体験したことのみにはしか意味のない人生は、とても偏狭でさみしい。

神の存在を問うように、仏の存在を問うことはない。仏の存在を問う

ことは無意味である。私が仏とつながっていなければ、仏は存在しないに等しい。つながっていてこそ仏が存在するのである。

私の連載の第7回で仏について書いた。仏の三身説の法身仏を「生死を超越したまごころ」と書いた。この「まごころ」につながることによって仏の存在を感じるこ

とができる。私の存在を自覚するのである。つながる思いがなければ何の存在もない。仏につながる思いがなければ、仏教は始まらない。

仏教は、仏には成ったことはないが仏の気持ちを考えてみるところから始まる。仏とつながる思いを持つ人生は悪くない。

お寺の社会性

— 生奥坊主のつづやき —

拾四

竹中尚文

1. 御仏飯さん

お仏飯と言うものがある。家庭の仏壇やお寺の本堂で仏様にお供えするご飯である。茶碗にご飯を山盛りにするのではない。金属製や陶器製の広口シャンパングラスのような形の容器にご飯を盛って仏様にお供えをするのである。

ただのご飯なのであるが、仏様にお供えをすると言うので、「御」を付けて御仏飯になり、さらに敬称を付けて「御仏飯さん」と言うことも多い。この御仏飯さんを若い門徒さんは、御仏飯を三個セットでお供えすると思っていたそうだ。

また、こんな話もある。知人は寺で生まれた。子どもの頃、御仏飯を本堂までお供えに行くのが難行だったそうだ。親から御仏飯に息をかけてはいけない、と言われていたの

で、御仏飯を持つと続く限り息を止めて運んだそうだ。

また、我が家のご飯は、御仏飯の形が作りやすい硬さに炊きあがる。実は、私は硬めに炊いたご飯が好きなのだが、その要望は通らない。

お参りをされていて、そこのお宅はパン食が多くて、めったにご飯を炊かないそうだ。御仏飯の代わりにパンはダメだろうかと質問された。それもいいかもしれない。

門徒さんのお宅にお参りをしていると、たまにちらし寿司であったり、赤飯であったり、まぜご飯だったりする。私は、こんなスタイルも好きだ。

2. お米ネットワーク

私の暮らすお寺は、田園地帯にある。毎年、秋のお米の収穫時期が過

ぎるとお寺にお米が集まる。専光寺のお仏飯米である。近年は米作りを止めて給料生活だけをする人も増えた。今、農家の集約化がどんどん進行している。

10 年程前に専光寺の門徒世話人会で、これからはお仏飯米を集めるのは止めて、お金で集めてはどうかと提案があった。専光寺の場合、一軒あたり 3 kgのお米を集めているのだが、それに見合うお金で集めようという提案だった。

お米を集めてくれる地区の世話人さんにとっては、これは大変な作業である。10 軒も集めると 30 kgになる。それをお金で集めると、その労働はずいぶんと軽減される。そのお金で、御仏飯として必要なお米を買えばいいというのである。さらに、お金はお米より保存しやすい。

住職としての私は、地区の世話人さんには苦勞をかけるけれど、できるだけお米で集めてほしいと願っていた。第一の理由は、農家である門徒さんの作ったお米で御仏飯をお供えしたいから。さらにもう一つ理由があった。

専光寺の御仏飯米にはその働きがある。御仏飯米の行方である。御仏飯米は、お米を必要としている所に送る。宅配便で送るお宅が 4 軒、私が直接持参するお宅が 2 軒ある。他に団体が 1 ヶ所。この 6 軒は、楽な生活ではない。お寺から、お米が届くとありがたいと思ってくれるお宅である。団体に送っているのは、ホームレス支援の団体である。

ホームレス支援団体と言うのは、大阪駅前でもホームレスに食量や衣類などを配布して、周辺をホームレスの人達と掃除をしている団体である。そこに私たちはいなり寿司を持って行く。このいなり寿司のご飯は、本願寺の別院から御仏飯のお下がり頂くのである。仏様にお供えをした御仏飯を食べきれない分を冷凍にしておいてもらって、まとめてもらっている。それを専光寺の仏教婦人会という組織の会員さんの有志がいなり寿司にしてくれるのである。私はいなり寿司を大阪駅前まで運ぶ係である。そこには、いろんな宗教関係の人達がサポートに来ている。ひとつのインターフェイ

ス(inter faith 異宗教)の協力である。

いくらか前の話である。小学校6年生の女の子から電話があった。電話を受けたのは妻だった。

「おばちゃん、ウチにお米がほとんどないね」

「ゴメン、ゴメン。直ぐ送るね」
この子はお米が残り少なくなってきたことを母親に言わずにお寺に電話をしてきたようだ。彼女は三つ年下の弟と母親の三人暮らしである。ご飯を炊いて、母親の帰りを待っているのだろう。ご飯を炊く役目を担う彼女は、お米の残り少なさに気が付いたのだろう。母親の経済的大変さも知っているのだろう。そこでお寺に電話をしてきた。私たちは、彼女がお寺を思い出してくれて、嬉しかった。

私の子どもの頃は、ご飯を炊く子供も少なくなかった。今の時代には少数派になったとは言え、頑張っている子供たちもいる。

別のお宅の母親が電話で、こんな話しをしてくれた。私はお寺からお米が届くと、自分のつらい時だとしても嬉しくなると言う。私は、忘れ

られていない、私は思われていると言う気がするそうだ。

お米を送ったお礼を言われると、私が作ったお米ではない、仏様のお米なので、食べる前には「いただきます」を言ってねと言う。「(亡くなった)おとうさん、ありがとう」でもいいから言ってよねとお願いしてきた。こんな時、仏様と私たちの繋がりがあるように思える。

話しを御仏飯米に戻そう。私は門徒さん達に御仏飯米の行く先の説明として、先の少女の話をするところがある。

ある時、私はお米を収納していて、「あれっ？」と思った。私は、お米を保存するために、300 kg用のお米保存冷蔵庫を買った。御仏飯米を集めるのを止めようと提案があった頃、その冷蔵庫に250 kg程のお米が入った。一年間に集まるお米がそのぐらいだ。それが、いつの間にか冷蔵庫に300 kgのお米が入るようになった。翌年は、もっとたくさん集まる。昨秋は、400 kgを越えた。いつの間にか、それぞれのお宅で、少しずつ多くのお米を出してくれ

ていた。

こんな優しさは私の好みだ。みんなが少しずつ力を出し合って、大きな力になるのはとても嬉しい。

英語に **due(s)** という言葉がある。支払われるべきお金である。会費や学会費や組合費や町内会費などを総称する。自分が支払う事で、誰かが助かるお金のことだ。御仏飯米もこれに入るかもしれない。言語はその社会背景の中にある。日本語にデューにあたる言葉は存在するのだろうか。

3. おじいちゃん

高校時代の友人のおじいちゃんの話である。もう 40 年程前の話だ。最近になって、彼がおじいちゃんの話をしてくれた。

おじいちゃんはお寺の門徒総代をしていたそうだ。そのお寺の本堂を修理することになったので、費用を工面するために、おじいちゃんは村中を寄付依頼に回ったそうだ。おじいちゃんが来ると、玄関に鍵をかけるお家もあったそうだ。お金を集めに来るおじいちゃんは、村人から

好かれることはなかった。その上、おじいちゃんはそのお寺の住職を好きじゃなかった。

高校生の彼は、おじいちゃんはずいぶんお寺の寄付集めをしているのか分からなかったそうだ。おじいちゃんが嫌いな住職が喜ぶことをして、何になる。おじいちゃんの行動に腹立たしくも感じたそうだ。

近年になって、彼はおじいちゃんの話をしてくれた。今、彼はおじいちゃんの行動に理解と敬意を持っているのだろう。おじいちゃんは、住職のために寄付を集めて回ったのではない。おじいちゃんはお寺のために寄付を集めて回ったのだ。おじいちゃんは、住職のことが嫌いでも、お寺のことが好きだったのだろう。私は、おじいちゃんがとっても深い所でお寺を認識していたように思う。自己のアイデンティティを仏の教えの中に見出していたように思う。

世に坊さんにお金を支払うと言う表現がある。それなら、お寺に支払うと言う方がいい。私は、偉い坊さんではない。いかなる修行もでき

ない私を拝む人はいない。タイトル通りの生臭坊主である。私は御布施に値するか疑問である。

4. お寺と坊さん

多くの人々が坊さんにお金を支払うと言う表現を使う。私たち坊さんはそれを考えてみなければならない。一般の多くの人達にとって、坊さんにお金を支払うのもお寺に支払うのも同じことだし、お金を支払うのも御布施をするのも同意語となっている。

それは、坊さんが門信徒の方から頂く御布施をそのまま自分の収入としているからだと思う。坊さんは門信徒の方々から御布施を預かって寺に帰って、それをご本尊様から

頂くのだ。

坊さんとお寺、人々はやはりお寺に帰属すべきだろう。カリスマ住職などという言葉も踊るが、坊さんは仏ではない。坊さんという人間に帰依すると言うことに危うさを感じる。オウム事件も含めて宗教者への帰依、依存が悲劇を生むこともある。それよりは、自分は〇〇寺のメンバーだというような意識の方がよさそう。でき得れば、先程のおじいちゃんのように仏の教えの中に自己を形成できればと思う。

お寺の社会性

—生奥坊主のつぶやき—

拾五

竹中尚文

1. マイタイム

「It's my time.」

私の隣でアンドリューがつぶやいた。

美しい夕暮れだった。昼間は五月晴れと言うのか、大陸を思わせるような青空がひろがり、そのまま夕暮れを迎えた。私たちは、お寺の山門を西向きに出た所で、沈む夕日を眺めて足が止まった。

アンドリューは私たちのお寺の本堂で、子供達に英会話を教えている。私たちのお寺では、子供をお寺に呼び込む手立てとして、本堂で英会話を教えている。

彼のつぶやいた「my time」はどんな意味なのだろう。

2. 聖徳太子と父

日本の仏教寺院にある絵や像で最も多いのは聖徳太子ではないか

と思う。日本の仏教は聖徳太子より始まったと言える。6世紀前半に仏教が日本に伝来し、6世紀末から7世紀初頭に聖徳太子が仏教を積極的に受け入れて、日本に仏教が普及した。8世紀の奈良時代には国家仏教となっていく、と言うのは教科書的説明である。ここで、取り上げたいのは聖徳太子がどのような仏教観を持っていたのか。

聖徳太子は、仏教を理論的に理解し、個人的信仰と捉えていたのではないかと思う。それは呪術的でも先祖崇拜的でもなかったようだ。

聖徳太子は、そのカリスマ性のために伝説の多い人である。彼についての伝承がすべて真実とは限らないのだから、その明確な思想を解き明かすことは難しいようだ。私が注目したいのは、聖徳太子は仏教を呪術的なものではなく教理的に理解

していた処である。それは彼の著作と言われる、「三経義疏」（『法華義疏』『勝鬘経義疏』『維摩経義疏』）の存在がある。これらは、三つの経典を論理的に注釈したものである。この三経義疏が聖徳太子の著作であるかないかの諸説はあるが、いずれにしても聖徳太子は仏教の教理を熟知していたわけである。中国にシルクロードを経て仏教が伝わった頃、在来の宗教である道教とどちらが優れているかと、呪術を競った話がある。これは、宗教が伝わった初期の頃、その思想を体系的に理解することがいかに難しかったかを示す話しである。

また、聖徳太子が仏教を個人的な信仰としていたことについて、反論もあろうかと思う。聖徳太子は『十七条の憲法』を定めて、その中で「篤く三宝を敬え」と言って、仏教をその政治思想の基礎にした。しかし、それは奈良時代の国家仏教につながる。国家仏教というのは鎮護国家を祈るものであろう。一方、聖徳太子は「世間虚仮、唯仏是真」という言葉を残したと言われるよう

に、国家や社会を真実ではないと捉えている。仏教を内的真理と捉えている。

話しは変わるが、私の父が死んでから9年になる。父との親子仲は、よかったとは言えなかった。生き方も人生観も異なった。だから、よく衝突を繰り返した。衝突をするからと言って、理解し合えなかったわけではない。

父が60代半ばの頃だったと思う。ある日、私に電話をしてきた。ずっと阿弥陀さんの前で手を合わせてきたが、りっぱな人にはなれなかった、とだけ言った。

父親も浄土真宗の僧侶であった。浄土真宗は、自分がりっぱな人になるためにお参りをするような教義を持たない。父親はそれを知らなかった訳ではない。私は、父が本尊の前に一人だけでいる姿を思い浮かべた。父が一人で本尊の前で、自己と向き合っている姿を想像した。

父の死後、私の最も好きな父の姿である。

3. Your time

アンドリューの言った「my time」はどんな意味なのだろう？あなたは「your time」を持っているのか。私たちは生活の中でどれ程の頻度で自己と向き合うのだろうか。自己と向き合うことにどれ程の時間をさいているのだろうか。

4. 世に仏

私は、一時でも自己と対峙できればいいというのではない。それは必要なことであるが、それで十分ではない。ほんの少しばかりの自己との対峙の状態にとどまるのは、難しく危険でもあると思う。私は、稚拙な宗教観がカルトと無宗教の始まりだと思っている。聖徳太子が呪術に流されることなく、教理を理解し自己の内的なところに信仰を深めたのは、私たちの道標である。

聖徳太子の仏教観は、信仰は個人的なことのようだ。日本仏教の特徴でもある家の宗旨を肯定するものではない。

私はしばしば「お寺を移れるの？」という問いを受ける。信教の自由が保証されているこの社会で、

お寺を移れるのは当然である。「ウチの住職は、カネの話しかしない」「ウチの住職は、お経が済むとそそくさと帰ってしまう。まともに話しもしない」「ウチの住職は時間にルーズだ」「ウチの住職は上から目線で、私たちを導いてやるという態度だ」「ウチの住職は、お参りにも来ない」などと不満をたくさん聞くが、実際にお寺を移ったと言う話しは、あまり聞かない。

その理由に、お寺の付き合いは長期間にわたるのだから、移るにはそれなりの決断が必要になるのかもしれない。移ったところで、お寺はどこも同じようなものだろうと言われていたのかもしれない。

私のこの生臭物語の第4回でお話をした、息子さんを亡くしたご夫婦に後日談がある。私はこのお家に七日参りで二ヶ月足らずの間、お参りをした。家族それぞれが、涙を流しながら明日を生きようとしていた。ご両親もご兄弟も、計り知れない悲しみを抱えながらも生きる姿に私は心打たれるだけであった。

四十九日が過ぎた頃に、父親が私

を訪ねてきた。数日前に息子が勤めていた会社の社長が来た。息子さんが亡くなられて、数名の会社ではあるが、その社員たちが動揺している。そのことについて、社長がよくお参りをしているお寺に相談に行ったらしい。そのお寺の住職が言うには、若くして亡くなった社員はまだ迷いの世界で苦しんでいる。だから自分が回向してやるから、その社長に回向料を準備するようにいった。社長の回向料だけでは不十分なので、両親も回向料を準備して参拝するようにいったそうである。

父親は私に、自分はそんな金額の回向料も準備できない。それ以上に息子が迷いの世界で苦しんでいるならば、とつても悲しいと言う。父親は、息子は本当に成仏できていないのか、と私に尋ねた。

私は、迷いの世界で苦しんでいるのはその住職だろうと思った。偉そうなことは言えない、私も金欲世界での迷いの民である。

息子が仏に成ったかどうかにつ

いて証拠写真があるわけではないが、私は彼が仏に成ったと思っている。仏に成ったからこそ、両親は手を合わせたのだ。両親はその仏に救われてきた。両親と兄弟が明日を生きられるようになったのは、仏の力だと思う。彼らの生きる姿が何よりの証拠だと思う。

私がここで言いたいのは、この社長の選択である。私たちの社会は需用者の選択が供給者を育てる。この社長の選択がこのまま続けば、人の悲しみを収入源にするお寺が繁盛することになる。そのようなお寺が増えることになる。拝金教のお寺も、欲望の世界を跋扈する坊さん^{ぼっこ}も、それを育てた人々がいる。

軽い気持ちでお寺を訪れるのも悪くない。観光気分でお寺に出掛けていくこともあるだろう。でも、いつか自己との対峙する時に会い、仏の声を聴き、仏を受け入れる心を持ってほしい。お寺はそのような舞台を提供する場所でありたい。

お寺の社会性

—生奥坊主のつおやき—

拾六

竹中尚文

今回は、この原稿を書く準備の時間が足りなかったので、私たちの専光寺のボランティア活動をして下さった方への礼状を転載したい。その内容は、前々回の話しと重なるかもしれないが、ご容赦願いたい。

この度は専光寺仏教婦人会のいなり寿司作りと、その配布にご尽力頂き、ありがとうございました。心より御礼を申し上げます。ごちそうさまでした。

30年以上前のことですが、日本文学を研究しているアメリカ人学者が、「ごちそうさまの意味を知っているか?」「いま、あなたが食べた食事について、いろんな人々が走り回ってくれたことへの感謝なのだ」と教えてくれました。同じ頃、京都や大阪の商店で何も買わな

った私が店を出る時に店主からかけられる「おおきに」という言葉の意味も知りました。店主は、客が店を訪れたことによる「御縁」に感謝をしているのだと言うのです。

今、私はいなり寿司を作っていたことに対して、「ごちそうさま」と「ありがとう」と申し上げます。

ところで、御仏飯のお下がり(お下がりとは、仏様にお供えをした品物を供え終わって下げた物)と御仏飯米で、ホームレスの人々にいなり寿司を作ること疑問をお持ちの方もおいでになるようです。その疑問の根底には、ホームレスの人々の現況が自業自得であるという見解から来ているように思えます。人生は自らの努力によって開かれるという人生観でありましょう。確かに人生は、自転車を漕ぐようなもので

努力を怠ると倒れてしまうものです。しかし、倒れる者が全て怠け者であるとは限りません。人生はそんなにシンプルなものではありません。現在の私は、これまでいろんな人たちに助けられて生きて来ました。私だけの力で生きてきたのではありません。あの時、あの人に出会っていなければ、今の私はとても存在しないだろうと思う人もいます。人生は氷の上を歩くようなものだとも思います。どこが厚いか薄いかは分かりません。いつ、私たちは薄氷を踏み抜いて深みに墜ちていくのか分かりません。

私はいろんな人のお葬式に出ます。亡くなられた方の人生を振り返り、「人生、山あり谷あり」と言いますが、ほとんどの人生が「谷ばかりで、ほんの少し山があるだけ」であるように思います。どの人生も苦と楽の収支は合わないものです。

最近、こんなお葬式がありました。亡くなったのは28歳の青年です。夜の間、心臓麻痺で亡くなっている息子さんを、お母さんが発見しました。全く予期せぬ死でした。悲嘆

というような言葉では表せない悲しみでした。このご両親は一生懸命に働いて子供たちを育てました。ずいぶん苦勞もあつたと思います。しかし、どれ程の苦勞をしようとも、この出来事に比べれば何事でもないと私は思います。

お葬式の間、私は「このご両親が何をした？これほどの報いを受けるようなことなどしてこなかった。この息子さんもここで命を絶たれる程のことなどしなかった」と思っていました。それぞれの人生にもたらされる出来事に対して、自己責任と言い放つ人たちがいます。生まれてきたこと、死んでいくこと、そこで言われる自己責任は浅薄な言葉です。

この青年の七日参りに、近所に住むお婆ちゃんがお参りに来ました。そのお婆ちゃんは、数年前、80歳の時に息子を送りました。爾来、お婆ちゃんは悲しみを噛みしめるように生きてきました。お婆ちゃんは「私はお参りに行く」という強い意志で歩いてきたのだと思います。どんな言葉が交わされたか分かりま

せんが、このお婆ちゃんは悲しみに寄り添う姿でした。この姿を御同朋（おんどうぼう）と言います。同胞ではありません、同じ友達なのです。悲しい時、つらい時、苦しい時、悲しみに寄り添ってくれる友達はありがたいものです。

御同朋の社会というのは、仏様と人の繋がりによる社会であり、言い換えれば仏様の御縁で結ばれた社会なのです。この繋がりの中で我々は生きています。いま、あなたが仏様のご飯でいなり寿司を作るとい

う援助の手を差し出してくださいました。手を差し出したあなたの背後で、仏様が微笑んでいるかもしれません。悲しみに始まった御縁かもしれませんが、悲しみだけで終わらせないのです。この御縁に私は改めて「おおきに」と言います。あなたも「おおきに」と言うかもしれません。仏様も「おおきに」と言うかもしれません。そこには感謝と喜びの南無阿弥陀仏があります。

お寺の社会性

—生奥坊主のつごやき—

拾七

竹中尚文

1. 長崎へ

長崎に行ってきた。隠れキリシタンは、江戸幕府から潜伏して禁制の宗教を守った人たちである。そして今、長崎でクリスチャンが最も多数を占めるわけではないのが、私の疑問だった。長崎では仏教徒が多数派なのである。江戸時代、隠れキリシタンは全国に存在したようだ。しかし、その多くは長崎地方に集中したようだ。

同じ江戸時代に、薩摩藩と人吉藩は浄土真宗を禁じた。この弾圧はかなり厳しいものであった。この抑圧のなかでの阿弥陀信仰や、その信仰する人たちのことを隠れ念仏という。当時、隠れ念仏の発覚は拷問と処刑に直結した。この状況下で、密

かに念仏を守る様子は隠れキリシタンと酷似している。ところが、明治以降の鹿児島県は浄土真宗の門徒が多数派を占める。浄土真宗においても、鹿児島県は巨大門徒数を誇る地方である。

同時代に酷似した状況を経ながら、鹿児島では浄土真宗が多数派になり、長崎ではキリスト教は多数派にならなかった。明治以降の鹿児島において、浄土真宗の熱心な布教活動によるものであると言う人もいるが、明治以降の長崎でカトリック教団は熱心な布教活動を続けている。

隠れ念仏の子孫たちは、浄土真宗門徒になり、隠れキリシタンの子孫は必ずしもクリスチャンにならな

かった。なぜだろう。この疑問が、私の長崎行きの動機である。

2. 隠れキリシタン

大浦天主堂(地図 2)は幕末に、長崎に建てられ、現存する日本最古の教会である。当時は「フランス寺」と呼ばれて、長崎の誰もが知る建築物であった。この大浦天主堂の設計にも関与し、この天主堂最初の神父プティジャン師に、十数人の日本人が自分たちはキリスト教徒であると名乗り出た。プティジャン神父はそれをローマ教皇に報告をした。教皇は約 230 年にわたって信仰を守った人々に驚き、「東洋の奇跡」と呼んだ。これを「信徒発見」と言う。

密かに信仰を守り続けてきた隠れキリシタンが、これに続いて正式なキリスト教徒になったわけではない。キリスト教に対する禁制が解けたのであるから、ほとんどの隠れキリシタンの人々はキリスト教徒になったとは思っていた。ところが、そうはならなかった。以前からの隠れて守り続けた宗教を続けた人々がたくさんいた。

江戸時代、禁教令の中で密かに信仰を守った人たちを「隠れキリシタン」と呼び、信仰の自由が保障された時代にも先祖からの宗教を踏襲してきた人々を「カクレキリシタン」と呼ぶ。この宗教とは、禁教令の解けた時代においてはキリスト教とは言えず、日本の一民族宗教である。この「隠れキリシタン」と「カクレキリシタン」という表記はその定義を含めて、この分野で大きな研究業績を著している宮崎賢太郎氏に従う(1)。

3. 枯松神社



写真 1 はカクレキリシタンの神社、枯松神社である(地図 1)。場所は、長崎県の西彼杵半島(にしそのぎはんとらう)の外海(そとめ)と呼ばれる地方にある。現在の行政区画では長崎市上黒崎町にある。

枯松神社の中に入ると、建物の一番奥にほこら風に作られた石が置かれ、文字が彫られている。上部に横書きで左から右へ「サンジワン」、中央部に縦書きで「枯松神社」とある。形状からも古いものではないことは明らかだ。

サンジワンというのは、人名である。1609年に長崎にやって来たヨーロッパ人宣教師であった。江戸幕府のキリスト禁教令(1614年)によって、日本国内にいる宣教師は長崎に集められた。その時に出頭しなかった宣教師が少なからずいたようだ。サンジワン師もその一人で、西彼杵半島で密かに宣教を続けたようだ。ほどなくして体調を崩し、現在の黒崎で息を引き取った。彼を看取った老婆が、現在の枯松神社あたりに埋葬した。つまり枯松神社は、カトリックの宣教師を祀る神社なのである。この神社には、第2次世界大戦で出征した若者が奉納していった国旗もある。枯松神社は、神社なのである。これはカクレキリシタンを象徴する建物でもある。このような神社は大変珍しいので、マス

コミにも取り上げられることも多いようだし、興味深い研究対象でもある(2)。

また、この外海地方は遠藤周作の『沈黙』の舞台となった所と言われる。黒崎の北、出津(しつ)という所に遠藤周作文学館がある。四十余年前、私が高校生の際に社会の授業の中で森下先生がこの『沈黙』を紹介してくれた。本稿の始まりもここにあるように思う。

4. カクレキリシタン

江戸時代、隠れキリシタンの人たちは全国にいたようだ。単独ではなく、人の集まりとしての隠れキリシタンは長崎や天草や久留米にいたようだ。現在、カクレキリシタンとしての社会を維持するのは、長崎県内だけである。県内の外海(そとめ)、五島、平戸、生月(いきつき)(地図1)である。現在の彼らの信仰や宗教儀式を見ることによって、江戸時代の隠れキリシタンの様子をうかがえる。

一般的なカクレキリシタンの家屋では、座敷には神棚があり、奥の

部屋には仏壇があり、人目のとどかない納戸に隠れキリシタンとしての礼拝対象を置いた。この礼拝対象は、外海や五島では観音菩薩像のマリアであったり仏像のデウスであったり、像が多いそうだ。平戸や生月では絵図が多く、和装のデウスや和風の聖母マリアが描かれるという。この点について、片岡弥吉氏は礼拝対象の秘匿性ゆえに土俗化が進んだ。そして本来隠れ蓑であったはずの寺参りに抵抗感が無くなっていったのではないかと述べる(3)。こうした隠れキリシタンの土俗化は、彼らがタタリやケガレを恐れることでも言える。

宗教専門家の不在のまま、長年にわたってその宗教を維持するのは困難なことである。教学的知識が乏しい状態で、その宗教行事の変更は難しい。宗教行事の継続が困難になると、その宗教社会の維持が困難になる。例えば、近年の生活の変化にともないカクレキリシタンの行事の継続が困難になった。その時に、カクレキリシタンを棄教することになるケースがあるそうだ(4)。一方、

近年の仏教において法事などの仏事で膳を並べての食事がめっきり少なくなった。食事を止めても法事はなくなる。宗教行事の変化が棄教にはならない。

専門家不在の状況について、教団はどうしたのか。この点について、イタリア人宣教師シドッティの話しをしたい。彼は、1708年に屋久島に上陸した。キリスト教の禁教後、百年足らずの時期である。彼は上陸後、直ぐに捉えられて長崎を経て江戸に送られた。彼を取り調べたのは新井白石で、この取り調べにより『西洋紀聞』を著す。一方、シドッティの試みの結果は全くの失敗だったが、彼は思いつきで日本に入国したのでもなければ、破滅型の行動を選んだのではない。彼は日本に行くことを決意し、その計画は教皇の承知するものだった。彼はヨーロッパで入念な準備をしてフィリピンに渡った。そこで、4年間を過ごす内に禁教で国外追放となった日本人たちから言葉や文化を学んだ。そして、彼の渡航のために船が準備された(5)。当時、隠れキリシタンがカ

トリック教団に宣教師の派遣を要請した記録は見当たらないが、専門家を必要とした状況こそが要請と言えまいか。

この専門家の不在による宗教の土俗化については、かくれ念仏でも同じことがいえる(6)。この状況に対して、本願寺から送られた無涯という名の僧侶が薩摩藩内に潜入し、発見されて逃亡の果てに自害している(7)。これはシドッティのケースとよく似た出来事であった。

ここで改めて、なぜ隠れキリシタンはクリスチャンにならなかったのかを考えてみたい。クリスチャンにならなかったと言うのは正確ではない。「隠れキリシタン」は明治以降に「クリスチャン」と「カクレキリシタン」と「仏教徒」になったと言える。このうち、カクレキリシタンはその宗教が土俗化して本来のキリスト教とは全く異なる宗教なのである。先に述べた枯松神社は、このカクレキリシタンを象徴する建物であるといえる。

キリスト教の側からみれば、カクレキリシタンをキリスト教として

認められないだろう。一方、カクレキリシタン側から見れば、自分たちは先祖がキリスト教と信じて守ってきた宗教をそのまま受け継いでいるつもりであろう。先祖が命がけで守った宗教をそのまま守るのは当然と思うかもしれない。だから、仏壇や位牌の破棄を求められても、とてもできなかった(8)。

5. シンクレティズム

日本の宗教的特性のひとつは、シンクレティズム(syncretism)である。重層信仰とでも言えばいいだろうか。近年まで、仏壇と神棚の両方を置いた家が多くあったし、今もかなりあるようだ。それに加えて、デウスやマリアをも祀ってきたのがカクレキリシタンである。彼らも、一般的な日本人の宗教観を有する人たちであろう。

日本のお寺でも境内の中に神社の祠がある所がある。八幡大菩薩という菩薩の神様がいたりする。多くの人々は、こうした神仏習合が日本的宗教の特質のひとつだと思っている。シンクレティズムに対して、

キリスト教を宗教的背景とする社会の人から見れば異質である。それは、プロ野球のジャイアンツファンであると同時にタイガースファンであるようなものだ。一方で、多くの日本人はこうした自分たちの宗教的特質を知っている。自嘲気味に、生まれてお宮参りをし、結婚式は教会にお願いし、お葬式はお寺に依頼する。

6. 崇福寺



写真2は、長崎市内にある崇福寺(そうふくじ)の第一峰門(だいいっぼうもん)で、国宝である。いかにも中国風のお寺の門である。長崎には唐三箇寺と呼ばれる中国人建立の寺院がある。創建順に興福寺(こうふくじ) [1623]、福濟寺(ふくさいじ) [1628]、崇福寺 [1629]である。また、これらに聖福寺(しょうふく

じ) [1677]を加えて唐四箇寺とも呼ばれる(地図2参照)。日本黄檗宗(おうぼくしゅう)の祖、隠元隆琦(いんげんりゅうき)が来日して、最初に留まったのが興福寺と崇福寺であった。彼は後に京都宇治に万福寺を建立し、日本に黄檗宗を開き、禅宗に新風を送り込んだ。

鎖国をした江戸幕府は、長崎でオランダと中国(明・清)と貿易をした。当時、中国人はその人数の多さもあって、長崎各地に居留した。後に唐人屋敷の建設によって、中国人居留区が形成された。彼らは出身地別に寺院を建立した。それが唐三箇寺 [唐四箇寺]であった。それは、宗教的依拠であるだけでなく相互扶助や親睦の場であった(9)。

唐四箇寺の内、福濟寺は原爆で壊滅的な被害を受けて当時の姿はない。また、聖福寺は原爆の被害に加えて経年損傷も大きい。興福寺と崇福寺は当時の姿を今もよく残している。両寺とも長崎の繁華街から近く、訪れやすい。

写真3は崇福寺の媽姐(まそ)堂である。両寺とも本堂としての大雄宝



写真3 崇福寺



写真4 興福寺

殿(だいゆうほうでん)と並んでこの媽姐堂がある。写真4は興福寺である。右手前の建物が本堂、左奥が媽姐堂である。媽姐とは道教の神様である。日本の寺院の敷地内に神社があることがある。しかし、このように本堂と並立的な神社は存在しない。

また、この両寺にはやはり道教の神としての関帝も祀られている。ここには、はっきりとしたシンクレティズムがある。シンクレティズムは日本だけの宗教特質とは言えない。むしろ、中国の宗教的特質であるといえる。日本人が自らの宗教的特質

であると思っているシンクレティズムは中国の宗教の影響であろう。

余談になるが、九州北部には「くんち」という秋祭りがある。旧暦の九月九日のお祭りなので、現在は10月に開催される。神社のお祭りとされるが、中国の九月九日の重陽節を起源とする説がある(10)。九日の「くにち」が「くんち」になったというのである。この「くんち」は日本各地の秋祭りとの共通点が多い。

宗教を含めた思想は他の思想との遭遇により混和と整理を経て深化する、と私は思っている。カルトと呼ばれる宗教にはこれができない。

7. 雪窓宗崔

雪窓宗崔(せっそうそうさい)は、『對治邪執論』の著者である。この『對治邪執論』(1648)は島原の乱(1637-38)以後、仏教からのキリスト教に対する批判書のひとつである。それらの中では最も高い評価を受けたのが『對治邪執論』で、幕府に保存された。雪窓宗崔は、『對治邪執論』を書く前年に『興福寺筆記』

を記している。この『興福寺筆記』は近年、大桑齊氏によって発見された(11)。

この『興福寺筆記』に注目しているのがフレデリック・ジラル氏である。ジラル氏は『興福寺筆記』が公的性格を持たないので、雪窓宗崔の思う所を率直に記していると見ている(12)。雪窓宗崔はキリスト教や浄土教や日蓮宗は後世の救いを一律的に求めていると批判する。これに対して、禅宗は一經に頼らず、普遍的で幅広い教義であると言う。

ここで雪窓宗崔の考え方の興味深いのは、シンクレティズムを認めないキリスト教に対して偏狭であると批判している。一方で、禅宗は普遍的と言って、シンクレティズムを肯定している。さらに、浄土教や日蓮宗は普遍的でないとは批判している。つまり、雪窓宗崔はキリスト教を批判しながら、日本仏教の特徴を語っている。日本仏教はシンクレティズムをその特徴としているが、それを否定する部分もある。日本の宗教的特徴は、思いのほかシンクレティズムだけではない。

8. 私の思い

私は子供の頃、父親から村祭りの参加を禁じられた。理由は、お寺の子であると言うものだった。秋になると村祭りの太鼓の練習に子供たちが集まった。私はその輪に入ることはなかった。私にとって秋祭りは嫌な季節だった。大学生の時に帰省して祭りの神輿を担いだことがあった。それまでの鬱積を晴らしたような気がした。それから得度をして僧侶になった。もう、神輿を担ぐことはない。自らの意思である。

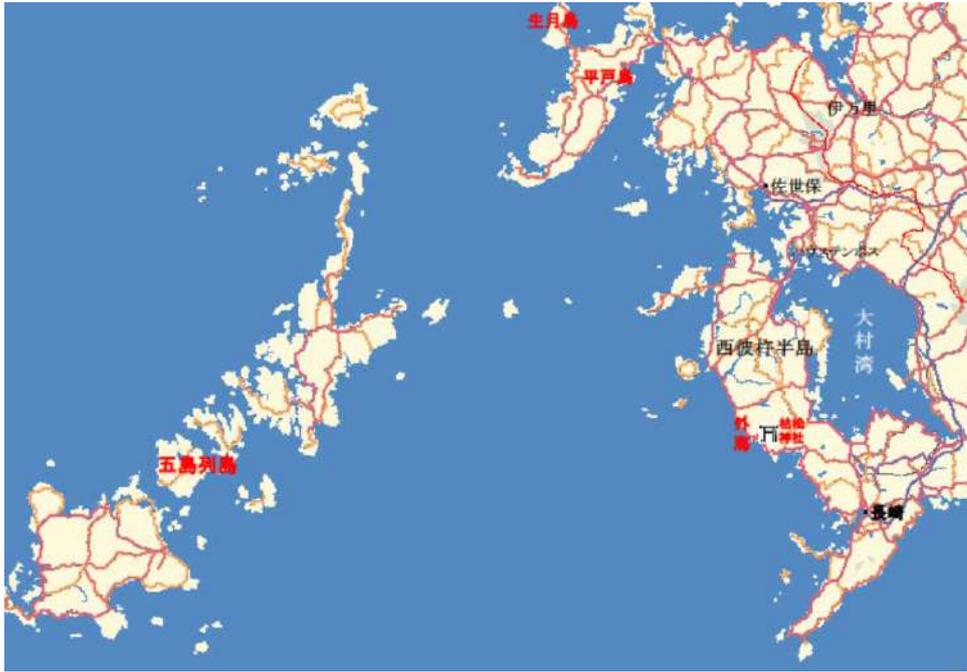
近隣の僧侶の中には、村祭りは地域行事であるのだからと言って、参加している。私は僧侶が村祭りに参加してはならないと言うつもりはないが、村祭りが神道行事であるのも否定できない。一方で、しなやかな心を持たないのかと自問する。

私たちは、日本の社会に暮らしている。その社会は、シンクレティズムという宗教的特性を持っている。それも日本の場合、あいまいなシンクレティズムである。「何宗でも供養します」と看板を掲げているお寺

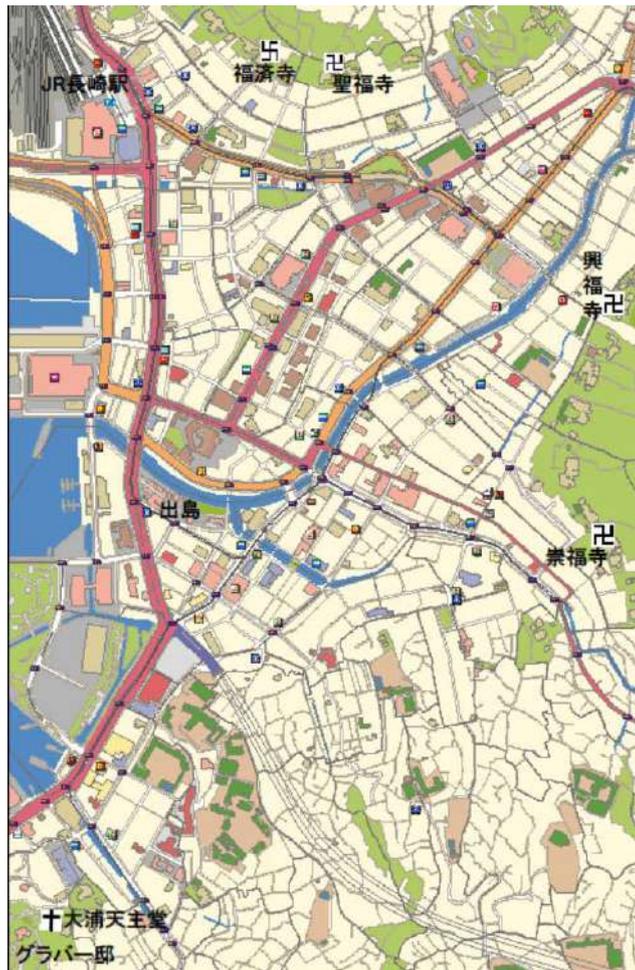
を見ることがある。これはシンクレティズムを利用したお寺の経営戦略かもしれない。お寺の方針が何であれ、この看板を見て依頼する人たちもいるのだろう。

こうした社会に暮らす私たちは、この特質を使って、自らの立ち位置をあいまいにすることもできる。その中で私が、宗教的アイデンティティをどのように構築し維持するのか問題である。

- (1) 宮崎賢太郎『カクレキリシタンの信仰世界』(1996 東京大学出版会)、『カクレキリシタンの実像』(2014 吉川弘文館)
- (2) 「枯松神社の祭礼」ムンシ、ロジェヴァンジラ「南山大学人類学研究所研究論集」(2013)
- (3) 片岡弥吉共著『近世の地下信仰』(1974 評論社)
- (4) 「集団改宗の原理と課程に関する一考察」谷富夫『社会学評論』vol.30(1979-80)No3
- (5) 「宣教師シドゥティの研究」カパツ・カロリーナ『論集』(神戸女学院大学)49-2(2002)
- (6) 「九州地方における「かくれ念仏」の実証的事例研究」古賀和則ほか『仏教文化研究所紀要』#32 [1993]
- (7) 「日本人の宗教心VIーかくれ念仏考」大江法城『福井工業大学研究紀要』1(1997)
- (8) 片岡弥吉『かくれキリシタンー歴史と民俗ー』(1967NHK ブックス No.56) 『片岡弥吉全集第二巻』(2014 智書房)にも載録
- (9) 王維『日本華僑における伝統の再編とエスニシティ』(2001 風響社)
- (10) 王維：同上
- (11) 大桑斉『史料研究雪窓宗崔一禅と国家とキリシタンー』(1984 同朋舎)
- (12) 「キリシタン時代の切支丹批判書」フレデリック・ジラール『アジア遊学』127(2009)



地図 1



地図 2

お寺の社会性

—生奥坊主のつごやき—

拾八

竹中尚文

1. 儀式

前回、カクレキリシタンの話しを書いた。書きながら、何百年という宗教の存続において、儀式の力が大きいことに気が付いた。儀式が社会の変化に対応できない時は、その宗教が存続できなくなる可能性が高い。儀式を変化させられるのは、その宗教についての知識である。儀式の構成事項が、どのような意味を持つのか知らなければ、社会変化に応じた儀式の変化も不可能だ。

例えば、私は法事後の食事会が必要なのか、と尋ねられることがある。この食事会のようなことを仏教では「お斎(とき)」と言うが、その起源と意味を知らなければ、法事に「お斎」が不可欠であるのか不必要であるのか言えない。

私は、自分があまり儀式に向いていないような気がしている。まず、ふざけた顔をしている。お参り先の家で「スーパーマリオの坊さん」と呼ばれているようだが、そんな顔をしている。スーパーマリオが僧衣を着た姿を想像していただきたい。

私は、ありがたそうに儀式をする坊さんではない。自分自身がありがたくもなければ、偉くもない。だから私がお参りをする姿に、ありがたさを感じる人はほとんどないだろう。私は儀式を行う坊さんとしては不適任かもしれない。それは、かつての私が儀式を軽んじていたからかもしれない。

ある時、老婦人からお参りを依頼する電話があった。孫のためにお参りに来てほしいと言う。「なんで？」

と尋ねると、「孫が拒食症で困っている」と答えた。私は病院に行くことを勧めた。私は、拒食症を治すことはできない。私にも、お経にもそんな力はない。しかし、老婦人は、引き下がらない。結局、私はお参りに行かなかった。孫は入院して回復したそうだ。

また、別の老婦人からお参りの依頼の電話がかかった。彼女は、踏切の傍に家を購入した。昼間は一人で留守番をしていた。ある日、すぐ傍の踏切で鉄道自殺があった。彼女がいつも使う洗濯物干し場にいくつかの肉片が張り付いているのを見たそうだ。その夜から、眠れないという。彼女は、私に仏壇に向かってお経をあげてほしいという。私がお経をあげても、何の効果も無いと思う。それより、病院に行くことだと返答した。彼女は、すでに通院していると答えた。私は気休めにしかならないよと、言ってお参りをした。一週間程して、電話で彼女に様子を尋ねた。少しずつ眠れるようになってきたと答えた。

この二つの事例で、一方には私はお参りしなかったし、もう一方にはお参りをした。お参り依頼の要件は

さほど変わらない。どちらも儀式的というよりは呪術的なお参りを要請するものであった。

ずっと以前の私であれば両方の要請にお断りをしただろう。

ところで、最近読んだ本(『統合失調症』岡田尊司著)の中で、最近の精神医学が精神に対する関心を無くしている、と言う指摘があった。もちろん薬物療法等によって症状の軽減が重要であることを認めた上での言及である。同じようなことは、よく聞くことがある。病院に行き診察を受ける時、医師はコンピューターのモニターばかり見ている。モニターに映し出されるデータばかり見て話している。患者を見てくれない。診てくれているのだが、見ていない。このような話しは、私たち坊さんも同様である。お参りに行って、仏壇の仏具、お参りの仕方、お経のあげ方がどうのこうのと言って、仏様のことを話さないで帰って行った、と聞いたことがある。

透明性、分かりやすさが重要視される時代である。私たちにとって、儀式や作法のことを言うのは易しい。これは正しい、これは間違っている、と明快である。明快なことだ

けを語っていると、私たちはいずれ逼塞してしまうだろう。

2. 御布施

儀式によって私たち僧侶は御布施をいただいて帰る。御布施をいただくという経済的な面から言えば、儀式を増やせば経済的にうるおう。家族を亡くしたばかりの人に向かって、「あなたの〇〇さんは、まだ成仏していません。だから、私が回向(えこう)してあげよう」と、儀式を売り込む僧侶もいる。

人々が望まない儀式に、出向くのは気が進まない。たとえば、法事を勤めたくないけれども親戚がうるさいから仕方なく法事を勤める人がいる。そんな所にお参りに行く時は、足が重い。法事を勤めたくはないという気持ちは私にもすぐに伝わる。そこで、明快な儀式のみを執り行い、御布施をいただいて帰る。次があるだろうか？次にはうるさい親戚がいないかもしれない。その時、法事を僧侶に依頼するだろうか？今、親戚付き合いは薄くなる傾向にある。次の法事の時には、親戚に声をかけないだろう。うるさく言う親戚と縁が切れれば、法事を勤め

ることもないだろう。それを、僧侶たちは人の繋がりが薄くなって、仏事が廃(すた)れると嘆いている。

しかたなく勤める法事にお参りをするのは坊さんにとって嫌なものである。こんな時は儀式だけを執り行って、御布施をいただいてさっさと帰るのも一つである。あるいは、お参りにやって来て、荘厳(しょうごん：佛前の飾り付けのようなもの)や作法の話しかしない坊さんのことをよく耳にする。しかし、それでは仏事が廃れ、仏教が減びるのではないか。坊さんは仏に向かい、その人に向かい、人に出会い、仏に遇うのが本務である。人に出会い、仏に遇うことが仏縁である。しかたない気持ちで始めた法事でも、仏に遇うことができれば、気持ちが変わりはしないか。気持ちが変われば、次回の法事を止めてしまわないかもしれない。儀式の継続が可能かもしれない。儀式が続かなければ、宗教も続かない。儀式が続くには、社会に適応しなくてはならない。

3. 蓄財

紀元前の仏教では、僧は金銭を持つことを禁じられた。今でも東南ア

ジアやスリランカでの仏教において、その戒律は有効である。僧たちは、毎朝の托鉢によって日々の糧を得る。その日暮らしである。

一方、紀元後2、3世紀パキスタン東北部にはずいぶんと多くの仏教寺院があった。今、それらの遺跡を見ると、多くの寺院には倉庫があった。戒律に反して蓄財をしていたことになる。この地方の自然環境や社会環境から見ると、その日暮らしの可能なところではないと思う。もちろん大乘仏教という新しい考えの始まりと言うこともあっただろう。仏教は新たな環境の中で伝統に忠実であったとは言えない。今も私たちは金銭に触れるし、将来のために蓄財もする。

かつて、私がお参りに行くとたくさんの食べ物をくれるお婆ちゃんがいた。そのお婆ちゃんは、自分が一人暮らしであるから、食べきれないとくれる。食べきれないと言って、封を切っていないダンボール箱を何箱もくれる。一人暮らしの老人が、購入する量ではない。そのお婆ちゃんに、なぜ私のお参りに合わせてこ

んなにたくさんの食べ物を買うのか尋ねると、「お寺サンに食べ物もらってもらおうと、誰か困っている人にあげてくれるかと思って」と答えた。私は、このお婆ちゃんにお寺の蓄財の意味を教えられた。

最近、フードバンクの活動が盛んになってきた。こうした活動は、本来はお寺の活動であった。こうした活動をどれくらいのお寺が記憶し伝承しているだろう。また、一般人たちにも、食べ物や金銭のゆとりをお寺に託そうとする意識もない。

4. 将来

今、お寺を取り巻く環境が変化している。それにお寺はついて行けるだろうか？変化に対応するには、儀式のような明解なものが必要である。しかし、その明解な作法や荘厳だけを語り、仏に向き合うことのない僧に、仏教の将来を託すことはできない。

お寺の社会性

—生臭坊主のつぶやき—

最終回

竹中尚文

1. お寺に生まれて

私はお寺で生まれて、そこで育った。私には、お寺という空間が日常であった。それが私にとってお寺が非日常的空間と感ぜない理由だと思っていた。つまり、「夜の本堂は怖くないのか？」と尋ねられたときの答えである。特に怖いと思わない。この質問の背景に、お寺を霊的空間と捉える人もいる。うちは田舎寺だから、私は境内に落ちた猫や狸の糞を拾い集める作業をすることがある。お寺が霊的空間であるなら、こんな作業は不要である。夜の本堂を怖く感ぜないのは、私がお寺で育ったからだと思ってきた。

しかし、思い返してみると幼児の頃、何か悪戯をしでかして、罰として本堂に放置されるのがとても怖かった。きっと、そんなに長い時間ではなかったとも思うが、怖かった。今も覚えている恐怖感というのは、

かなり強いものである。それは、暗闇に対する恐怖感ではない。閉じ込められたのは、昼間である。薄明るい本堂であったが、怖かった。

それは、いくら幼児であったとはいえ、本堂にやって来る大人たちにただならぬ空気を感ぜていたのかもしれない。普段はにこやかに接してくれる人たちが、顔をこわばらせてやって来る。お葬式の最後にお骨を抱いて本堂に参ってくるのである。深い悲しみの空気は、幼児である私にも伝わった。この時、私にとって本堂は非日常空間であった。

幼児の時に感ぜた恐怖感を今は感ぜないのはなぜだろうか。ただ単に大人になったということではなかろう。死に対しての感情は、恐怖感がなくなった訳ではない。そんな人はいないだろう。感ぜが鈍くなるだけのことだ。今、私はお葬式のご縁を重ねて、死に対してとても強い悲しみを感ぜる。涙もろくなつたと

感じる。涙を隠すのに苦労することが多くなった。

では、なぜ本堂を日常的に感ずるようになったのだろうか。おそらく、得度をして僧侶になった時に、本堂や阿弥陀様を日常の暮らしの中に感ずるようにしなさいと、教えられたような気がする。教えられた明確な記憶はないが、私は仏様を日常的に感ずるようにすべきであると思うようになった。いろいろな人やご縁に教えられたのだと思う。

かつて、お世話になった長尾雅人先生は起床されると直ぐに、居間にある仏壇に手を合わすのが常だった。仏壇が居間にあるのはいい。最近の住宅は、仏間を設けることが少なくなった。仏壇は居間に置けばいい。法事はお寺の本堂を借りればいい。

2. 本堂で英会話

本堂で子供たちの英会話教室を始めて約2年になる。今はイギリス人の講師が教えている。毎週50人程の子供たちが、本堂にやって来る。

お寺の境内で、子供たちの声がしなくなって久しい。それを何とかしようと、私たちは思った。私たちというのは、寺に深く関心を寄せてくれる人たちであった。そんな人たちの多くは高齢で、自分たちの子供の頃はお寺の本堂で正座をして、お経

を習ったものだという。私にお経を教えろと言う。私が子供だったら、一番に逃げ出しそうな話した。私がイギリス人になり、お経が英会話に変わった。

本堂での英会話教室は、専光寺キッズサンガという団体が運営している。50～30代の人たちが10人程で世話人となってくれて団体ができた。彼らが講師を雇い、生徒募集をして、会を運営している。私は子供の英会話教室をしないと、お願いをして、見ているだけである。

かつて、私はカリスマ住職にならないと決めた。もちろん私にはそのような才能もない。以前にも書いたが、仏教婦人会の人たちが、ホームレス支援のいなり寿司を作ってくれている。住職は「やりたい」と言って、みんなに「やって」とお願いするだけである。住職が目立っているお寺より、そこに集う人々が輝くお寺であってほしいと思っている。

3. 住職の出番

そんなわけで子供の英会話教室でも、私の出番はあまりない。この2年ほどの間で、一度だけ出番があった。

一人の男の子が、周囲の子供たちにいたずらをされ、からかわれるようになった。彼の表情がみるみる暗くなった。

講師と教室アシスタントと私で相談をして、私の出番となった。布袍(ふほう)という黒い衣を着て、袈裟をかけて子供たちの前で話しをした。この本堂では、お葬式もする。またお葬式の後には、いつもお骨を抱いた家族の人たちが悲しみのうちに参ってくる。本堂は、涙の乾かない人たちが参ってくる所でもある。この本堂で、笑顔を振りまいて遊ぶ子供たちは、どれ程の人々を救ってくれているかを知ってほしい。私も、彼らの笑顔に救われた。仏教の教えでは、生きることは苦しみであると言っている。だからこの本堂で子供たちが笑顔を振りまいてくれるのは、とてもありがたいと話した。

その後、子供たちに笑顔が戻った。子供たちの笑顔や歓声は、人々の心を軽くする。本堂という空間の力もはたらいたのかもしれない。本堂という舞台上で、子供たちは自分の演じるべき役割を考えたのだろうか。子供たちはここでいかに振る舞うべきかを考えたのだと思いたい。

私は、お寺の本堂という空間の力を改めて思い知った。私にとって、本堂は日常の空間であるから、その力に気付いていなかった。お寺の人間が、お寺の力に気付いていなかった。

4. おわりに

これまで私の駄文を読んでくださって、感謝の気持ちを申し上げます。

これからも、私は専光寺という舞台上で人々が人生物語を語ってくれるのを期待している。ここでは、一人ひとりの個の感情が語られ、それらが結集して人々に生きる力を与える結果となることを願っている。住職はこの舞台の演出家である。私は顔を出したがりの演出家であるかもしれない。

これまで私の文章を読んでくださった方々は、何処かで仏縁を結んでいただけたら嬉しい。そのご縁は専光寺とも結びついているのだろうし、私とも結びついているのだろう。

これまでもこれからも、ありがとう。

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になればと思います。大切な人の死が、縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。また、悲しみを乗り越えない生き方であればと思います。

初七日

1. 成仏

仏教とはどのような宗教なのでしょう。仏教とは、「仏に成る教え、仏の教え」であります。仏になる教えだから仏教とは、文字のままじゃないかと思われるかもしれません。そこで、キリスト教という言葉を考えて下さい。キリスト教はキリスト様の教えです。キリスト様は、我々人間がいかにか生きるべきかを教えるのです。生き方を説く宗教ですか

ら、生きることを終えた時、その生き方によって天国か地獄に行くことになるのでしょうか。

これに対して、仏教は仏に成ることを説いているのです。例えば、仏教では同性愛の是非を語ろうとしません。それは、仏に成ることに直結しないテーマであるからです。もちろん仏教の戒律として、律蔵の中で性も含めて細かなルールが決められています。それは、成仏のため

ではなく、出家者の集団生活を維持するためのものです。

仏教の目的は成仏にあるのです。だから、シャカ教とは言わないのです。一方でこの目標設定はアプローチの多様性を生みました。それは、山の頂上を決められたが、登るルートはいくつもあるようなものです。だから、仏教には宗派が多いのです。日本にだって、数え切れないほどの宗派があります。

2. 日本の宗派

日本仏教の数え切れないほどの宗派、私はそれを数えようとは思いませんが、ここでは主な違いを少し申し上げたいと思います。例えば、浄土真宗以外の宗派では多くのお坊さんが修行をしています。何の、ための修行かといえば、仏に成るためです。先ほどの例えで言えば、頂上を目指して一生懸命に登るのです。日常的に修行をするのが難しい一般の人達も善を積まねばなりません。そして、その目的を達する前に亡くなれば、どうするのでしょうか。そこで七日参りが必要になります。この七日参りというのは、のこった人達が亡くなった方の修行を追い

足すのです。それを追善供養と言います。それが満ちて故人は仏に成るのです。ところが、浄土真宗は追善供養をしません。すなわち七日参りの意味が異なります。浄土真宗は即得成仏を説きますから、亡くなると直ぐに仏に成るのです。従って浄土真宗の場合、七日参りは追善供養ではなくお聴聞(ちょうもん)のご縁なのです。お聴聞とは仏のお話しを聞くことです。お坊さんのお話を聞くことではなく、そのお話を通して仏の教えに耳を傾けることなのです。

浄土真宗においては、成仏は死後直ぐに成し遂げられるのです。この成仏は本人の修行の結果ではないのです。阿弥陀様の力によって成仏するのです。私の力で成仏するのではないのです。

一生懸命に修行をする人達がその結果として成仏します。また、一方で自らの修行によらず成仏する人がいます。これに対して疑念をお持ちの方もいらっしゃるでしょう。しかし、私はこうした疑念に反証を示すことはできません。私は死んだことがないので、動画も写真も示すことができません。

3. 信じる

阿弥陀様の力によって成仏するという何を何故いえるのでしょうか？この世に生きる我々の誰もが、それを肯定も否定もできる確証を持ち合わせません。確証がないというのは、阿弥陀様の力の存在を信じているかどうかでしょう。存在の認識と言ってもいいでしょう。科学的根拠もなく信じるというのは、宗教の教理的裏付けのない信仰につながる危険性もあります。それは日本の宗教の弊害でもありました。そうした中で、科学的根拠の装いで信者を獲得しようとしたカルト宗教の動きもありました。

修行をするなら、こういう手順で修行をなさいと言うこともできるでしょう。信じることの方法論は、成り立ちにくいと思います。論理の構築の上に信じるという行為をなすというのは、私のような思索を伴わない生活をしている者には難しいのです。私は感覚的に信じたり、信じなかつたりして暮らしています。人の出会いの中で初対面でも信じ合えたり、長年の付き合いにも関わらず疑念を持ち続けたりします。

4. あるお葬式

この信じることについて、私はあるお葬式で教えてもらいました。

それは、一月末、我が家の夕食が終わった頃に電話が鳴りました。

「今、うちの主人が息を引き取りました」と。私は直ぐに枕経に参ると言って、車を走らせました。走りながら「いったいどうしたというのだ。あの主人といっても若いはずだ」と思いました。

何も年齢順に死に至るとは思いませんが、若い人が亡くなると「いったいどうしたと言うのだ」と思います。このご主人も40代前半でした。奥様が説明してくれたことによると、ご主人は2年間ほど深刻な糖尿病だったそうです。入退院を繰り返しました。この死は、暫くの退院の間のことだったそうです。夕食の支度をしていた奥さんがご主人の異変に気付いて、救急車を呼びました。ご主人は救急搬送中に亡くなったそうです。

私は、それを聞いた時に「なぜ、もっと長く病院に居させてもらわなかった。入院していればもう少し

でも長く生きられたのではなからうか」と思いました。私はそれを口にできなかったけれども、このお宅で七日参りをしている中で教えられたように思います。もちろんこのご主人は長く生きたかっただろうけど、病院でその時間がいくばくか延びるより、家族と共に過ごす時間が大切だったのではないかと。この家族は、奥様と高校1年生の長男と小学1年の長女の4人家族です。

私たちは人生を時間の長さで考えてしまうことがあります。どれだけの時間を生きたということより、どんな時間を生きたかが大切なように思います

5. 出棺

死は、ただ死で終わるものではありません。私たちが目を向けないだけです。私たちは死から大切なことを教わります。

このお葬式での出棺シーンも私には忘れ得ぬ姿です。

式場の玄関には、霊柩車が停められ後ろのドアが開かれました。その脇に、小学1年の娘が一人で立っていました。彼女のお兄ちゃんは父親の兄弟と

お棺に手を添えて、霊柩車に乗せようとしています。お母さんはそのお棺に付き従っていました。出棺を見守っていた私は、その女の子に気付きました。

この子は、小脇に30cm程の縫いぐるみを抱えていたのです。私は、この子が昨夜のお通夜でも縫いぐるみを抱えていたのを思い出しました。そしてお葬式の間も抱えていました。

この時、私がこのかわいい少女がどれほどに父親の死を理解しているのだらうと思いました。この思いの直後に私の心は強い衝撃を受けたように感じました。彼女は、理解していたから縫いぐるみを抱いていたのです。父親の死は、つらく、悲しく、不安なものでしょう。この耐えがたい時を越えるために、彼女は縫いぐるみを握りしめていたのでしょう。私には忘れ得ぬ情景となりました。この時以後、私は彼女の縫いぐるみを抱えている姿を見ていません。

6. お父さんはどこ？

私にはさらに教わることのあ

ったお葬式でした。

このお葬式は、寺の住職としては厳しい日程となりました。真冬の土日に通夜葬儀となりました。冬は通常より少し法事の多い季節です。加えて、私たちの宗派独特の門徒勤の報恩講が土日に予定されています。

お参りの約束をしているそれぞれの方に訳を話して、少しずつ時間を変更してもらいました。誰もが、お葬式なら仕方がないと言って、時間変更に同意してくれました。私は、喪主である奥様にお願いをしました。本来なら、火葬場でお骨を拾った後、寺の本堂に来ていただいてお勤めをしますが、時間を短縮するために私が火葬場に行って収骨室でそのお勤めをさせて欲しいとお願いをしました。この後にお参りをするお宅が火葬場に近い所なので、そうすることで待ってもらう時間が短縮できるからです。奥様の同意をもらった私は、火葬場の炉の前で送った後、飛び出して一軒のお宅にお参りをしてから、火葬場に戻ってきました。

私が硬質の草履で火葬場の大理石の床を歩くと、足音が石造風の建

物の空間に響きました。収骨室のドアの外側では、16才の少年が背筋を伸ばして立っていました。その眼差しはドアを射貫きかねないものでした。私の足音を聞いた彼は、私の方に身体を向けました。数歩足をすすめて、私の正面に立ちました。こわばった顔で。

「質問があります」

「はい、どうしたの」

「うちのお父さんはどこに行ったのですか？」

私はたじろぎました。多くの人が、大切な人を亡くしたとき、「どこに行った？」と思うのを聞きます。ドアの向こうにお骨になっているなどと、ごまかしは効きません。

私はちょっと待ってくれるように頼みました。

「あなたのお父さんは仏さまになったと、お経に書いてあります。でも、この答えで納得いかないと思います。僕は、坊さんだけれど見てきたわけではないからねえ」

「……」

「今、確かなことはあなたの気持ちです。あなたはどんな気持ちで尋ねた？お父さんのことが大好きで、だいすきで……。その思いがいっぱい

でしょう」

「お父さんも同じ気持ちだったと思いますよ。救急車の中で息を引き取って往かれるとき、あなたのことを大好きだと思っただろうと思います。お母さんのこと、妹さんのこと、みんな大好きだと思っていたでしょう」

「だから、お父さんは仏さまに成ったと思います。阿弥陀さまに仏にしてもらったと思います。だって、仏さまに成ったら、仏さまの仕事ができますから。あなた達を導き、救い、見守っていくのが仏さまの仕事で

す。少なくとも、あなたの命の続く限り見守っていくことができます」

人は大切な人をのこして往くから仏に成るのだと思います。私はなかなか仏教の論理を理解しがたいのですが、人は大切な人を思って往くときに仏に成ると思っています。大切な人をのこしてきたから、大切な人を見まもりたいからこそ成仏だと思っています。私は、七日参りのご縁によって仏の思いにあいたい。仏の教えに遇うのが、七日参りだと思っています。

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になればと思います。大切な人の死が、縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。また、悲しみを乗り越えない生き方であればと思います。

二 七 日

1. 本眼力にあひぬれば

浄土真宗のお葬式では、「本願力にあひぬれば、むなしくすぐる人ぞなき」という和讃が読誦されます。葬儀の終盤になってきた頃に、この和讃があげられるのです。

私は長い間、疑問に思っていました。「本願力にあひぬれば」というのは、阿弥陀様の力に出会ったならということでしょう。阿弥陀様の力に出会って、有意義な明日を迎えると言われてもなあ、と思っていました。

た。

私は、かつて火葬場の建物の前で、老人と若い娘が抱き合って泣いているのを見ました。老人にとっては、息子を亡くし、娘にとっては父親を亡くしたのです。二人とも悲しみのあまり、立ってられないように泣いていました。彼らにとっては、本当に大地が崩れるような感じだったと思います。大切な方を亡くしたとき、何物もすべて崩れるように感じるのでしょうか。

大切な人を亡くした人々に、明日から有意義な日々ですよ、と言ったところで実感できるだろうかと思っていました。

2. 導師として

あるお葬式に遇って、私の考えは変わりました。それ以来、葬儀屋さんには、必ず棺掛けを用意してもらいます。それは独特の編み方をした紐の付いた錦織の布です。この布でお棺を被うのです。私には譲れないところなんです。かつて、葬儀屋さんから抗議を受けました。「そんなものを掛けると、お棺の彫刻が見えなくなってしまう。」お棺の彫刻は不要なものです。その葬儀屋さんは最近、彫刻入りのお棺を勧めなくなったと思ったら、「上・中・下」の棺掛けを作って、どれがいいかと尋ねるそうです。

葬儀屋さんは棺掛けと称していますが、本来は七條袈裟なのです。浄土真宗が使う七條袈裟は大きな、立派な錦織の袈裟です。それでお棺を被うように掛けるのです。同じように七條袈裟をつけた導師が、仏様の最も近い所に座ります。

浄土真宗のお葬式では、亡くなられた方が本当の導師なのです。即得成仏を説きますから、亡くなられた方はすぐに仏様になられるのです。仏となって、お葬式の導師を勤められるというのです。私は葬儀司会者に「導師の入場です」と紹介されて登場するのですが、実は導師ではないのです。私は導師代理なのです。

お葬式での私の声は大きいと言われます。私は精一杯の声を出すことにしています。それは、私が仏様の代理を勤めさせていただくのですから、力一杯の声を出すことにしています。

3. 娘の死

お葬式は、いつも突然です。枕経の依頼の電話をもらって、明け方の頃に車を走らせました。当時は、カーナビのない時代でしたので、電話で教わった住所のあたりに到着しました。夜明け前に家中の電灯が灯っているお宅の前に立ちました。

父親が、私に葬儀の依頼をするのは自分の葬儀の時だと思っていたとおっしゃいました。まさか娘の葬儀を頼むとは思わなかったと涙ながらに話されました。通夜と葬儀は、

多くの会葬者でした。そのお嬢さんは、会社で明るく笑いをとる人気者だったそうです。

少し話がそれますが、このご両親には、いわゆる家族葬という選択肢はなかったようです。お嬢さんの生き方を思っただけのお葬式だったとおもいます。子供のお葬式では、ひっそりとしたお葬式を選択されることも少なくないようです。誰にも顔を会わせたくないのだし、誰とも会話をすることもできません。子供のお葬式で、親の心は強靱ではありません。子供を亡くした親の心は、ティッシュの折り紙のようなものです。なんとか形を保っていても、ちょっとしたことで、グシャリとつぶれてしまいます。

話を戻しましょう。私はこのお嬢さんの病名をご両親から聞いたのですが、初めて聞く病名ですぐに忘れてしまいました。ただ、眼球の奥にある視神経にできる癌のような病気だと思いました。

治療が進む中で、医者は両眼の摘出を提案されたそうです。ご両親は、悩みました。いくら治療だからと言っても、すぐに「はい、目を取ってください」といえるわけがないとお

っしゃっていました。治療は、娘さんの「お母ちゃん、目を取ってもええか？」の言葉で決まりました。

ご両親は娘があんなに頑張っているのだから、自分たちも頑張ろう、娘の前では泣くまいと、決めて病室に通われたそうです。ある日、病室で父親はこらえきれずに涙を流していたそうです。無言で涙が流れていたそうです。その姿に、娘さんが「お父ちゃん！泣いとったら、アカン。泣いとらんで、しっかり仕事行きや。頑張って、お母ちゃんをラクにしたってや。お父ちゃん、働け！」と言われたそうです。

両目を摘出した娘さんに、お父さんの涙は見えていたのです。人間は目で見えるものだけが真実ではありません。心で見る真実もあります。

そして、娘さんは亡くなっていきました。ご両親は、頑張りがんばって、娘のお葬式だけは出しました。しかし、お葬式の後には、何の気力も失せてしまいました。父親は自営業です。このまま仕事をたたんでしまいたいと思ったそうです。

「あの娘には、何もかも見えてたんや、と思います。こないにガタガタになってしもた私らの姿も」

「あの『お父ちゃん、はたらけー』の言葉が私らを立ち上がらせてくれたのです」と。

お父さんは、今も年をとったと言いながら、頑張っている。

4. 仏の説法

先にも申しましたが、浄土真宗では、亡くなられた方がすぐに仏と成って、説法をされるのです。だから、お葬式では近親者が最前列に座るのです。そして、七日参りでも法事でも最前列に座るのです。仏様の説法を、一番近い所で聞かせてもらうのです。

身近な人の死は、とてつもなく大

きな出来事です。それは人の生死を語る機会なのです。この真理に出会う機会こそがお葬式なのです。この機会に出会うことが、「本願力にあひぬれば」と言うことです。

一方、先に往かれた方は、遺してきた人にしっかり生きて欲しいと願って説法をされるのでしょうか。自分が生きられなかった明日をしっかり生きて欲しいと。その思いを受け止めるところに、死の向こう側とこちら側がつながるのだと思います。生死を超越したつながりを知った生き方は、決して虚しいものではないのです。

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になり、大切な人の死が縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。それは、悲しみを乗り越えない生き方であり、悲しみを包み込んだ人として生きることだと思っています。

三 七 日

1. 仏は存在するか？

大乘仏教圏の多くでは得度(とくど)をして僧侶になります。得度とは、本来、此岸から彼岸に渡ることで、仏になることです。だから、「度」と称することもあります。

最近、得度をして間もない友人から質問を受けました。「お参りをしているとき、本当に仏さんがいるのとお参りをしているのか？」と。

私も同じような思いを持ちました。得度をしたのだから、お坊さん

です。お参りのお同行(どうぎょう)の先頭に座ってお経をあげるのです。後ろに座っている人から、「本当に仏様はいるのですか？」と聞かれました。声に出して問われなくても、無言で問われているような気がしていました。

この質問に対する今の私の答えは、「存在すると思います」です。物理的な証拠を示すことはできませんが、私はその存在を信じていま

す。しかし、友人の質問は、どうすれば存在するなんて思えるのかと言うことです。

私は、「御門徒さんの所に行って、お参りをさせてもらうことです」と答えになっていないような返答をします。その理由は、浄土真宗が在家仏教という特質を持っているからだと言うのです。

2. 親鸞聖人と家族

ここで浄土真宗の特質などと言ったのですから、開祖の親鸞聖人の生涯を簡単に紹介しておきます。

親鸞聖人は、平安時代末期から鎌倉時代前期に生きた人です。親鸞聖人は九歳で、天台宗で出家得度をするので、九歳ですから、天台宗の小僧さんになったのです。私は九歳の少年が一念発起して、仏門を叩いたとは思いません。斜陽貴族の息子として生まれ、母親は消息不明で、父親は政変に荷担して失脚と言うのですから、育てる人がいなくなったので、お寺の小僧さんにされたのだと思います。小僧さんになれば死なずにすむ、と言うのが実情ではなかったかと思えます。それだけに、九歳の少年は、不安であったろうし、

ずいぶんと寂しかったろうと想像します。

親鸞聖人が比叡山を下りるのは、二十九歳の時です。当時、京都の町で念仏の教えを説いていた法然聖人の弟子になったのです。親鸞聖人は生涯、法然聖人のことを師としてだけでなく、親のような存在として思ったそうです。同じく法然聖人の弟子であった恵信尼という女性と恋愛関係になり、法然聖人の仲介で結婚をしたのです。家族ができたのです。つまり出家ではなくなったのです。出家とは、家族を煩惱の対象と見なす、すなわち仏道を邁進するのに家族をブレーキと考えるのです。だから家族を捨てることです。

結婚を三十代前半頃と考えれば、四十代後半から五十代は、子育ての忙しかった頃でしょう。この二人の間に五人の子供があったそうです。子育ての忙しさは五十代まで続いたでしょう。この時期、親鸞聖人の主著『教行信証』の執筆中であり、盛んに布教活動をした時代です。忙殺されるように生活をする時代は、振り返ってみれば人生の最もいい時代かもしれません。幸せとは、物質的にまた経済的にゆとりのある

状態ではないのかもしれませんが。この時代の親鸞聖人の行動半径は 30～40 キロメートルほどだったそうです。決して遠い距離ではありません。親鸞聖人は、遠くに出掛けなかったのです。家族の味を知らずに育った親鸞聖人にとっては、幸せだったのでしょうか。いそいそと家族の元に帰っていく姿が想像されます。

六十歳前後より、この夫婦は別に暮らします。親鸞聖人は末娘と京都で、奥様の恵信尼さんは他の子や孫と越後、今の上越市で暮らされます。なぜ二カ所に分かれて暮らすことになったかは、定かではありません。私は、この家族に何かショッキングな出来事があったのではないかとおもいます。

京都の長岡京市に光明寺という浄土宗の本山があります。このお寺に法然聖人のお墓があります。このお墓に、30センチ程の木彫りの童子の人形があるそうです。光明寺の言い伝えによると、この人形は親鸞聖人が置いて行かれたそうです。

この言い伝えが真実であるなら、親鸞聖人は誰か大切な方を亡くされたのではないかと想像します。それも、若い、あるいは幼い方ではな

かったのでしょうか。関東から京都に戻った親鸞聖人は、親のように慕っている師のお墓に参って、この人形を置いて行かれたのです。先に極楽浄土においてになる法然聖人に、後から行った自分の大切な誰かを、「どうかよろしくお願いします」と手を合わされた姿を想像します。

親鸞聖人は九十歳で亡くなるまで、晩年を京都で過ごされます。この間に親鸞聖人が関東の方々に書かれた手紙が残っています。その中に、自分が死んだら〇〇のことを気の毒に思って、よろしく申し上げます、という手紙があります。この〇〇というのは、覚信尼ではないかとも言われています。覚信尼とは、京都で自分の世話をしてくれている末娘です。自分の死後、娘のことを案ずるのは、とても自然な感情でしょう。家族というのは、その存在に幸せを感じながら、全員が永遠に生きることはできません。そこには必ず死が訪れます。それぞれが、送る気持ち、送られる気持ちを持つのです。この気持ちはとても大切なものです。自分以外の人を思いやるのです。この思いこそが、人と人のつながりであり、人と仏のつながりであ

ります。

私たちは、大切なつながりのある方が亡くなると、とても大きな悲しみに打たれます。その中で、大切な方が尊い仏となられたと思うとき、仏様とのお付き合いが始まるのだと思います。

ここで親鸞聖人の生涯を紹介しましたが、私は学者ではありませんので、それぞれの事象に対する検証もできません。この親鸞聖人の生涯を通して、人と人のつながりによる喜びや悲しみが、私たちが仏に出会う契機となればと思います。

3. 母の死

昨年の夏のことでした。御門徒の婦人からお寺に電話がかかってきました。受けたのは坊守(ぼうもり：住職の妻のこと)でした。「私はもういくらも生きられないので、後のことをよろしくお願いします」という話でした。

電話を終えた坊守は、すぐに病院に走ったそうです。その夜、私は坊守からその話を聞きました。そのご婦人はかなり重い肝臓疾患に見えたそうです。病室には、二十三歳と十三歳の姉妹とご主人のお兄さん

がいたそうです。ご主人は六年前に私がお葬式をしました。

一週間ほどして、そのお母さんは亡くなりました。悲しいお葬式でした。子供たちを正視できませんでした。子供たちは、涙を流していませんでした。子供たちが泣いていないのに、私が泣くわけにもいきません。子供を残していく母の気持ちを思うと、居たたまれませんでした。

七日参りは、子供たちと伯父さんの三人のお参りでした。二七日の頃だったと思います。子供たちが、まともに食事をしていないような気がしました。

「ご飯をちゃんと食べているの？」

「食べる気がしない」とお姉ちゃんが答えました。

「それはそうかもしれないけれど、無理にでも食べてね」と言って帰りました。お寺に戻ってから、

「手が空いている時にでも、行って彼女らを食事に連れ出してくれないか」と坊守に頼みました。

数日後、坊守は彼女らを食事に誘いました。どこに行こうかと、尋ねるとお姉ちゃんが、回転寿司と言ったそうです。お寿司を食べながら、お姉ちゃんが「お父さんが死んでから、

初めての夕食です」って言ったそうです。

私は、彼女らのお父さんが亡くなってからお参りをする機会が多くなって、この家の経済状態を想像していました。かなり厳しい生活をしていることは分かっていました。姉は、病院にかかることが多く、母親がよく連れて行きました。しかし、この経済状態ですから、母親は自分の病状には目を閉ざしたのかもしれない。多くの親がそうであるように、自分の病気は後回しです。

私は、四十九日の法要で彼女らに話しました。

「あなたたちは、お父さんが亡くなってから、お母さんと一緒にとっても苦勞をしたね。今回、お母さんが亡くなって、苦勞はもっと大きくなるだろうと思います。いろんな人々が助けてくれるかもしれないけれど、やっぱりたくさんのお母さんの苦勞をしたいと思います。

世間では、仏などいないと言う人もあります。けれどもあなたたちには、仏は居るのです。あなたたちは、

お母さんの病室に時間が許す限り通いました。お母さんが、どんな気持ちで亡くなったかを知っているでしょう。あなたたちのことを心配して亡くなったでしょう。あなたたちのことを思っているのは、お母さんだけではなくありません。お父さんもあなたたちのことをずっと思っているのです。お父さんも、お母さんもあなたの方のことを、ずっとずっと思っているのです。

この思いこそがあなた方の仏であると、私は思います。いつも私は思われていると感じて生きて下さい。それが仏と共に生きることであり、仏によって育てられるという生き方だと思います」

4. 仏の存在

私は、坊さんとして人々の悲しみのお裾分けを頂きます。その悲しみは、単なる悲しみではなく、とてつもなく大きな教えを含んでいます。私は、お参りさせて頂く中で、仏の存在を共に感じさせてもらうのです。

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になり、大切な人の死が縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。それは、悲しみを乗り越えない生き方であり、悲しみを包み込んだ人として生きることだと思っています。

四 七 日

1. 『仏説阿弥陀経』

今回は『仏説阿弥陀経』の話をしようと思います。私は、「お葬式は『阿弥陀経』で始まって、『阿弥陀経』で終わる」とよく言います。

私は、門徒さんが亡くなったと聞くと枕経に駆けつけます。枕経と言いましたが、正式には臨終勤行と言います。臨終の時に、『阿弥陀経』をあげます。だから正式には、亡くなる前に臨終勤行の依頼を受けるべきなのでしょうが、現実的ではありません。私は、亡くなったと聞くとで

きるだけ早く駆けつけるようにしています。深夜であろうが、夜明け前であろうが駆けつけます。ときに、門徒さんが夜半に亡くなったと聞いても、夜が明けてからお参りに行く坊さんが「枕経ではなく、臨終勤行なのです」と言うことがあるそうです。困ったものです。

臨終勤行の後、通夜・葬儀と続きます。葬儀の後、お骨になって帰ってこられて、『阿弥陀経』をあげます。正しくは還骨勤行と言います。ここまでが「お葬式」です。だから

臨終勤行の『阿弥陀経』に始まり、還骨勤行の『阿弥陀経』でお葬式は終了するのです。

2. 『阿弥陀経』の序論

なぜ『阿弥陀経』なのか？それはこの経典の内容を説明すればいいと思います。

仏教のお経は、序分(じょぶん)・正宗分(しょうしゅうぶん)・流通分(るずうぶん)と言う三部構成になっています。序論・本論・結論と読んで下さい。

『阿弥陀経』の序論は「如是我聞」というフレーズから始まります。「私はお釈迦様からこのように教えを聴きました」というところから始まります。舎衛国(しゃえこく)の祇樹給孤獨園(ぎじゅきつこどくおん)と言うところで、教えを聴いたといいます。そして、たくさんの証人の名を連ねています。これは、間違いなく仏説ですよと言っているのです。お経の正当性を語ります。

3. 極楽

次に本論です。まず始めに、これより西に十万億仏土を過ぎたところに、世界がある。それを極楽と言う。その極楽には阿弥陀仏がいる、と述べます。

極楽は西にあると言うのですが、極楽という言葉について考えて見ましょう。楽の極みであります。楽が100%であれば、苦は0%になり

ます。大切な方が亡くなられた時、その方の人生を考えて下さい。苦と楽は相半ばしているでしょうか？私は、いろんな方の枕経にお参りをしました。どの方も苦勞が楽に勝った人生を歩まれました。中には苦勞ばかりだったと思える方もいらっしゃいました。大切な方の臨終に際して、近親の方がその苦勞を偲んでいただければ、それが枕経の時の作法だと思います。

その極楽は、西方へ十万億仏土の彼方にあると言います。この十万億仏土というのはどんな距離でしょう。十万億仏土という距離の単位はありません。その答えは、「遠い」でいいのだと思います。とっても遠いのです。人類がどのようなロケットを開発しても、とうていたどり着けない距離、それが十万億仏土であると思います。もし仮に、十万億仏土を飛ぶロケットを作ることができれば、極楽に行って亡くなった人を取り返してくればいいのです。でも、そのようなことはできない距離だということです。死を取り消すことなど人類にはできないと言うのです。

『阿弥陀経』は、ここから極楽の様子を語ります。極楽の素晴らしさについて池には蓮の華が咲いていると言います。その大きな華は、青色は青い光を放ち、黄色は黄色い光を放ち、赤い色は赤い光を放ち、白い色は白い光を放つと述べます。こ

の部分については、当たり前のことなのです。青い色が赤い光を放つことはありません。当たり前のことを、そのまま受け入れることです。あるがままを受け入れるのは素晴らしいことでしょう。予断を挟まず、あるがままを受け入れることは、難しいことでもあります。愛する者の死を受け入れるのは、非常に難しいことです。斎藤茂吉の歌集『赤光』は『阿弥陀経』からとったタイトルであると、自ら記しています。

4. 往生

『阿弥陀経』の本論は、極楽の様子を描きますが、それは本論の前半部分なのです。後半では、その極楽に至る様子を描きます。

『阿弥陀経』は「その人、命終のときに臨みて、阿弥陀仏、もろもろの聖衆と現じてその前にまします。この人終らんとき、心顛倒せずして、すなはち阿弥陀仏の極楽国土に往生することを得」（『浄土真宗聖典(註釈版)』浄土真宗本願寺 p124-125）と述べます。息を引き取るとすぐに阿弥陀仏が迎えに来てくれるのです。そして、すぐに極楽に連れて行ってくれるのです。私は、ここは『阿弥陀経』の核心部分だと思います。

少し私の個人的な話におつきあい願います。私の父は、膠芽腫(こうがしゅ)という脳の病気で亡くなりました。担当医から、半年の命で

あろうと説明を受けました。本人は自宅に帰りたがっているし、病状の進行を考えてもそれは可能であるし、自宅で安らかな死を迎えるだろうと説明して下さいました。自宅に父親を連れて帰って、5ヶ月で父は息を引き取りました。確かに自宅で看取ることが可能でしたが、人の臨終までの経過は、それは大変なものでした。その大半を支えたのは私の妻でした。本当によくやってくれました。

素人目にも父の死が近いと思われた頃でした。往診に来てくれる近所のホームドクターが、往診の帰り際に、私にボチボチ覚悟をするようにと言って帰りました。私は父親の死をどうやって覚悟をするのか分かりませんでした。重苦しい夜が明けて、土曜日の朝でした。週末は法事の予約でいっぱいです。私は、法事に出かける前に、父親の手を握って、法事が終わるまで頑張っていてくれと言って出かけました。法事のお宅は、寺から数十メートルの所でした。挨拶をして、仏壇に向き直ってお経をあげようとしたときでした、妻が、そのお宅に駆け込んできました。お父さんがもうだめだという声が聞こえました。私は、法事の席の人たちに許可を得て、走って帰りました。帰り着いた時には、父の息はありませんでした。その時、私は『阿弥陀経』をあげたいと思いました。でも、法事のお宅では人々が

待っています。私はこのお宅に戻って法事を勤め始めました。

法事では『阿弥陀経』もあがります。『阿弥陀経』のこの部分に達したとき、私の頬を熱い涙が流れました。お経をあげながら、目に浮かぶような気がしたのです。今さっき息を引き取った父親が、阿弥陀様に連れられて極楽に行く様子が目に浮かぶように感じたのです。その光景が実にありがたかったのです。

5. 六方段

この後は、六方段と呼ばれているところ。東の方向には仏があっ

て、○○仏、△△仏、◇◇仏とかで

す。さらにガンジス川の砂の数ほどの多くの仏がいて、時空を超えた世界を覆っています。南の方向には、また同じように仏名の羅列です。そして、ガンジス川の砂の数ほどの多くの仏が、大世界を覆っているのです。

西の方向には同じことです。北の方向にも同じことです。下の方向にも、上の方向にも同様です。

これは六方向に仏様がいっぱいいるということです。これは、全ての空間が仏によって満たされている状況だろうと思います。この中心にいるのは阿弥陀様です。極楽は阿弥陀様に救われて仏になった方が

いっぱいおいでになります。今、新たに阿弥陀様によって救われた方は、阿弥陀様と共に極楽のど真ん中に生まれて行くのでしょうか。

私はこの様子を、こんなふうに想像します。今、新たに仏と成って極楽に来たあなたは、何も恐れることはないのです。かつてあなたの知っていた方も既に仏と成ってあなたの周りにいらっしゃるのです。何も心配するような世界ではないのですよと。私は、この六方段というのは息を引き取って極楽往生される方への優しさだと思うのです。

ところで、私は火葬場からお骨とともにお帰りになったら、お骨と法名をお仏壇の中に入れて下さるようお願いしています。一般的な仏教の場合は床の間に中陰壇という物を組んで、そこに安置することが多いのですが、浄土真宗では即得往生を説くのですから、亡くなると直ぐに極楽浄土においでになります。浄土真宗のお仏壇は、金仏壇が一般的であるのは、それが極楽を模した物であるからです。だから、この六方段で説かれるように亡くなられた方が極楽の中央に阿弥陀様とともにいらっしゃる様子を思って、お骨と法名をお仏壇に入れていただくようお願いしています。

6. 結論

六方段を説き終えたら、「およそ男子であれ女子であれ、善良な在家

の信者が、この仏がたがお説きになる阿弥陀仏のみ名とこの経の名を聞いてよく心にとどめるならば、これらのものはみな、あらゆる仏がたにひとしくまもられて、この上ないさとりに向かって退くことのない」(『阿弥陀経』瓜生津隆真著 p.152)と述べて結論に向かうのです。出家も在家も男女も区別なく平等に救われるのです。

そして、結論では難信の教えであると述べています。この教えを本当に理解して受け入れるのは難しいのです。私は、大切な人を亡くしてとても深い悲しみを知る人が、この経典の価値を知ってくれることを願っています。

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になり、大切な人の死が縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。それは、悲しみを断ち切る生き方ではなく、内に深く悲しみを包み込んだ人として生きることだと思っています。

五 七 日

1. なんまんだぶ

七日参りの帰り際、ある少年から「なんまんだぶ、ってどんな意味なの？」と尋ねられました。同席した大人も、尋ねてみたい質問であったと思います。

私たちは、仏壇に向かってお参りが始まる時、合掌をして「なまんだ一ぶ。なまんだ一ぶ」と言います。お経が終わると、また「なまんだ一ぶ。なまんだ一ぶ」と言って合掌します。お勤めも「南無阿弥陀仏」と

いう言葉が繰り返されます。

少年の疑問は当然のことで、あんなにたくさん言っている言葉はどんな意味だろう、と思ったのでしょう。

2. 南無阿弥陀仏とは

南無阿弥陀仏は漢字六文字ですが、漢語ではありません。中国の人がこの漢字を読んで、直ぐに意味の分かる言葉ではありません。古代インドのサンスクリット語の音写な

のです。サンスクリット語は、古代インドで哲学や宗教を記すための言語としてパーニーニによって作られたと言われていています。だから、日常的な会話で使われることがほとんどなかった言語です。

「南無」というのは、サンスクリット語の「ナマス」の音写です。「帰命」とか「帰敬」「敬礼」などと意識されています。インドでの挨拶で、「ナマステ」と言うのは、この「ナマス」からきた言葉です。

「阿弥陀」というのは、やはりサンスクリット語の「アマタ」の音写です。サンスクリット語の「アマターバ」と「アマターユス」の共通部分の「アマタ」という言葉で、この二語を包括した言葉です。「アマターバ」と言うのは「無量光仏」と訳されます。「アマターユス」は「無量寿仏」と訳されます。つまり、「無量光仏」は空間的に無限の仏であり、「無量寿仏」は時間的に無限の仏であるので、それゆえ「阿弥陀」というのは無限の仏を意味します。

「仏」というのは、サンスクリット語「ブッダ」を「仏陀」と音訳して「陀」が落ちたものです。「仏陀」と「仏」は同義語として使われます。

3. 南無阿弥陀仏の意味

この説明で、南無阿弥陀仏の意味が分かったかということ、そんなことはないだろうと思います。この説明は言語的な説明で、意味の説明ではありません。では、どんな意味でしょうか。

その意味は、宗派によって異なります。日本の主な仏教宗派の内、南無阿弥陀仏という言葉を使うのは真言宗、天台宗、浄土宗、浄土真宗だと思います。

真言宗では、「呪文の南無阿弥陀仏」だと思います。呪文というと叱られそうですが、真言なのです。真言とは、まことの言葉です。よく真言宗のお坊さんが、お勤めの中で聞き取れない言葉を唱えています。いくら耳を凝らしても聞き取れません。それは、サンスクリット語を唱えているからです。インドの尊い言葉をそのまま唱えることによって、その言葉に力があると考えたのです。その言葉こそが、真言なのです。音としての言葉だけでなく、文字もそのまま伝えようとしたのです。それが梵字です。

こうした行為は、非科学的に思え

るかもしれませんが、そんなことはありません。かつてサンスクリット語の解説は、18世紀イギリスで植民地研究の中で、解説されたと云われていました。しかし、日本では独自に真言の整理をする中で、サンスクリット語の単語をまとめるようになり、鎖国をしていた江戸時代には飲光(おんこう)というお坊さんがサンスクリット語の文法を解明し、解説に成功しました。『仏説阿弥陀経』のサンスクリット原典を発見したのも、飲光でした。

天台宗の南無阿弥陀仏は、「修行の南無阿弥陀仏」と言えるでしょう。天台宗には常行三昧という修行があります。比叡山延暦寺には常行三昧堂というお堂があります。上から見ると正方形のお堂で、中心に阿弥陀仏像が安置されています。このお堂を締め切って、90日間、阿弥陀様の周りを歩きながら「南無阿弥陀仏」と唱え続けるのです。不眠不休で唱え続けねばならないという、とてつもない修行です。つらいどころか、とても不可能に思える修行です。

私は学生時代、天台学の碩学である佐藤哲英先生に連れられて常行三昧堂に行きました。ちょうど酒井

雄哉師がこの修行を終えたところでした。酒井師は、私たちにお堂を開いて見せてくれました。柱から柱へ太い孟宗の青竹が手すりのように括りつけられていました。酒井師は南無阿弥陀仏と唱えながら歩いていて、どうしようもなく眠くなるとその青竹に寄りかかったそうです。眠るとその青竹から滑り落ちて床にたたきつけられて、目を覚ましたそうです。誰かが何のためにこの修行をするのかと尋ねました。酒井師は阿弥陀仏に会うためにするのです、と答えられました。つづけて、修行の3分の2を過ぎたあたりで阿弥陀仏に会えたとおっしゃいました。その偉容はこのお堂の倍程の背丈だったそうです。酒井師の体験を幻覚ではないかという人もいますが、私は酒井師の言葉が信じられました。後になって、私が出会った酒井師は数百年にひとり出るか出ないかの優れた行者であることを知りました。

次に浄土宗の南無阿弥陀仏は、「お願いの南無阿弥陀仏」だと言えます。少し正確にいうと、浄土宗の鎮西派の解釈で、西山派の解釈は「よろこびの南無阿弥陀仏」という

そうです。前回の『阿弥陀経』の話
しで、臨終に際して阿弥陀様が私を
迎えに来てくれると言いました。そ
して、極楽浄土に連れて帰ってくれ
るのです。だから「私が死ぬときに、
どうか迎えに来てください」と阿弥
陀仏にお願いをするのです。「修行
の南無阿弥陀仏」は、出家者にしか
できません。しかし、“お願いしま
す”という気持ちで南無阿弥陀仏と
言うのは、普通の暮らしをしている
人にもできます。誰にでもできます
が、お願いをした人のところにしか
迎えに来てもらえません。だから、
しっかりとお願いをした方がいい
という百万遍念仏という考えも出
てきます。京都の人は京都大学があ
るところを「百万遍」と呼びますが、
百万遍念仏で有名な浄土宗の知恩
寺があるところですよ。

浄土真宗の南無阿弥陀仏は、「あ
りがとうの南無阿弥陀仏」と言える
でしょう。浄土宗の説くように阿弥
陀仏が我々を救済してくれるとい
うところは変わらないのですが、阿
弥陀仏は我々人間をすくい取ると
決心したのです。その決心を本願と
いいます。私は、本願によって救わ
れるとすでに定まっているのです。

だから、阿弥陀仏が必ず救ってやる
と言っているのだから、ありがとう
と言えばいいのです。

4. 『竹取物語』

「ありがとう」という言葉は、日
本社会の中で大切にされてきた言
葉だと思います。それは、『竹取物
語』に表されていると思います。誰
がどのように作ったか分かりませ
んが、昔から『かぐや姫のお話』と
して受け継がれてきました。

このストーリーを語る必要はな
ないと思います。かぐや姫の月に帰
る場面は、とても悲しいです。かぐ
や姫が月に帰らねばならないと、お
爺さんとお婆さんに告白しますが、
老夫婦は受け入れることはできま
せん。月に帰るというのはかぐや姫
の死でありましょう。

老夫婦は最愛の娘の死を受け入
れることはできません。死がすべて
の人に訪れることは、誰もが知っ
ていることです。知っていることと受
け入れることは異なります。彼らは、
娘の死を阻止するためにあらゆる
手段を使います。竹取の翁^{おきな}は帝^{みかど}の
力を借りてでも、月からの迎えを阻
止しようとします。月に去ろうとす

るかぐや姫の衣ころもの裾すそにすぎる老夫婦の姿に涙が流れます。命のはかなさ、命が消えていくことの悲しさを語っています。

一方で、竹藪で竹取の翁がかぐや姫を見つけて、翁と媼おうなが育てる場面は明るく華やいだものです。命の出会いです。人類の何万年にもわたる限りない命のいとなみがあり、またこの地球上で何十億という命のいとなみがあります。その中で、私たちはほんのわずかな命にしか出会えません。私の意思で出会えた命ではありません。それだけに尊くありがたいことです。私たちは、自分の命を含めて、はかなくて尊い命に

出会っているのです。そのことに“ありがとう”と言ってきた物語が『竹取物語』だと思います。

5. 阿弥陀仏の力

私たちが出会った命は、消えてゆきます。送る命と送られる命があります。その命が、また再び出会うのが、極楽浄土です。そんなことはどうでもいいと言う人もいるでしょうが、私はまた会いたいと思います。会えるものならどうしても会いたいものです。それが阿弥陀仏の力によるものであるなら、「ありがとう」の一語しかないと思います。

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になり、大切な人の死が縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。それは、悲しみを断ち切る生き方ではなく、内に深く悲しみを包み込んだ人として生きることだと思っています。

六 七 日

1. あの人はどこに

七日参りも六回目あたりになると、「うちのおじいちゃんは、今、どこにいるのでしょうか？」と尋ねられたりします。はっきりと質問の言葉にならずとも、「自分の大切な人は、今、どうなったのだろう」という思いを感じることも多いです。それは即得成仏といって、大切な人はすぐに仏様に成ったというのだから、仏様に成ったのだろうと思うが、得心がいかないようです。この一ヶ

月以上も仏壇に向かって手を合わせてきたが、仏壇の奥には阿弥陀様の姿だけです。私の大切な人はどこでどんな姿の仏様に成ったのだろうかという問いかけです。

今、仏教は死者と生者の関係を語らねばならない時代にいる、という文章を読んだことがあります。死者の在りように対して、土俗的あるいは民俗学的な説明では通用しない時代に入ったと言います。私は、お参りをされていて、そのような状況を

実感しています。仏壇の前で手を合わせている人たちは、自分の大切な人がどのような仏様に成ったのか、という説明を求めています。

2. 仏身論

私は、仏の在り方を仏身論という概念で説明ができるのではないかと思います。古来、仏教では仏様の有りようについて考えをめぐらせてきました。特に、大乘仏教では仏様の在り方について深く考えられてきました。南方仏教では、仏というとお釈迦様をさします。仏教徒はそのお釈迦様に帰依をするのです。キリスト教を精神的背景とする社会で暮らす欧米の人々は、大乘仏教の仏より南方仏教でのブッダが理解しやすいように思います。

紀元前後頃から始まった大乘仏教は、仏に対する帰依であり、自らも他者も仏に成っていく教えであります。つまり仏は釈迦一仏とは限りません。たくさんの仏がいるのです。

いろんな仏の在り方に対して考察され、仏身論のような考えが出てきたのであらうと思います。この仏身論についてはいろんな説があり

ますが、三身説を採るのが多いようです。それは応身仏(おうじんぶつ)・報身仏(ほうじんぶつ)・法身仏(ほっしんぶつ)という三種類に分けて考えるのです。

3. 応身仏と報身仏

応身仏というのは、歴史上存在した仏です。今から二千五百年ほど前にインドで存在した仏で、一般的にお釈迦様と呼んでいます。南方仏教の仏に対する理解と重なるものであり、いわゆるブッダです。

報身仏というのは、いかにも大乘仏教的な仏様です。その例として、阿弥陀仏があげられるでしょう。阿弥陀仏とは、法蔵菩薩(ほうぞうぼさつ)がすべての人間を救いとるという誓いをたてて、それが成就して仏となった姿です。

菩薩とは仏に成りたいと修行を始めた存在です。だから、阿弥陀仏とは法蔵菩薩のすべての人間を救うための修行が完成した結果なのです。私がいつもペアを組む近隣のお寺の若い住職がこんな話をしてくれました。そこの門徒さんの一人が「わしは、阿弥陀さんがいてくれないと困る」とおっしゃるのです。

その方は、息子さんを亡くされたそうです。阿弥陀仏の姿は、息子さんが救われていることを示しています。阿弥陀仏のように報身仏というのは、その教えを体現した姿であるとも言えます。

4. 法身仏

法身仏とは、「色も形もない真実そのものの体」『仏教語大辞典』と書いています。真理そのものを体現した存在であるということです。応身仏も報身仏も仏像として描くことができますが、法身仏は色もなく形もないのですから、描きようがありません。私たちには極めて理解しにくい仏様であります。

私たちは、法要の始まりの時に三奉請(さんぶじょう)を読誦します。それは「弥陀如来」「釈迦如来」「十方如来」に対する敬意を表すものです。「弥陀如来」は報身仏です。「釈迦如来」は応身仏です。「十方如来」は法身仏かもしれません。十方とは私から見て、すべての方向を意味します。すなわち、私の直ぐそば、至る所にいる仏様であるのかもしれませんが。

5. ある老婦人の話

私のお参り先の話です。そのお宅は、山間部でお爺さんとお婆さんが二人で暮らしていました。息子や娘は都会でそれぞれの家庭を持って暮らしています。そこでは、ゆったりと時間が流れています。私は、そこにお参りをするのが好きです。そのゆったりした時の流れの空間に身を置くことに快さを感じます。しかし、過疎の村で暮らす夫婦にとっては、決して便利な生活ではありません。移動がしにくいところで、買い物や医療受診は容易ではありません。密な近隣関係は、相互扶助の利点がありますが、かなり大きな協調性が求められます。

ある日、そのご夫婦のところにお参りをして、お婆さんが「私はここに嫁に来る前の夜に、父親が『おまえ、つらかったら帰ってきてもいいぞ』と言ってくれた」と話してくれました。50年か60年も前の話です。それを、昨日の事のように語る老婆の顔は、とても輝いていました。この半世紀以上の間には、つらいこともあったでしょう。その時に、このお婆さんを支えたのは、父親の言葉であったと思います。

今となつては、帰る家もあるのかどうか分かりません。父親が存命であるかどうか分かりません。けれどもそれ以上に、父親の言葉は大きかったのです。この言葉は、父親の「おまえのことを、心配しているぞ」という気持ちでしょう。この父親の気持ちは、命を超越しています。生死を超越したものが仏であります。

ここで、私の友人の話をしましょう。彼の娘が結婚をすることになりました。私が彼に様子を尋ねると、奥さんと娘さんと楽しそうに準備をしていると言います。彼は「オレは黙って金を出すだけだ」と言います。私が、取りなすように「いつか、お父さんにも感謝してくれるだろう」と言うと、彼は「うん、オレが死んでからで十分だ」と答えました。

感謝は死んでからでいいなどと思えるなんて、私は胸が熱くなりました。彼は自分が死んでも娘のことを思い続けるつもりです。老婆の父親の気持ちも、友人の気持ちも同じで、何十年が過ぎようと変わることのない真実だと思います。

6. 母親の涙

友人の住職がしてくれた話です。そのご門徒さんの若い婦人が小さな娘の手を引いて、川の土手の道を歩いていたそうです。道の向こうから首にタオルを掛けたおじさんが歩いてきたそうです。すれ違い際に「お母さんは、偉いもんやなあ」と言って過ぎ去ったそうです。その瞬間、母親の両目には涙が溢れたそうです。何か特につらいことがあったわけではなかったそうですが、涙が溢れたそうです。

そのおじさんは寅さんかと言いたくなります。その人が誰であるかは不問にして、その言葉が誰の言葉でしょうか。母親は、仏様の言葉として聞いたのだと思います。仏様の言葉は、とても優しい言葉だと思います。そして、いつも優しく見守っているという眼差しが共にあるのです。

あなたの大切な人は、阿弥陀様に救われて仏と成って、あなたと共に

いるのだと思います。その仏は色も
形もないというのですから、あなた
の目には見えませんが、必ずあなた
のすぐ側にいるのだと思います。そ

こに真理としての仏様がいらっしゃるのだと思います。

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になり、大切な人の死が縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。それは、悲しみを断ち切る生き方ではなく、内に深く悲しみを包み込んだ人として生きることだと思っています。

四十九日(七七日)

1. どう生きていくのか

今回で、七日参りの最終回です。大切な方が亡くなって49日が過ぎる頃は、悲しみがさらに深まるように感じます。かつて仏教学の碩学であった長尾雅人先生が、奥様を亡くされて四十九日の頃、「悲しくて、悲しくて、やりきれない」とおっしゃっていました。

仏教というのは、悲しみを忘れさせてくれる教えでもなく、悲しみを乗り越えて行く教えでもありませ

ん。その悲しみの中で、真実に出会い、それによって人生の本質に気付いて生きてほしいと思います。その真実とは本願であろうと思います。それは亀井勝一郎氏の言う邂逅(かいこう・であいの意)と謝念(しゃねん・ありがたいの意)だと思っています。(この言葉は亀井氏の言葉だったように思いますが、どこに出ていたか忘れてしまいました。)

2. 本願

本願についてお話をしましょう。菩薩は願をおこして、その願が完成して仏に成るのです。願を立てたとき、それが完成しなければ仏に成らないと誓うので、誓願ともいいます。法蔵菩薩という菩薩は、人々を必ず救いとる、すなわち仏にするという願をたてて、その完成によって阿弥陀仏となったのです。この願を本願といえます。

この本願に遇うのは、信心いただくことです。阿弥陀仏が私を必ず救ってくれるという映像もなければ、契約書もありません。しかし、必ず救ってくれるのだと思えるところに、信心があるのです。そこに「ありがたい」という言葉が出るのです。それが邂逅と謝念ということだと思います。

ここで少し、触れておきたいのが本願に「遇う」と書きました。会うではないのです。遇うと言うのは、私の意思で会うのでは、ないのです。

3. 秋雄さんの死

本願に遇うと言うことについて、具体的な例で話を進めたいと思います。

昨年のお盆に、秋雄さんが85歳で亡くなりました。枕経の依頼の電話がありましたが、私はお盆参りの最中でした。少し遅れて、枕経をあげに駆けつけました。私は枕経をあげるとき、「この人はどんな思いで息を引き取られたのだろうか？」とか「どんな思いで人生を生きてこられたのだろうか？」と思います。

秋雄さんの場合、「これで長男さんに会えるな」と思いました。息子さんは30年程前に亡くなりました。冬の信州の山での遭難でした。ご両親は力の限り捜されました。いろいろな方に頭を下げた捜索して貰いました。ずいぶんと親身になって探して下さった方も多かったそうです。きっとご両親の悲しみに触れての行動であったように思います。しかし、遺体が発見されるのは、春の雪解けを待たねばなりませんでした。ご両親は、長く厳しい冬を過ごされました。私は過ごしたと言いましたが、ご両親には時間の経過の記憶もないかもしれません。人はあまりに深い悲しみにいる時、時間の経過に対する意識がないように見えます。それ以来、この夫婦は信州の山にたびたび足を運ばれました。次男さ

んも一緒だったり、次男さんの家族も一緒だったりしました。

それから十年ほどが過ぎた頃に、この秋雄さんは脳梗塞に罹りました。命は助かりましたが、言語と運動機能が不自由になりました。言語訓練の一環で、歌を歌うことを薦められました。秋雄さんは歌が不得意でした。しかし、『正信偈(しょうしんげ)』をあげられるようになりたいと、懸命に練習をされたそうです。そして『正信偈』をあげられるようになりました。次は、仏壇の前まで歩いて行って、座って『正信偈』をあげたいと、歩行訓練に取り組みました。秋雄さんは仏壇の前に座れるようになりました。

私がお参りに行くと、秋雄さんは静かな笑みを浮かべて迎えてくれます。もう信州の山には登れなくなりました。息子さんの祥月命日のお参りの折に、私が信州の山に行ってお経をあげてこようかと提案しました。ご夫婦で喜んで同意して下さいました。

私は信州の山に足を運びました。地図に印をつけてもらった場所に到着して、リュックサックから法衣を取り出して、身にまといお経をあ

げるべく、崖の上から下を見下ろしました。すぐにお経の声が出ませんでした。

ざっと 3~400 メートルはあろうかという崖です。息子さんは、ここを滑落したのでしょうか。雪庇を踏み抜いて、雪ともに落ちたのかもしれませんが。どんな最後だったのでしょうか。彼はどんな思いをめぐらせたのでしょうか。この崖を見下ろしたご両親は、どんな気持ちだったのでしょうか。私は、しばらくお経の声が出ませんでした。

このような経緯があって、私はこの秋雄さんの枕経で「息子に会える」と思ったのでした。ところが、七日参りを重ねるうちに、私の思いは変わりました。秋雄さんは「ありがとう」と言って往かれたようにおもいました。この私の思いを話すと、奥様は微笑んでしっかりとうなずかれました。

4. 本願に会う

秋雄さんは既に本願に遇っている自分に気付いていたと思います。決して本願に会いたいと思って人生を歩んでいらっしやったのではありません。最も望まなかった長男

の死に遭遇してしまったことで、本願に遇われたのです。お仏壇の前で『正信偈』をあげていたのは、極楽浄土に居る息子を思っていたのでしよう。極楽浄土で仏と成った息子に思うことができたのでしよう。そのことを確信されていたように思います。極楽浄土での再会は必然のことですから、臨終のときに再会を思わなくてもいいでしょう。

そうすると、臨終のときにはこれまでの人生での奥様への感謝の気持ちを思われたのではないのでしょうか。次男さんへの感謝、次男さんの奥様への感謝、お孫さん達への感謝であったと思います。秋雄さんは、決して饒舌な方ではありませんでした。生前、みんなに「ありがとう」と言って回ったのではないかもしれませんが、しかし、この感謝の念は家族全員に伝わっていたように思います。

一般的に、家族の個々はそれぞれ異なった方向を見ているものです。しかし、心の奥底で繋がっていればいいのだと思います。秋雄さんの家族は、仏と成った長男が全員を結びつけていてくれたのだと思います。

「みんな家族でいてくれて、ありが

とう」と言ってこの人生を終えていくのは、ありがたいことです。

5. 「七日参り」の終わりに

大切な人の死に立ち会ったとき、「どうして死んでしまったの?」、「何故死んでしまったの?」と言う問いかけを耳にします。この問いかけは、すごいことだなと思っています。死の意味を問うているのです。背面にあるのは、自分の生きる意味であろうかと思えます。

人は、日常生活の中で生死の意味を問うことは少ないと思います。とても大切な人の死は、私の生きる意味を問う機会を作ってくれたように思います。それが「ご縁」だと思います。「ご縁」というのは始まりです。「七日参り」の連載はこれで終わりますが、これからが自分の人生の意味を問う心の旅の始まりです。仏法に耳を傾けて下さい。すぐに明確な答えが出るかどうか分かりませんが、それぞれの私の人生を終えるときに、あのご縁のおかげで意味ある人生を過ごせたと思われるように願っています。

書簡型連載 4

ケアマネさんとお坊さん



木村 晃子 様



差出人 竹中 尚文

2017年5月14日

— 死を目前にして生きる目的 —

気がつけば、すっかり暖かくなりました。こちらでは暖かい日にはTシャツで過ごせそうな季節になりました。昨年、札幌を訪れたのは6月でした。空気を軽やかに感じました。湿気が少なく軽暖で、本州より大きな街路樹が街のサイズを一回り大きく見せていて、それが白い花を付けて爽快な気分させてもらいました。一年前に木村さんに会いに札幌に出かけたのは、妻を伴っての一泊二日の小旅行でした。住職の妻は坊守と言って、お寺を守っています。浄土真宗では、僧侶が結婚をして家庭を持つのが開祖からの宗風になっています。だから浄土真宗の僧侶を出家と呼ぶことはありませんし、住職の妻も坊守と言う職名があります。

日頃、専光寺を守る坊守は一泊二日の小旅行が息抜きであって、ちょっとした夢なのです。ところが、昨年だったから札幌に行けましたが、今年になるともう難しくなってきました。ウチにはもうすぐ九十歳になる前坊守がいます。私の母です。ウチは私たち夫婦と母の三人家族なのです。一日以上の間、母から目を離すことが難しくなりました。だから、今年になると私たち夫婦で一泊旅行をすることが困難になりました。私には弟がありますが、ブラジルかアルゼンチンに居るような家族で、母のことを頼むことなどできません。

母は数ヶ月前からずいぶんと記憶力が衰えました。食事を取ったかどうか分

からなくなってきました。前日の記憶も不明瞭ですし、翌日の予定を言うと混乱してしまいます。以前はよくテレビを見ていたのですが、ここ一年近くはめっきりテレビを見ることもなく眠っています。テレビを見ないのかと尋ねると、面白くないと答えます。テレビのスピードに理解のスピードが追いつかないようです。

食事は三人で取るのですが、できるだけ母が加われる話題で話すようにしています。但し、住職と坊守の会話もこの食事時なのです。私は朝からお参りに出かけて、お昼に食事に戻ってまた午後に出かけていくことが多いのです。ウチの坊守は得度をして、僧侶になったのでお参りに出かけることもあります。基本的にはお寺に来て話していく人の聞き役です。私たち住職と坊守の会話はその日に会った門徒さんのことです。門徒さんが語ったことや門徒さんの様子を二人で情報交換します。できるだけ門徒さんが何を思い、どのように暮らしているか知っておきたいのです。決して生き方の是非を問うものではなく、どんなふうにいるか知っておきたいのです。それが住職と坊守の会話です。数年前までは、母親も前坊守でありますから、私たちの話に加わりました。それは今の情報だけでなく、かなり昔の情報が加わります。今は、門徒さんのことを母に尋ねても誰が誰か分からなくなりました。

あるご門徒の方が退職をしてから、時間ができたのでお年寄りの話し相手をするボランティア活動をされていると聞いたので、ウチにも来て下さいとお願いをしました。現在、母は要支援2という判定を受けているのですが、本人が誰の世話にもなりたくないという意向で、ケアマネさんに相談をしていません。誰の世話にもならず暮らすことなど人間には不可能なのですがね。ボチボチお願いをする頃だと思います。

母を見ていると、人間の機能が衰えていくのが見えます。聴覚などの感覚が衰えていきます。感覚器官によって情報を受け取って、それを認識し考察し判断決定する機能も衰えます。人間の機能の衰えです。一年ほど前に母が私にこんなこと言いました。

「あなた達もしっかりしているし、私は何も心配することがない」

「そんな水くさいことを言わないで。死ぬまで、死んでからも心配していき
れ」

生きると言うことは、そこに何らかの目的があったり、楽しみがあったりしま
す。生きる機能が衰えたときにこそ、生きる目的が必要だと思います。死が目
前にあるときこそ、生きる目的が必要です。

最近、六十代や七十代の人たちから、よくお墓の相談を受けます。「子供たち
に負担を掛けたくないのです、お墓を整理したい」と。私も、その意向に肯定的
な回答をしてきました。ところが、「負担を掛けたくない」というのは「面倒な
ことを残して往った、と思われたくない」のではないのでしょうか。自分の死後
に気掛かりを残して往きたくない、と言う思いかもしれません。

死にゆく人の気持ちはどうなのでしょう。自分の死後に何を思うのでしょうか。
かつて、戦争によって人生をひどく歪められた人たちが、自分の死後にも
平和な社会を願いながら死んでいった時代がありました。これから死を迎える
私たちは自分の死後に何を願うのでしょうか。

自分の死後に送ってくれる人たちと、次の時代の話をしてほしいのでしょうか。
子供たちと自分の死後の話をするのもいいと思います。自分の死後一年後の話
や、数年後の家族旅行の話や、孫の成人式の話や、家の建て替えなど話題は尽
きないはずで。すべて自分の死後についての話題です。迷惑なことも残して
往けばいいと思います。子供たちと自分の死後のずっと先の相談をして欲しい
と思います。こんな語らいは、死ぬまで生きる目的を与え、死後生きる目的
を与えることになると思います。こんな会話には、死を目前にしても、死んで
からもずっとつながっていると言う気持ちが必要です。死にゆく者にも送る者
にも、双方に死を越えて繋がる気持ちが必要だと思うのです。

季節の変わり目です。どうか御自愛下さい。

合掌

竹中 尚文 様

拝復

(実は、この「拝復」という書き方、竹中さんとのやり取りを始めた頃のメールで目にした時に、この響きに惹かれました。響きも字体も好きです。)

そちらは初夏の兆しのようなですね。私たちの北海道も、夏のような暖かさを感じる日もあれば、ストーブが必要な朝晩もあります。平均して暖かい春を過ごしています。もう初夏と言ってもいいでしょう。けれども、春から初夏に暖かい日が多いと、真夏には冷夏になってしまうという過去の記憶があります。ちょうど田んぼの稲に日光や温度が必要な時期に日が射さなくなるのです。お米の収穫が心配されます。と言っても、根拠のない私の浅はかな人生経験からの所感にすぎません。

竹中さんが北海道に来てくださったのが、もう1年も前のことになるのですね。あの時も爽やかな日だったように記憶しています。ジンギスカンの美味しいお店にご案内できずに、少々後悔をしています。また、いつか・・・

お母さんの様子に変化が見られているのですね。大事な時をお過ごしになっているのが伝わってきました。私は職業柄、高齢者の方の人生の最期の方に出会い、若干の関わりをさせていただくことが珍しくありません。長い人生の幕引きをどのようにお手伝いすると、ご本人やご家族にとって良い思い出になるのだろうと考えます。けれども、私などができることはさほどありません。

この3月に、支援を続けていた方がお亡くなりになりました。90歳を超えていたその方は、これまでお元気な毎日を過ごしていました。冬のある日に風邪のような症状になったことをきっかけに、食欲低下を引き起こしました。入院も必要でしたが、「家で過ごしたい。」というご本人の意向を支える形で、介護していたご家族も、「最期の時は自宅で・・・」という希望を示されました。私は、介護保険のサービスを手配する役割でした。お元気だった頃とは全く違い、言葉も少なくなっていました。体力も低下しています。ご自宅へ訪問すると、ベッドに寝ていても、ご家族に「起こして欲しい。」というように合図をします。ご家族もそれに応じて、ご本人を車椅子に乗車させます。車椅子に移っ

たご本人は、私の方をじっと見つめるのです。そして、ご家族がご本人に水分摂取を勧めると、私に視線を送りながら、ご家族に向かって更に合図をします。この時の合図の意味は、私（ケアマネジャー）にお茶を出しなさい、と促しているのです。ご家族は、その合図をしっかりと理解し、私にお茶を差し出してくれます。有り難くお茶をいただくと、ご本人も自分でコップを手に持ち、水を飲まれます。けれども、体力も落ちている状態では車椅子に乘車しても、途端に体調が悪くなり、またすぐにベッドに戻ることになりました。

このやりとりの2日後、その方は眠りながら静かに旅立っていきました。その方にとって、最期の時までの生きる目的は何だったのでしょうか。

お子さんと二人で暮らしていました。認知機能の低下もありました。私が訪問すると、「(自分の子が)面倒を見てくれるから、本当に助かるよ。」というのが口癖でした。そして、自分で出来ることは減っていましたが、訪問した私に対して、もてなしを促すように、子どもさんに向かって指示をしているのです。子どもの手助けを受けながら、「母親」としての気概のようなものを感じました。亡くなる二日前のご様子を振り返っても、やはり「母親」としての姿勢のようなものを感じさせてくれていたようにも思います。この方の、生きる目的は、「母親としての自分で在ること」だったのかもしれませんが。

「人に迷惑をかけたくない。」という言葉は高齢者からよく聞く言い回しです。私の母（77才）も、よく言っています。他者の手助けを受けることは「迷惑」なことなのだろうか、と疑問に思うことがよくありますが、やはり手助けを受ける側には、気兼ねが起こるのだろうと推測します。

私の父は、二年前に亡くなりました。7月下旬に「肝不全」の状態を起こし、お盆までもつかどうか・・・と言われましたが、亡くなったのは10月でした。毎日が覚悟の時で、私は、仕事が終わってからは、1時間ほどかけて父の病院に足を運びました。その時にできることは、それしかなかったからです。母は、私の疲れも気遣って、「悪いね。」と言葉をかけてくれていました。けれども、今になっても、あの時、父のもとへ足を運ぶことができたのは良かったと思います。病床で、皮膚の色がすっかり変わってしまった父を見つめるのは、辛い

ことでもありました。若く元気な時の父を思い浮かべながら、その時々にかかる私の周辺あれこれについて、父に問いかけたものでした。父なら、何と云うだろう・・・身動きがとれない沈黙の父と私。間もなく命尽きるであろう父と、元気な私。まるで、闇に向かう父と、光の中にいる私かのような、立場の違いを感じます。けれども、光をもらっていたのは私だったと思います。

人と人との関係は、いつでも対等です。一見、助けられている、と見えている人が、助けているように見えている人の力を引き出しているということはよくあることです。「お互い様」であるし、誰かの中にある「弱さ」は、他の誰かの「強さ」を引き出す力なのかもしれません。

助けたり、助けられたり。支えたり、支えられたりする関係は、「迷惑」ではないように思います。そして、人はいつでも一人ではない。

もし、気兼ねから、或いは他者への思いやりから、「人に迷惑をかけたくない。人の世話にはなりたくない。」という言葉が出てしまうのなら、どのような言葉でそれが迷惑ではないと伝えたら良いのでしょうか・・・

この4月から、私の配属先が変わりました。地域包括支援センターでの仕事をしています。要支援1・2の人たちの介護サービス利用に関して担当するセンターです。もし、竹中さんの地区の包括支援センターだとすれば、私は竹中さんのお母さんに関わる可能性があります。その時、お母さんにどのような言葉でご挨拶するのでしょうか。

「出会いとご縁に感謝します。」このような言葉になると思います。人生の先輩から、私はいつでも「ありがとうございます。」をいただいております。

誰かの存在が、生きる目的であったら素晴らしいと思います。

どうぞ、ご家族の皆様、良い時間を過ごせますように・・・

木村 晃子



竹中 尚文 様

お坊さんとケアマネさん



差出人 木村 晃子

竹中 尚文 様

すっかり、ご無沙汰をしておりました。お盆も過ぎて、北海道は、朝晩涼しくなりました。早くも秋を感じています。気がつけば9月もすぐそこです。

ご無沙汰していた理由は、ただ一つです。4月に仕事の配属先が変わり、私の仕事の量がずいぶんと増えたことで、なかなか時間に余裕がなくなっていました。振り返ると、4月から6月までは、ほとんど休む間もなく、仕事に追われる日々でした。それでも、終わらない仕事如山積みになっていくのです。今振り返っても、仕事以外に自分が何をしていたか、記憶がありません。記憶がないのではなく、仕事以外には何もしていなかったのだと思います。

無我夢中の毎日で、心も体も停止寸前のところまで駆使していました。エンジンストップの危機を回避できたことは良かったと思っています。これまでの人生の中で、初めて「過労死」という言葉を身近に感じた時期でした。「頑張り過ぎるな。」「無理をするな。」と言葉をかけてもらっても、最低限のマスト事項が

進まず、何としても仕事を片付けなくてはならない、という思いの一心でした。今思うとゾッとします。幸いに、一緒に暮らす娘たちの心配があって、我に返ることができました。何をすることも、体が資本であることは言うまでもありません。体を壊さずに生きていることが大事だと痛感しています。

配属が変わったと言っても、仕事の内容としては、軸の部分では変わりません。ただ、これまでは、担当するケースを、最大35名として、地域に暮らす高齢者の自宅での生活を支援してきましたが、今は、ケースの支援だけではなくなりました。地域包括支援センターという機関は、介護サービスを利用する高齢者の担当だけでなく、地域の高齢者に関する総合相談（なんでも相談）の窓口になっているので、担当ケース以外にも、地域から寄せられる相談ごとに、日々対応していくことが重要な仕事なのです。

寄せられた相談については、自分たちの機関だけで対応していくことができる場合の他、関係機関（主に高齢者の支援機関）や、領域違いの分野（高齢者支援以外の機関）との連携をしながら対応していくことが必要な場合があります。連携先は実に多数あるのです。連携先のそれぞれには、その機関や、分野、組織によって独自のルール（いわゆる業界ルールのもの）があります。このような、独自のルールや価値観が相手先には存在しているということを理解しつつ連携をとることの難しさを感じています。

何につけても、「変化」を嫌う傾向の人は多くいます。自分たちのルールと違うことをされては、拒否反応がでてしまう場合もあります。「変化」というのは、人が生きていく上での必然とも思いますが、一方で、普遍的なこともあります。どうしたら、人間関係や、仕事上の連携ということに、互いのルールの主張ではなく、折り合いをみつけながら協力しあっていくということがうまくできるのでしょうか。最近の悩みは、専らこのあたりのことでした。

「みんなちがって みんないい」は、金子みすゞ の有名な詩の一節ですが、現実社会では、それほど、世の中は多様性を認めていないのではないのでしょうか。色々な人が存在しながら、生きていくために、或いは同じ目的のために協力しあっていくために、私たちは何を心得ておくと良いのでしょうか。

この時期になると、今はもうお亡くなりになられた戦争体験者の方のお話を思い出します。シベリア抑留された方の体験談。特攻隊だった方の体験談。その時には、「国のために戦うこと」が唯一絶対の価値観だったこと。すさまじい環境での体験が、戦争を二度と起こしてはいけないことだという価値観に変化したことを語られていたことを思い出します。昭和20年の終戦から、日本は戦争をしない国と変化しました。その変化によって平和が維持されてきました。これからも、この平和が保たれるように、「変えてはならぬもの」があるように思います。

変わること、変わらないこと、変えること、変えてはならないこと。刻々と流れる時間の中で、人と人が競い合わずに生きていくことができれば良いと思っています。仕事の中で、暮らしの中で・・・

少々お疲れモードな毎日でしたので、お手紙が遠のきました。そちらは、まだまだ暑い日が続くことと思います。どうぞ、ご自愛ください。

木村 晃子

2017年8月

2017年8月20日

木村 晃子 様

竹中尚文

拝復

木村さんは忙しかったのですね。少し、心配していました。でも、いっしょに暮らす娘さん達がブレーキを掛けてくれた様子で、いい存在ですね。

こちらは、まだまだ酷暑です。田圃で農作業をする人たちも、さすがに日中は昼寝をしています。昨日、大阪の梅田(JR 大阪駅周辺の地名)で都会の中に作られた庭園(ミ二田圃や畑)で、午後2時頃に農作業をしている人たちがいました。

「死ぬぞ!」と思いました。おそらく9時5時で仕事をしているのでしょうが、通常ではない仕事の時間と言えます。私の知っている農作業の夏の通常の間は朝5時から10時までと午後5時から7時までだと思います。「通常」というのは、状況や当事者によってコロコロ変わるものなのでしょうね。

木村さんの仕事の変化は、ご自分の仕事をしてきた世界と他の世界の調整がかなりあるようですね。自分の世界の住人はその世界だけで生きているのではなく、他の世界との関わりを持つことになりますね。そこで、誰かがその調整をしなくてはなりませんね。いわば国と国の関係調整をするようなものでしょうか。国が違えば、言葉が違いますね。社会の成り立ちも違うからルールも異なりますね。でも、同じ人間が暮らしているのだから、無関係ではられない。そうすると誰かが関係がスムーズにいくように調整しなければなりませんね。私たちが暮らしているこの社会は、何気なく暮らしていますが、いつも誰かがそうやって調整をしてくれているのですね。木村さん、ご苦労さまです。

私たち宗教者は、いつも誰かに自分が遇った素晴らしい教えを伝えねばならないという責務を負った職業だと思います。布教というのは、大航海時代の宣教師だけのものではなく、すべての宗教者の務めだと思います。当然、私も親鸞聖人の教えを人々に伝えねばならないのですが、私の導きで親鸞聖人の教えに出遭った人はいません。かつては、「あなたは違う、本当はこうだ」というような私の言動があったかもしれませんが。今はというと、あきらめたのではありませんが、私の力で人は変えられないと思っています。たとえ人が変わっていても、それは私の力ではないのです。私の力で変えられるのは自分だけだと思います。それすら難しいものですが。あきらめたのではないと申しましたが、それは相手が何を言っているのか、どんな人であるのかを理解すべきであると思っています。自分との違いは何なのか、それは私が歩み寄れる相違であるのかと考えるべ

きだと思っています。それが私にとってあきらめないということです。

木村さんのような立場だと、そこにはクライアントというような人がいらっしゃると思います。クライアントの意向があるから折衝が始まるのでしょうか。簡単に、そうかそうかといってクライアントの不利益になる結果にしてしまうわけにもいかないでしょう。でも、クライアントの利益は私のルールの中でだけ保証されるとは限らないでしょう。他者のルールの中でもクライアントの利益が見いだせたら、任せてみてもいいかもしれません。

私の友人の失恋話をしましょう。ずいぶんと昔のことです。友人には結婚を考えていた恋人がいました。彼女はその友人に、自分は他の人と結婚をしたいので別れてくれるようにいいました。友人は自分と結婚をした方が彼女は幸せになると思いました。いくら考えても彼女が他の人と結婚をしてもうまくいくはずがないと考えました。しかし、友人は彼女の決断を受け入れるしかないのです。典型的な失恋です。友人は、自分を見つめ直すいい機会になったのだらうと思います。だから今の彼はとてもいい人生を歩んでいるように見えます。いつの時代も失恋は人を育てるものだと思いますが、失恋を勝負に負けたと考える人がいるそうです。そのような理解には人の変化もありませんし、新たな世界を知る機会も失われるでしょう。

仕事でも勝ち負けと考えて、負けられないための手立てに専念する人たちもいます。負けられないけれど、変化はありません。エラーを恐れる人に改革者はいません。変化を望まないようにする仕事に明日はないでしょう。今日の繰り返しです。そのような変化を望まない人と共有の事態を抱えたときに、困ってしまいますね。私も変化するし、あなたも変化をする、そこに誰も知らない明日があるように思います。但し、それは私の期待を裏切る明日であるかもしれないと覚悟しておかねばなりません。

今年はどんな秋になるのでしょうか。多雨の夏の後に来る秋はどんな秋なのでしょう。農作物の不作が心配されますが、季節の移ろいを楽しみに待ちましょう。どうぞお元気で。

合掌